

正誤表

頁	行	誤	正
二八	八	司法職員總數には	辯護士を含まず
四	八	普關庄	普關店
六〇	三	自己轉移入墾	民間轉移入墾
八一	一一	四、〇三八、七〇六町	三、〇三八、七〇六町
九七	一	鐵業出願	金鑛數
一四五	一〇	組合員數 千円	千円削除

覽便勢現鮮朝

版年十和昭

府督總鮮朝



序

本書は朝鮮の現勢を紹介せんが爲め、  
數字を以て簡明に表示し、併せて内地  
及外地と比較對照したものである。

昭和十年九月

# 朝鮮現勢便覽

## 目次

一、土地	一
二、氣象	六
三、人口	一一
四、行政	一九
五、司法	二七
六、警備	三九
七、財政	四五
八、專賣	五三
九、農業	六一

目次

目次

一〇、林業	八〇
一一、鑛業	九〇
一二、工業	一〇〇
一三、水產	一〇七
一四、商業	一一九
一五、貿易	一二四
一六、金融	一四〇
一七、教育	一五二
一八、宗教	一六〇
一九、衛生	一六六
二〇、交通	一七三
二一、遞信	一八九
二二、社會事業	二〇一

# 朝鮮現勢便覽

昭和十年版

## 一 土地

地勢 朝鮮は亞細亞の東南に斗出せる一大半島にして、地勢南北に長く東西に短く、其形恰も兎の跳るに似て、東經百二十四度十一分より百三十度五十六分二十三秒・北緯三十三度六分四十秒より四十三度三十六秒の間に位し、面積二十二萬七百七十六方呎、東は日本海に臨み、南は朝鮮海峡を隔て、九州及中國と對し、北は鴨綠江を以て滿洲國及露領沿海州に界して居る。東部海岸には元山・城津・清津・羅津・雄基等の諸港あり、南部及西部海岸は島嶼散布し、岬灣出入し、釜山・麗水・木浦・群山・仁川・龍塘浦・鎮南浦等の良港がある。地勢は長白山脈東北より西南に連りて北方の國境を擁し、其の一脈南に延び平安南北、咸鏡南北四道の境を劃して江原道に入り、東海岸線に沿うて南に走り、半島の脊梁を成して居る。脊梁山脈以東の地は斜面急峻にして大川平野乏しきも、以北は比較的緩斜にして處々に平野多く、鴨綠江・大同江・臨津江・漢江・錦江・蟾津江・洛東江等あり、舟楫の便、灌溉の利に富み、地味概ね肥沃で、農耕發達し、人口

稠密である。

面積 朝鮮全土の面積は二十二萬七千七百七十六方<sup>方</sup>秆(一萬四千三百一十二方里)で、わが本州より滋賀縣の面積を除いたものに略ぼ匹敵して居る。各道中で最も面積の廣大なるは咸鏡南道の三萬一千九百七十八方<sup>方</sup>秆(九州より鹿兒島縣の面積を除外したものに略ぼ等し)で、その最も狭小なるは忠清北道の七千四百三十四方<sup>方</sup>秆(宮崎縣の面積を除外したものに略ぼ等し)である。

各道面積

京畿道	二二,八二二	慶尙北道	一八,九八七	江原道	二六,二六一
忠清北道	七,四三四	慶尙南道	一二,三〇五	咸鏡南道	三二,九七八
忠清南道	八,〇九九	黄海道	一六,七三〇	咸鏡北道	二〇,三四六
全羅北道	八,五六一	平安南道	一四,九八	計	二二〇,七七六
全羅南道	一三,八九一	平安北道	二八,四四三		

面積比較

朝鮮	二二〇,七七六	内地	三八二,三四	臺灣	三五,九七四
樺太	三六,〇九〇	關東州	三,七五三	南洋群島	二,一四九



經度及緯度

土地	臺灣		內地		朝鮮				
	北緯	東經	北緯	東經	北緯	東經			
	極北	極西	極東	極南	極西	極東	極北	極南	極西
臺北州基隆市彭佳嶼北端	澎湖廳望安庄花嶼西端	臺北州基隆市棉花嶼東端	小笠原島沖島島南端	沖繩縣八重山郡與那國島西崎	根室支廳占守郡占守島東崎	咸鏡北道穩城郡柔浦面北端	全羅南道濟州島大靜面馬羅島南端	平安北道龍川郡薪島面馬鞍島西端	慶尙北道鬱陵島竹島東端
二五・三八	一一・四五	一二・〇六	一〇・二五	一三・五六	一五・三〇	四三・〇〇	三三・〇六	三四・二一	三三・五六

土地

樺太

北緯	東經	極東	極西	極南	極北
國境	西能登呂岬	東海岸北知庄岬	海馬島西端(釣鐘鼻)		
		一四四・四四	一四一・二三	四五・五三	五〇・〇〇

關東州

北緯	東經	極東	極西	極南	極北
		貔子窩海洋島會灣西屯南砦子東端	旅順山東會西湖嘴屯蟒島	旅順方家屯會單家屯圓島	普關庄朝陽寺會宮家屯
		一二〇・五八	三八・四〇	三九・三四	一七二・一〇

南洋群島

北緯	東經	極東	極西	極南	極北
		ヤルート支廳區ミレー島ナリーキリツク島	パラオ支廳區トコベイ島	ポナベ支廳區グリーニツチ島	サイパン支廳區ウラカス島
		一三二・一〇	一三一・一〇	一一・一五	二〇・三二

緯度比較

木	浦	岡	全	州	子
	三四・四七 <small>度分</small>	三四・四三 <small>度分</small>		三五・四九 <small>度分</small>	三五・四四 <small>度分</small>

元	平	鎮	海	春	京	仁	清	馬	光	釜			
山	壤	浦	州	川	城	川	州	山	州	山			
三九・一〇	三九・〇一	三八・四四	三八・〇二	三七・五三	三七・三四	三七・二八	三六・三八	三五・二一	三五・〇九	三五・〇六			
水		石	相	新	福	長	名		古	屋			
澤	卷	川	湯	島	崎	屋	三九・〇八	三八・二六	三八・〇二	三七・五五	三七・四七	三六・四〇	三五・一〇
會	雄	中	清	羅	新	龍	咸	公	群	大			
寧	基	江	津	南	州	浦	興	州	山	邱			
四一・二六	四一・二〇	四一・四七	四一・四七	四一・四三	四〇・〇六	三九・五六	三九・五五	三六・二七	三五・五九	三五・五二			
函				秋			前	福					
		館			田	橋	井						
		四一・四七			三九・四二	三六・二四	三六・〇三						

## 二 氣 象

●**氣温** 年平均氣温は南部海岸攝氏十三度餘にして、北進するに従ひ遞減し、中央部京仁地方は十度内外なるも、國境附近に於ては四度乃至三度となる。東部海岸は西部海岸に比すると氣候温和にして、夏季を除き約二度内外高温なるを常とする。これは西部海岸は冬季北西季節風多きも、東部海岸は脊梁山脈の爲風勢微弱、且海水温度の西部海岸に比し高温なるに因る。寒氣は南北に於て大差あるも、暑氣は其差が極めて少い。この季節風の影響を受けて冬期は三寒四温が顯著に現はれる。

●**風** 冬季は大陸方面より來る風が朝鮮附近に於て北西風と爲り、夏季は一般に南偏の季節風と爲り、兩季節風の交替期たる春秋の候は風向區々にして一定しない。冬季は空氣一般に乾燥して天氣晴れ、氣壓の傾斜概ね急峻に風力強きも、夏季は濕潤にして曇天雨天の日多く、且氣壓の勾配緩なるを以て風勢が弱い。西部海岸は冬季北西風を受くるを以て風力強きも、東部海岸は脊梁山脈に遮らるゝ爲め風勢弱く、概して風勢は沿海に於て強く内陸に於て弱き傾向がある。

●**雨** 雨の年量は概して少く、全土の大半は八百乃至千耗を示し、南東部海岸は稍々多く、北部並に北西方に至るに従ひ遞減し、釜山より元山に至る沿岸は年量千五百耗、中部は約千耗、西部海

岸は九百乃至千耗を測るも、北部地方は遙に減少して七百耗内外となる。咸鏡南北道の高原地方は最も寡雨にして年量五百耗に満たざる處あり、降雨は季節によりて差異甚しく、十月より翌年三月に至る間は乾燥期にして雨量少く、六月より八月に至る間は降雨期に屬する。南部地方に於ては降雨最盛期は七月なるも、東部海岸の北部は八月にして、時に九月に互る。各地方を通じて降雨期と乾燥期とに截然たる區別あるは、半島氣象上の一特色である。

霜 初霜は北部地方に在りては九月上旬に之を見るも、他は概ね十月下旬より十一月中旬の間にあり、四月中に終るを一般とし、北部地方に在りては五月に入りて終るを常とするが、南部に在りても往々五月中旬晩霜を見ることがある。

霧 朝鮮近海は到る處濃霧を發生し、就中最も多きは多島海附近にして、濃霧日數一年中七十日内外に達し、西部近海、北東部沿岸地方之に亞ぎ、其他は二十日乃至五十日の間にあり、濃霧は沿岸に近づくに従つて減少し、内陸に入りては殆んど皆無となり、冬季に於ては概ね之を見ざるも、初春より漸次發生して晩春から初夏の候に最盛を極め盛暑期に入るに及びて減退する。

雪 降雪期は年々遅速あるも、初雪は北部高原地方に最も早くして十月下旬に、他は概ね十一月に、南東海岸地方は最も晩くして十二月下旬に之を見る。終雪は北部國境地方最も晩くして四月末となり、釜山地方最も早くして三月上旬、其他は三月中旬乃至四月中旬の間にある。冬季は一

般に雨雪量少きを以て積雪一、二尺に及ぶは北東部の山地に限られ、中部以南の平原に於ては五寸を越ゆること稀である。

これを要するに、朝鮮の氣象は大陸の影響を受くること多く、内地に比して寒暑の差違は著しいが、其地勢が南北に長く略ぼ九州の南端より北海道の北端までの間に於て見る寒暑と大差ない爲め、動植物の分布も亦内地と朝鮮とは相似た所が多く、従つて内鮮人相互の移住同化と經濟的提携には極めて好都合である。

氣象表 (昭和八年)

朝鮮

(本表中※印は増、×は減、△印は零度以下を示す)

測候所	氣 温 (攝氏)				降 水 量 (種)			風 速 度 (米/秒)		天 候 日 數		
	平均	平均の差	最高極	最低極	總量	平均の差	最大日量	平均	最大	晴	快降水	
釜 山	七六・一	一三・八	※〇・二	三三・二	△二・〇	壹一、八九・六	※四八七・四	二〇三・〇	三・〇	一三・三	壹	101
木 浦	七六・九	一三・〇	×〇・二	三三・〇	△〇・一	七四一、三三・二	※二七一・八	一四四・四	三・九	二三・〇	二五	一四

全	州	京	平	城	中
七六・八	七六・九	七六・三	七六・三	七六・三	七六・四
一三・〇	一〇・六	九・二	八・一	三・三	三・三
×〇・二	×〇・四	〇・〇	×〇・二	×〇・三	×〇・三
三六・四	三五・九	三五・九	三三・四	三三・九	三三・六
△二七・一	△二八・四	△三〇・五	△一九・〇	△四三・六	△四三・六
七五・一	七六・一	七三・一	七五・一	七八・一	七八・一
三九・六	四〇・八	九三・七	七四・三	九三・四	九三・四
×〇・九	×四三・三	×一九・一	×七三・三	×一九・二	×一九・二
八七・四	二五・二	一〇三・〇	七九・一	七九・九	七九・九
一・五	二・八	二・一	二・七	一・一	一・一
九六	一六七	一五二	二七〇	一三一	一三一
四七	七	八	七	四	四
二二	二七	二二	二七	二六	二六

内地

測候所	札幌	仙臺	東京	新潟	大阪
平均	七五・九	七六・二	七六・九	七六・四	七六・六
平均	七三・三	一一・一	一四・七	一三・一	一五・四
の差	×〇・三	×〇・一	×〇・八	×〇・五	×〇・三
極高	三三・六	三三・九	三五・四	三五・六	三五・二
極低	△三三・二	△九三・三	△五五・四	△七七・七	△四九・九
湿度	七三・一	七六・一	七二・一	七六・一	七五・一
總量	一四・五	八・四	一〇・一	一八・七	一三・一
の差	×一〇・三	×三三・五	×五五・九	×四六・三	×三三・一
最大	七三・九	四三・九	一三・二	九八・八	九三・八
平均	三・〇	一・五	三・一	五・〇	二・六
最大	一七・〇	一三・五	一五・一	二七・二	一八・六
快晴	一六	二六	四三	二二	四
降水	三三	一四六	一三八	二七	一三八

氣象集

下關 七三〇 一五四〇〇二 三三〇△五七 七三一,五八,五 × 三〇,〇 二〇四,三 四,五 二,四 六 一四八  
 高知 七六一,六 一五八〇〇二 四四△五七 七六一,五〇,二 × 一九九,三 一六九,四 一,五 八,八 四七 一六一  
 鹿兒島 七六一,六 一六八〇〇一 三三八△四九 七六一,七二,一 × 四六,九 一〇三,六 三,〇 一九,一 四六 一六六  
 那霸 七六〇,五 三三〇 × 〇,一 三二,五 九,三 八四二,三五,〇 × 一四四,三 三六,三 五,九 三七,四 一五 一九二

臺灣

臺北 七六〇,六 三三〇〇〇四 三七,七 六,〇 八三一,八四二,七 × 二九四,〇 一九〇,〇 二,九 九,八 二八 一八四  
 臺南 七五九,四 三三四〇〇三 三六,四 七,六 八〇一,五四,五 × 一八八,三 一九二,一 三,〇 一三,四 八五 七三

樺太

大泊 九五九,三 二,九 〇,〇 二七〇△三四,二 八〇 六九〇,六 × 四,〇 六〇,四 四,五 二五,八 四四 一五六  
 豐原 七五九,二 三,二 × 〇,二 三一,△三〇,六 八〇 八三一,一 × 六,五 七五,五 四,八 二六,三 一 一六八

關東州及鐵道附屬地

旅順 七六三,一 一〇,三 〇,〇 三五,二△一六,四 六六 四〇六,二 × 一七五,七 七七,九 三,一 一七,五 九五 六八  
 新京 七六一,一 四九〇〇,三 三七,一△三八,四 壹壹 六五四,五 × 一〇,一 七三,四 二,二 一三,四 一〇一 一〇一





勵を加へ、各地に安全農村及び集團部落を設置してその定着保護を計つて居る。

現住戸口 (昭和八年末現在)

(内地人中には臺  
人五人を含む)

世帯數

人  
男  
女  
計

男女割合  
(女百に付男)  
人口密度  
(一平方軒に付)

内地人	一三五、七〇七	二七八、五二四	二六四、五八〇	五四三、一〇四	一〇五・二
朝鮮人	三、八〇五、六八四	一〇、二六九、二八六	九、九三六、三〇五	二〇、二〇五、五九一	一〇三・三
外國人	一〇、六五八	三三、七三二	八、八九五	四二、六二六	三七九・二
計	三、九五二、〇四九	一〇、五八二、五四二	一〇、二〇九、七八〇	二〇、七九二、三二二	一〇三・六

人口比較

朝鮮	内地	臺	灣	樺	太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
人口總數	三〇、七九、三三一	六、四四、〇〇五	五、〇六、五七	三〇、二九八	一、四八、七五	八二、三五三	
人口密度	九四・二	一六	一四・七	八・三	三七五・四	三六・二	
男女割合 (女百に付)	一〇三・六	一〇一・〇	一〇四・六	一二五・三	一四四・二	一二三・六	

備考 内地は昭和五年十月一日國勢調査の人口による。

職業別人口 (昭和八年末)

職業	朝鮮		内地人	計
	朝鮮人	外國人		
農業、林業及牧畜業	26,912	8,655	35,567	35,567
漁業及製鹽業	33,033	6	33,039	33,039
工業	32,433	8,057	40,490	40,490
商業及交通業	13,325	18,433	31,758	31,758
公務及自由業	6,560	1,633	8,193	8,193
其他の有業者	12,213	4,633	16,846	16,846
無職及職業を申告せざる者	35,071	6,121	41,192	41,192
計	197,571	137,611	335,182	335,182
内地	141,150	5,800	146,950	146,950
臺灣	1,197,073	26,642	1,223,715	1,223,715
樺太	41,093	14,421	55,514	55,514
關東州及鐵道附屬地	454,946	55,577	510,523	510,523
南洋群島	31,693	1,557	33,250	33,250

備考 臺灣は昭和五年十月一日國勢調査にして、内地は昭和五年國勢調査による抽出調査なり。

人口動態比較 (人口千に付) (昭和八年)

	出生率	死亡率	結婚率	離婚率
内地人	二四・一	一五・四	三・九	〇・二
朝鮮人	二九・二	一九・四	六・二	〇・三
外国人	六・六	六・九	〇・五	〇・〇
計	二九・〇	一九・三	六・一	〇・三
内地	三・六	一七・八	七・二	〇・七
臺灣	四三・七	一九・五	八・七	〇・八
樺太	三七・四	一九・三	五・八	〇・五
關東州及 鐵道附屬地	二五・二	一四・六	四・三	〇・一
南洋群島	五二・〇	二五・七	一九・七	六・二

備考 南洋群島の婚姻・離婚率は本地人に就いての調査なり。

主要都市人口 (昭和八年末)

朝鮮

都市名	位 置	總人口	內地人	朝鮮人	其 他
京城府	京畿道	三八二,四九一	一〇六,七八二	二七〇,五九〇	五,一一九
釜山府	慶尙南道	一五六,四一九	五一,〇三一	一〇五,一九七	二〇一
平壤府	平安南道	一五〇,七七一	二〇,〇五二	一二九,二九七	一,四三二
大邱府	慶尙北道	一〇五,七九七	二七,六三八	七七,六八九	四七〇
仁川府	京畿道	七二,八六一	一一,六九一	五九,三二二	一,八四九
木浦府	全羅南道	五三,一六五	八,四二四	四四,五三五	二二六
元山府	咸鏡南道	五二,五六三	九,六四五	四二,一〇八	八一〇
開城府	京畿道	五二,五二六	一,五六二	五〇,八〇〇	一六四
新義州府	平安北道	四九,八三九	八,〇三三	三六,一八五	五,六二二
鎮南浦府	平安南道	四三,八四四	五,四四八	三七,九〇六	四九〇
咸興府	咸鏡南道	四二,一九八	七,七三五	三四,一六五	二九八
清津府	咸鏡北道	三七,〇三〇	九,三五八	二六,九七九	六九三
群山府	全羅北道	三五,九九九	九,一〇六	二六,五〇八	三八五

人口

人口

馬山府	慶尙南道	二七、四七〇	五、一八七	三三、三二二	四一
全州邑	全羅北道	三九、二一〇	五、六七三	三三、三六七	二七〇
濟州邑	全羅南道	三五、六五〇	六六八	三四、九七二	一〇
光州邑	全羅南道	三五、一四八	六、六四七	二八、三七八	二二三
大田邑	忠清南道	三四、〇七九	八、四七一	二五、四六一	一四五

内地

横濱市	神奈川縣	六八、六〇〇	廣島市	廣島縣	二八九、二〇〇
岡山市	岡山縣	一五七、五〇〇	小樽市	北海道	一五一、一〇〇
門司市	福岡縣	一一三、五〇〇	宇部市	山口縣	七三、三〇〇
山形市	山形縣	七〇、七〇〇	四日市市	三重縣	五四、五〇〇
今治市	愛媛縣	五一、五〇〇	福島市	福島縣	四八、三〇〇
鳥取市	鳥取縣	四三、三〇〇	岸和田市	大阪府	三六、九〇〇
米子市	鳥取縣	三五、八〇〇	山口市	山口縣	三三、二〇〇

臺灣

	總數	內地人	本地人	其他
臺北市	二七六、三八八	七九、四九一	一八二、二〇九	一四、六八八
臺南市	一〇六、二四三	一五、五八〇	八七、二六五	三、三九八
基隆市	八一、四四三	二〇、七四五	五六、九九三	三、七〇五
高雄市	七六、三八〇	一八、六六七	五五、八九一	一、八三二
新竹市	五一、九二〇	五、八一九	四五、五六六	五三五
豐原	三三、四七四	三三、二五九	—	二二五
大泊町	三〇、五六一	三〇、四〇一	—	一六〇
關東州				
大連市	三〇七、八七一	二二七、四六三	一八八、〇〇三	二、四〇五
西山會	三八、三五八	二九八	三八、〇五七	三
方家屯會	三四、九六七	一八七	三四、七七五	五

人口

人口

總人口

(連接滿洲街を含む)

鐵道附屬地

一八

總數 内地人

連接滿洲街

奉天	奉天警察署管内	四五二、四三二	五六、九五五	三八、〇二〇	三九四、四七七
安東	安東警察署管内	一七五、五二二	六七、〇八一	二二、五九九	一〇八、四三〇
營口	營口警察署管内	一一二、二九四	六、四六一	三、四五五	一〇五、八三三
新京	新京警察署管内	一九三、五五八	五一、二三六	一三、七二五	一四二、四三二

南洋群島

サイパン島	サイパン支廳管内	一八、二三四	一四、六七四	三、三三六	一三二
-------	----------	--------	--------	-------	-----

備考 内地の都市人口は統計年鑑に據る。



## 四行 政

統<sup>・</sup>治 明治四十三年八月、日韓併合の條約公布せられ、舊韓國は完全に我國領土の一部となり、韓國の國號を改めて朝鮮と爲し、同年十月一日、朝鮮總督府を設置し、朝鮮總督をして天皇に直隸し、命を受けて陸海軍を統率し、朝鮮統治に關する諸般の政務を統轄せしむることとなり、其諮問機關として、朝鮮人中の達識の士を探りて、中樞院を設け、地方にも道に參與官、府郡島に參事(參事は今は之を廢す)を置いて地方官の諮問に應ぜしめたのである。當時の新政の方針は秩序を回復して治安を維持し、庶務を更新して疲弊せる民心を作興し、教育人文の發達を計り、特に産業を開發して頽廢せる邦土を振興するにあつたが、爾來二十五年、各般の施設漸く其緒に就き、文化の進歩、經濟の發達、民度の向上洵に隔世の感あるは、中外の齊しく認むる所である。

最初朝鮮總督は陸海軍大將を以て之に充つる制度であつたが、世運の進展に従つて、大正八年武官總督の制を改め總督の軍隊統率權を廢した。現制に依れば、總督は朝鮮の最高官廳であつて、朝鮮を管轄し諸般の政務を統理し、朝鮮の統治は悉く其責任に於て實施せられる。但し軍事に關しては別で、總督は安寧秩序保持の爲め必要と認むるとき、朝鮮に於ける陸海軍の司令官に兵力

の使用を請求し得るのである。朝鮮統治の方針は一視同仁の大義に遵ひ、大正八年總督府官制改正の際の詔書にも、民衆の愛撫に秋毫の差異を設けぬ旨を宣明あらせられて居る。帝國憲法は併合と同時に當然朝鮮に効力を延長せられ、民衆の生命財産の自由は憲法に依つて保障せられるに至つた。しかしながら、朝鮮と内地とは著しく其事情を異にして居るので、内地に行はるゝ法律を直ちに朝鮮に延長施行することは困難であり、さればと言つて、朝鮮に施行する目的を以て定むる法律を、悉く帝國議會の協賛を受くることも、諸種の關係から適當ならずと認められ、朝鮮に於ては原則として法律を施行せず、帝國憲法上法律を以て施行すべき事項と雖も、總督が上奏裁可を得て公布せる制令を以て定め得べきことに法律を以て規定せられ、現在民法、商法、訴訟法等の私法典を始め、各種の行政法規は多く制令を以て定められ、朝鮮の特殊事情に即した制度が實施せられて居る。又總督は其職權又は特別の委任に依り朝鮮總督府令を發し、之に一年以下の懲役若し禁錮、拘留、二百圓以下の罰金又は料金の罰則を附することを得る。之を要するに、朝鮮は内地に對して特殊の法域を形成して居り、各省大臣の行政權は朝鮮に及ばないのが原則となつて居る。

**官署** 總督の補助機關として、總督府に親任の政務總監を置き、府務を統理し、各部局の事務を監督して居る。總督府には、總督官房及内務局、財務局、殖産局、農林局、法務局、學務局、警

務局を置く。

總督官房 秘書官室、審議室、人事課、外事課、文書課、會計課、臨時國勢調査課

内務局 地方課、土木課

財務局 稅務課、司計課、理財課

殖産局 商工課、鑛山課、水産課、燃料選鑛研究所、商工獎勵館、地質調査所

農林局 農政課、農産課、土地改良課、水利課、林政課、林業課

法務局 法務課、行刑課

學務局 學務課、社會課、編輯課、觀測所

この外、所屬官署としては、總督に隸し其諮詢に應ずる中樞院、總督の管理に屬し又は總督に直屬する選信、鐵道、專賣の三局、稅關、稅務官署(稅務監督局、稅務署)、裁判所(高等法院、控訴院、地方法院)及檢事局、供託局、監獄、營林署、濟生院、穀物檢査所、種馬牧場、農事試驗場、中央試驗場、獸疫血精製造所、警察官講習所、水産試驗場、林業試驗場、帝國大學、諸學校(京城法學專門學校、京城醫學專門學校、京城高等工業學校、水原高等農林學校、京城高等商業學校、師範學校)、感化院、永興學校、圖書館、林野調査委員會、朝鮮史編修會、經學院、明倫學院、朝鮮神宮、道・府・郡・島等がある。

本府廳及所屬官署職員數比較 (昭和八年末現在) (俸給國家支給のもののみを掲ぐ)

	朝鮮	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
總數	七八、三四	二五、〇九七	三、二六	一一、二八	八三
勅任官	七八	四七	一	九	一
勅任官待遇	二二	一	一	一	一
奏任官	一、三〇八	八〇〇	一〇八	一七一	三〇
奏任官待遇	九九	一五	一	八	一
判任官	一一、九七四	五、一八三	一、〇〇八	一、六四三	三〇九
判任官待遇	一八、八三九	七、一九七	四八六	五五	一
囑託	六〇三	五八一	一〇四	一九三	一七
雇員	一八、六二三	一〇、四二三	一、四〇九	一、五八八	四六五
其他	二六、六九〇	八六一	一	七、四五一	一

地方行政 行政上朝鮮全土を京畿道・忠清北道・忠清南道・全羅北道・全羅南道・慶尙北道・慶

尙南道・黃海道・平安南道・平安北道・江原道・咸鏡南道・咸鏡北道の十三道に區劃し、更に之を分ちて十四府、二百十八郡、二島、五十一邑、二千三百七十四面と爲す。之に道知事・府尹・郡守・島司・邑面長を置きて官廳事務の執行者たらしむると共に、公共團體の事務を執らしめ、道には知事官房・内務部・警察部を置き、各部長は道事務官を以て之に充て、産業の特に發達せる京畿道・全羅南道・慶尙北道及慶尙南道の四道には、内務警察の二部の外に、産業部を置き、參與官を以て産業部長たらしむ。

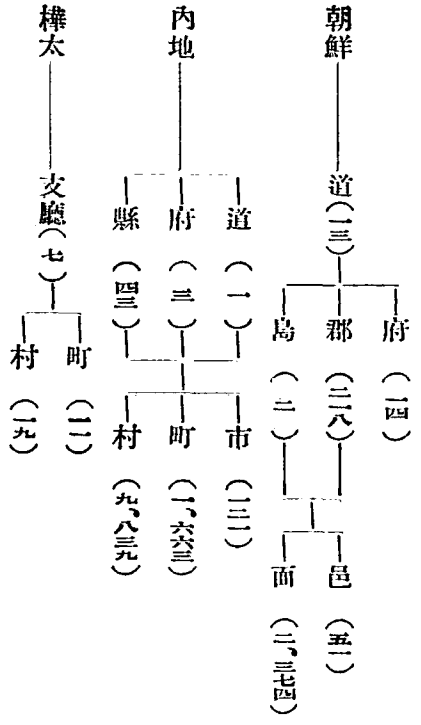
公共團體・地方公共團體としては、道・府・邑面・學校費・學校組合あり、法人たる道・府・邑面の區域は行政區劃に同じく、道に議決機關たる道會を置き、府に意思機關たる府會及教育部會を置き、更に之を第一教育部會(内地)、第二教育部會(朝鮮)に分ち、邑には意思機關たる邑會を置き、面には諮問機關たる面協議會を置く。學校費は普通學校其他朝鮮人教育に關する費用を支辨する爲め郡島に設け、學校費に關し諮問機關として學校費評議會を置く。學校組合は府以外の内地人の多數居住する所に内地人を以て組織し、學校組合會を設け自治的に小學校を設立維持し、高等女學校、實業學校等を經營して居るものもある。之を要するに、朝鮮に於ける地方制度は數次の改正を経て、漸次完全なる自治制度に近きつゝあり、以て民意の暢達が期せられて居る。尙ほ各道の行政區劃は左の如くなつて居る。

各道行政區劃表（昭和九年四月一日現在）

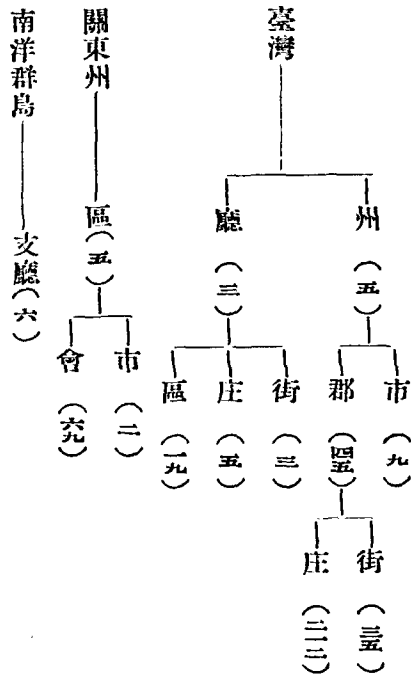
道名	所在地廳	行政區劃					
		府	郡	島	邑	面	洞里(町)
京畿道	京城	三	二〇	一	二	二四一	二七三〇
忠清北道	清州	一	一〇	一	二	一〇四	一五〇四
忠清南道	大田	一	一四	一	五	一七〇	二,二六三
全羅北道	全州	一	一四	一	五	一八三	一,八二一
全羅南道	光州	一	二二	一	五	二四九	三,一〇〇
慶尙北道	大邱	一	二二	一	五	二五〇	三,三二八
慶尙南道	釜山	二	一九	一	八	二三八	二,五九〇
黃海道	海州	一	一七	一	三	二二八	二,〇六七
平安南道	平壤	二	一四	一	一	一四六	一,九三八
平安北道	新義州	一	一九	一	四	一八九	一,四八〇
江原道	春川	一	二二	一	三	一七二	一,九七九

咸鏡南道	咸興	二	一六	—	三	二,九四三
咸鏡北道	羅南	一	一一	—	五	七〇
合計		一四	二八	二	五二	二,三三四
						二八,三五三

行政區劃比較 (内地は昭和八年四月一日現在、外地は同年十二月末日現在)



行政



備考 括弧内の數字は行政區劃數を示す。内地の舊郡は六百三十二なり。



## 五 司 法

裁判所 裁判所は朝鮮總督に直屬し、民事及刑事の裁判及非訟事件に關する事務を掌り、高等法院・覆審法院・地方法院の三階級より成立し、地方法院の事務の一部又は全部を取扱はしむる爲め地方法院支廳、又登記及公證の事務を取扱はしむる爲め地方法院出張所を設置し、且裁判所には檢事局を併置して檢察事務を掌らしめ、内地の三審制と同様である。朝鮮の裁判所は内地のそれと聯絡なく獨立して居るが、これは内地と朝鮮と法域を異にする自然の結果で、これ等の地域間に於ける法律關係の抵觸矛盾は、共通法と稱する法律の規定に依り之を調整して居る。

### 裁判所の構成

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州	南洋群島
地方法院	區裁判所	地方法院單獨部	區裁判所	地方法院	地方法院
覆審法院	控訴院	高等法院覆審部	地方裁判所	高等法院覆審部	高等法院
高等法院	大審院	高等法院上告部	—	高等法院上告部	—



民事訴訟調停事件

新受  
終局

朝鮮 内地(釋太を)  
一、〇四五  
一、〇五三

臺灣

關東州及  
鐵道附屬地

南洋群島

一、〇二〇  
一、二一八  
一、二一八  
一、二五八  
一、〇五四  
三三三

二  
一

第一審

新受  
終局

四、五、三、三五  
四、五、六、四、六  
二、二八、三、三一  
一、三、四、七、五、六

一、二、一、六、七  
一、二、七、四  
一、一、七、八  
一、三、八、八  
一、一、三、〇  
一、一、三、〇

一、二、一  
一、二、〇

民事訴訟事件

第二審

新受  
終局

二、二、七、九、七  
二、二、七、八、六  
一、九、一、二、一  
一、九、一、六、一、〇

一、一、七、二、四  
一、一、三、八、八  
一、二、三、二  
一、一、六、〇

四  
四  
四

第三審

新受  
終局

六、五、三  
六、五、三  
三、三、二、七、四  
三、三、五、五、四

二、二、〇、七  
二、二、〇、七  
二、三、三  
二、三、三

一  
一

朝鮮 内地(釋太を)

臺灣

關東州及  
鐵道附屬地

南洋群島

民事抗告

和解

督促

假差押假處分

一、六、七  
二、六、二  
三、一、九、五、八  
六、一、〇、九

七、四  
四、五

二、七  
三、五、一

一  
二、八

一、三、一、五、三  
三、五、〇、〇、七、九

一、四、三、二、七  
一、二、七、六

一、五、一

一、六、六、五、六  
七、七、四、三、八

二、八、二  
四、六、八

二、三

終局事件

強制執行	一六、二〇六	五一、八五七	一、二六一	一、二六	一〇
不動產競賣	一一、七五八	?	一、八六〇	二〇七	—
破產	四九	三、六二四	四八	一三	—
禁治產準禁治產及失踪宣告	四四	一、五四五	三七	—	—
非訟事件	五九、三四一	三八六、四〇七	一、三二六	三七八	—
民事共助	二、〇三三	二、八八二	二二五	二六	四五
執達吏	三三〇、九〇八	三、〇一六、四三五	八四、五一〇	一六、八七五	一、八九八
事務取扱	六一、七二七	三、一三〇、七一九	一九、六五一	一、八六五	一九
公證	—	—	—	—	—
確定日附	三八、三〇九	五一、九四八	六、〇二二	二、四二八	八三

登記事件比較 (昭和八年)

總數	件數	個數	朝鮮	內地 <small>(樺太を含む)</small>	臺灣	關東州及鐵道附屬地	南洋
	一、六〇一、九四九	四、八一九、五四九	五、八五二、一九七	二二、七二二、五六七	三、三〇二	二二、二二七	一六〇
	—	—	—	—	八九六、四二四	—	—

土	地	件數	一、五一五、一八六	五、〇七〇、三一九	一六、九六〇
	個數	四、六五九、二二八	一九、九三三、八一五	八五九、八七五	—
建	物	件數	七五、〇五六	五九八、五二八	—
	個數	一七〇、〇九三	一、三三五、五七八	三六、四二一	三、〇四五
船	船	件數	二八二	六、四〇四	一九二
	個數	三三八	七、四一三	二二八	—
營利を目的とせざる法人		件數	二、七八六	八一、一六九	一、四四九
商社會社	件數	七、九二一	八四、七八二	一、六一五	七二三
其他の件數	件數	七二八	一〇、〇八五	二二四	一五六

備考 營利を目的とせざる法人中には、産業・漁業・金融・輸出・工業・商業・森林組合並  
其聯合會等を含む。

刑事事件比較 (昭和八年)

朝鮮	内地 <small>(樺太を含む)</small>	臺灣	關東州及 鐵道附屬地	南洋		
檢事捜査事件	新受	二六、五二九	五〇二、五五一	二六、六七〇	二、五六九	三八八

司法

豫 審 事 件

終局	新受	終局	新受	終局	新受	終局	新受	終局	新受
一、二六、六五六	六二二	七〇八	五七、一五一	五、九六六	一一、六八四	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九
五〇、一九七四	六一六三	五、六〇一	一一、六五一	一一、三三八九	六、六七四	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九
二七、〇八三	一六〇	一六七	二、九二二	二、九九八	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九
二、五七六	—	—	一、五三二	一、四八五	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四
三七三	—	—	二、六六六	二、六九九	—	—	—	—	—

刑 事 訴 訟 事 件

第一審	第二審	第三審	終局	新受	終局	新受	終局	新受
五七、一五一	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九	一、六八九
一一、六五一	六、六七四	六、六七四	六、六七四	六、六七四	六、六七四	六、六七四	六、六七四	六、六七四
二、九二二	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九	三、八四九
一、五三二	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四	一、三三四
二、六六六	—	—	—	—	—	—	—	—

民 事 新 受 件 表

第一審	第二審	第三審	再 審	再 審	再 審	再 審	再 審	再 審	再 審
二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三	二、四、三六三
四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八	四、五、二九八
六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三	六、五三
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

明治四十三年 昭和八年

明治四十三年

昭和八年

督 促	一六六五	一三二、五三三	假差押假處分	二六五五	一六六五六
強 制 執 行	三七四	一五、九四四	不 動 產 競 賣	一四九	一一、〇四九
破 產	二	三三	禁 治 產 準 禁 治 產	一	四八
非 訟 事 件 (除登記事件)	三〇三	五九、四四八	共 助	五三六	一、九八八
民 事 爭 訟 調 停	一	一、〇四五			

第一審民事訴訟新受件數種類別表

	明治四十四年	昭和八年		明治四十四年	昭和八年
人 事	一九〇	一、二七四	土 地	四、四三〇	八、二二三
建 物	五二六	一、一九六	借 地 借 家	一	一、〇六六
小 作 關 係	一	六二三	船 舶	一八	一九
金 錢	二〇、五〇〇	二七、一〇八	米 穀	一、五九七	一、四二〇
物 品	四六五	七〇八	證 券	二六三	一七二
墳 墓	八八四	一	其 他	一、二二〇	三、六一七
計	二九、六三三	四五、三二五			

司 法

第一審刑事事件罪名別件數 (昭和八年)

罪名	受理		裁		判		其他	未濟
	前年	本年	刑の言渡	無罪除免訴	公訴棄却	略式命令		
總計	七,六五三	五,四二二	三,七四四	一〇,三〇三	一三〇	五	四,三三三	七七
刑法犯	一三,二八八	四八,三,八七〇	三,七四四	八,八五五	六	四	三,五七〇	五〇
放火	一三	九	一五	一	三	一	一	三
失火	四九	四九	四八	一三	一	一	四九	一
通貨偽造	四	三	三〇	二五	二	一	二	三
文書偽造	二二	一九	二二	一九	一	一	七	一
有價證券偽造	二四	二四	三三	三	一	一	二	一
印章偽造	八	八	八	八	一	一	一	一
猥褻姦淫	六五	一	六	六	一	一	四	九
姦通	五	二	五	五	一	一	一	二



賭博及富籤	四三	四	四八	四七	一元	一	一	一	三三	四	五
禮拜所及墳墓に關す	四	三	五	四	六	一	一	一	六	一	一
殺人	三六	三	二六	三五	二二	二	一	一	一	一	三
窃盜	五〇六	九	四、九三	四、八三	四、八三	八	三	一	一	一	一
強盜	三六	五	三七	三五	三九	五	一	一	一	一	一
詐欺	一、一八	八	一、一八	一、一八	一、〇〇	三	一	二	三	三	六
恐喝	一〇	九	六	六	七	一	一	一	一	一	七
横領	五三	二九	四九	四八	四六	四	二	一	三	一	七
其他	四、二七	九	五、一〇	四、一〇	四、二	三	一	三	二、六九	一	七
特別法犯	四、四〇	二	四、二一	四、三三	一、三四	三	一	六	四、七九	一	一
朝鮮阿片取締令規	八三	七	八四	八四	二九	一	一	一	六三	三	七
モルヒネ											
コカイン											
其鹽類取締に關する件	二九	三	二六	二五	三	一	一	一	三	一	四
警察犯處罰規則	一五	一	一五	一五	六	一	一	四	一	一	一
司											
法											

森林令規	四、五六	一〇	四、三五六	四、五三	六	一〇	一	一四、三七	六	二
酒稅令規	一三、〇八	六	一三、〇五六	一三、〇七	四	一〇	一	二二、九三	三	六
煙草專賣令規	二〇、七〇	一	二〇、七九	二〇、七〇	二六	一	一	七〇、六六	八	一〇
其他	一五、三〇	七	五、五三	五、四六	七	二	一	二四、〇六	五	八

登記 (昭和八年) (一)

	件數	個數	登録稅	謄本抄本の件數	手数料
普通	一、四四八、四八〇	四、四九三、二四六	八六三、〇九三	二五三、四一九	一三八、一八四
不動産及船舶	四〇、五九	八一、三六	—	—	—
登録稅を課せざるもの	一〇、四八五	二五、〇一九	—	—	—
政府自己の爲にする登記	—	—	—	—	—
其他の登記	二、七八六	—	五	六、九九八	五、二八九
營利を目的とせざる法人登記	—	—	—	—	—
商事會社件數	七、九二一	—	三三四、七九四	一一、七三三	六、四七四
商號、未成年者、妻、法定代理人及支配人登記	七二八	—	三、四六八	一、九五五	三、〇七二
計	一、六〇一、九四九	四、八二九	五四九、七〇九	二七四、一〇五	一四三、〇一九

登記 (二)

登録税を課せざるもの

普通

政府自己の爲にする登記  
其の他の登記

計

土地  
件数  
一、三七四、五四八

四〇、〇五二

一〇〇、五八六

一、五二五、一八六

四、三二五、五九二  
(六七、六七五)

八〇、一五三  
(三八六)

一五三、三八三  
(四三四)

四、六五九、二八  
(六八、四九五)

建物  
件数  
七三、六七四

四九三

八八九

七五、〇五六

一六七、三八

一、二四九

一、六二六

一七〇、〇九三

船舶  
件数  
二五八

一四

一〇

二八二

三〇四

一四

一〇

三三八

備考 括弧内の数字は土地建物を合併し一件として登記したるものにして内書なり。

監獄 (昭和八年)

入所

出所

年末現在

總數 三九、一七四

三八、九五〇

一九、一〇一

司法

三七

受刑者  
刑事被告人  
勞役場留置者  
携帶兒

新受刑者 (昭和八年)

刑名別	内鮮外人別		總數
	内 地 人	外 國 人	
死刑	三九〇	一三〇	五二〇
懲役	一一,三六六	一一,三〇〇	二二,六六六
禁錮	一〇,八一七	一,二二一	一一,〇三八
拘留	四一九	一八	五〇七
總數	一一,八六六	一二,〇六〇	二三,九二六

一四,八四九  
一五,五四一  
八,三八一  
一七五

一六,四三二  
一,九九九  
六七九  
一一

男

女

## 六 警 備

國防。陸軍常備隊は、第十九師團が咸鏡北道羅南に、第二十師團が京畿道京城に配置してあり、聯隊は咸興、會寧、平壤、大邱にも分駐して居り、又飛行聯隊が平壤に、陸軍要塞が鎮海灣(釜山を合)及永興灣に設けられてある。これ等の陸軍部隊はすべて朝鮮軍司令官の統率する所であつて、朝鮮軍司令官は兼ねて、朝鮮防衛の任務を有し、陸軍大將又は陸軍中將を以て之に親補せられる。別に朝鮮憲兵隊司令官があつて、憲兵司令官に隸して軍事警察を司る。朝鮮に於ける陸軍諸官衙には、朝鮮軍法會議、朝鮮陸軍倉庫、朝鮮衛戍刑務所、軍馬補充部雄基支部、陸軍造廠所平壤兵器製造所、陸軍兵器本廠平壤出張所、陸軍運輸部釜山出張所がある。鎮海は日露戰役當時我が艦隊の根據地たりし所であるが、現に海軍要港部が置かれて居る。鎮海要港部司令官は海軍中將又は少將を以て之に補し、天皇に直隸し、部下の艦船部隊を統率し、又海軍大臣の命を承けて軍政を掌り、作戰計畫に關しては軍司令部總長の指示を受く。海軍燃料廠平壤鑛業部は平壤郊外寺洞に在り、徳山海軍燃料廠の一部にして、吳鎮守府に屬し、石炭及煉炭の生産に關することを掌る。平壤鑛業部の製品は軍用の外、民間にも拂下げて一般の需要を充して居る。

警察。併合後の警察機關は統監府より幾多の變遷を經、警察官、憲兵の統合制の時代もあつたが

大正八年以後は現在の警察制度となり、朝鮮總督府に警務局を置き警察及衛生の事務に當り、地方に在りては道に警察部を置き、その下に警察署を置く。

警察署の管轄區域は行政區劃を基礎とし、一府郡に一警察署設置を原則とせるも、地方の事情に依り二警察署以上を配置せるものあり、昭和八年末現在二百三十四府郡島に對し二百五十一の警察署を配置し、警察署管内には派出所駐在所を設く。派出所は警察署所在地に、駐在所は警察署所在地外に置き、駐在所は一面一駐在所主義に據れるも、地方の事情に依りては一面に二箇所以上を設置せるところあり、現在二千四百四十六邑面に對し二千三百三十四箇所の駐在所及百九十七箇所の派出所を設置し、又國境警備其他臨時特に警戒を要する地點百七十六箇所に警察官出張所を設置して居る。

警察官養成機關としては、京城に警察官講習所、各道に巡查教習所ありて、警察官若は警察吏たるべき者に對して學術及實務を教授する。

警 察 官 署 (昭和八年末)

朝鮮	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
警察署	二五二	一〇	二三	一五

警察官駐在所	二、三三四					
警察官派出所	一九七	二、六九七	一、五三〇	一四三	三八五	二
警察官出張所	一七六					

警察職員 (昭和八年末) (△印は兼務)  
(者不示す)

内地人	朝鮮人	計	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
			三	一七	一	
警視部	四八	九	二四	三	七九	一
警部	三三八	八六	二四九	(△)一五	七九	一一
警部補	六〇四	一五四	二九三	二三	一五四	六
巡查	一〇、一六三	七、九三二	七、四九三	四八六	二、九九〇	九二
警手其他	—	—	警手三、二七〇	(△)五二七	巡補一、二六七	巡警四二
巡查一人 に付人口	—	—	四七〇・二	二九六・四	三三〇・七	六二三・八
(警手其他を含む)						

警備

犯罪件數及檢舉件數 (昭和八年)

刑 法	犯 人	犯 罪 件 數	檢 舉 件 數	檢 舉 人			
				總 數	內 地 人	朝 鮮 人	外 國 人
總	數	一八六、五〇〇	一七六、七九五	一九、九五五	六、八三三	一八五、三九〇	七四三
刑 法	犯 人	一四三、四八〇	一三三、六八四	一三八、二一〇	五、〇四三	一三三、一六七四	五〇三
殺 人	火 人	五二八	五二一	八二三	二五	七七二	一六
放 火	火 人	三七〇	三五二	三四八	一六	三三一	一
通 貨 偽 造	火 人	二二五	一四九	三三八	一	三三一	五
文 書 偽 造	盜 盜	三、二七〇	三、三〇一	二、七一〇	八六	二、六三三	一
強 盜	盜 盜	八八八	八三七	一、〇九一	二四	一、〇五五	一三
竊 盜	盜 盜	六、一九六八	五、八五四	三、四、二五四	七〇四	三、三、四八八	一〇二
詐 欺	欺 欺	二、三、四六一	二、四、五三三	二、七、六三七	一、八八五	二、五、七六六	二六
恐 喝	喝 喝	九三三	九三〇	一、二、七六	六二	一、二、〇九	五
橫 領	領 領	二、一、八九	二、二、三四	二、一、二〇	八一	二、一、二九三	一六



賭博	三、六五一	三、六七〇	一一、二二三	二〇九	一〇、八五三	五一
禮拜所及墳墓に關す	四〇八	三六〇	六二八	一四	六二四	一
猥褻及姦淫	五四六	五四九	六一五	二七	五八五	三
姦通及重婚	三六一	三六九	六八九	一一	六七七	一
其他	三四、〇八一	三四、〇五	四四、五八七	一一、二六七	四三、一五六	二六四
特別法犯	四三、〇四〇	四三、一一一	五四、七三五	一、七七九	五二、七二六	二四〇
朝鮮阿片取締令規則	一、三五一	一、三七五	二、一九〇	九	二、二一八	六三
警察犯處罰規則	三、八二六	三、八二六	四、〇一四	二二八	三、七九四	二
森林令	七、二四六	七、一四五	八、八六六	四三	八、八三三	一
酒稅令規	七七	七七	一、五三三	一	一、五三三	一
朝鮮煙草專賣令規則	三、八五二	三、八五五	六、七二〇	二	六、六四	九四
其他	二六、七八八	三、七七八	三二、四二二	一、五〇七	二九、八四	八一

犯罪檢舉件數比較 (昭和七年)

總數	朝鮮	內地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋
一七〇、一八七	二一六、一五五	二九、五〇四	一五、一八三	二六、五二五	八五五	

刑 法 犯	一三、〇二五	一、四八、三八五	一九、五〇四	七、九三九	二、七三四	三五一
放火及失火罪	二、五九〇	一四、三九九	—	一六五	七六	六
通貨文書有價證券印章偽造罪	四、九五〇	三二、七二九	—	一八〇	八六	二
猥褻姦淫重婚罪	八六三	四、二二九	—	一八	一三	六
賭博及富籤に關する罪	三、八七四	二九、一〇〇	—	三三二	二二〇	一一
殺人罪及同未遂罪	五四一	二、六六七	—	二八	五九	—
窃盜罪	四六、四三〇	五、四、五八〇	一五、九五〇	二、九七八	八、二八九	—
強盜罪	一、二六〇	二、二七七	七四	八	一、一八七	二〇三
詐欺背任恐喝罪	二六、六四五	三、四八、九〇九	八、一九〇	一、九八四	一、〇五五	四三
横領罪	一三、六〇四	二、二、七五三	五、一九〇	九二六	七三九	一一
其他	三二、二六八	七、八、八四二	—	一、三五〇	一、〇二〇	六九
特別法犯	三八、一六一	九、二、八七〇	—	七、二四四	一、三、七九一	五〇四

## 七 財 政

財政。併合に依り明治四十三年八月、朝鮮總督府特別會計を設置して以來、財政獨立計畫を實行する爲、諸般制度の整理を行ひ、行政費を節約し、諸税の増徴新設を行ひ、大正八年に於ては全く中央政府の補充を仰がざるに至つたが、警察制度の改革、其他諸般行政の刷新に伴ひ再び補充金を要するに至り、其金額には年に依りて大小あるも、昭和九年度には千二百八十二萬五千百六十圓の補充を受けて居る。明治四十四年以降、道路修築・海關工事・鐵道建設改良等、朝鮮開發に必要な繼續事業費は、朝鮮の一般歳入を以て支辨する餘裕なかりしを以て、その財源を總て公債又は借入金に依ることとし、事業公債金特別會計法に基き、その限度を六億六百二十萬圓とされて居る。租税制度も數次の整理改正に依り體系整ひ、直接税は地稅・所得稅・相續稅・營業稅・資本利子稅・取引所稅・鑛稅、間接税に酒稅・砂糖消費稅・清涼飲料稅・關稅・噸稅・出港稅・骨牌稅、交通稅は登録稅・取引稅・印紙稅・朝鮮銀行券發行稅の十八種となり、内地の稅種と比較すると、織物消費稅を缺き、關稅の一種として移入稅を存する點を除いては全く同一である。併合以來、文化、産業等の發達に伴ひ財政の膨脹は著しきものあり、併合當時の明治四十四年度の豫算額四千八百七十四萬一千圓に比すると、昭和九年度の二億六千二百九十七萬八千圓は

約六倍に當つて居る。

朝鮮總督府特別會計歲入歲出豫算

年 度	入				出			
	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	
昭 七 年 度	三九,六二,四六九	一七,四七,五三四	三九,九三,九四九	二九,六一,四六九	一六三,六二四,六四〇	五二,七六六,八二九	二九,六一,四六九	
同 八 年 度	三三,〇六,九四九	一八四,四八一,五九	四七,五四,五七一	三三,〇三六,九四九	一七〇,〇八五,五七九	六二,九四二,三〇〇	三三,〇三六,九四九	
同 九 年 度	二六,九六,七六六	二〇六,二八三,五三二	五六,九六,一三四	二六,三,九六,七六六	一八四,一〇〇,三六八	七六,八七六,四八	二六,三,九六,七六六	
決 算 比 較 (昭 和 八 年 度)								
年 度	入				出			
	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	經 常 部	臨 時 部	總 數	
朝 鮮	三三,〇三六,九四九	一八四,四八一,五九	四七,五四,五七一	三三,〇三六,九四九	一七〇,〇八五,五七九	六二,九四二,三〇〇	三三,〇三六,九四九	
內 地	二,三三二,七六〇,〇〇〇	一,三九一,四九,〇〇〇	九四〇,〇〇〇,〇〇〇	二,三三二,七六〇,〇〇〇	一,三三三,〇一八,〇〇〇	九四一,六四四,〇〇〇	二,三三二,七六〇,〇〇〇	
臺 灣	一一〇,八三二,二六一	九九,七六六,八五	一一,〇六五,四〇六	一一〇,八三二,二六一	八七,一五六,五四七	二三,六六六,七〇四	一一〇,八三二,二六一	

樺太	二七、八四一、四九八	二、四三九、三三九	六、四〇三、三五九	三、二二四、五六六	一五、三三四、三三四	六、九八〇、二七三
關東州	三九、四七四、四八一	三、五三三、七九九	一六、九五二、七〇二	二、五三〇、〇五〇	一六、二三四、〇五〇	九、〇六八、〇〇〇
南洋群島	八、二四七、七九九	五、〇二一、六一一	三、三三七、四七七	五、二八二、四九五	二、七五五、一七一	二、五七七、三三四

國稅收入額 (昭和八年度決算額)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州	南洋群島
四七、六三五、三六四	七四八、五六六、七四五	二〇、一五五、三六〇	一、二二五、三七三	六、〇五五、〇四一	三、一五二、二五三
一八・八%	三三・〇%	一八・二%	四・四%	一五・三%	三六・三%
円	円	円	円	円	円
二・三二	二・一一	三・九八	四・〇四	四・三〇	一・三九

備考 人口一人當負擔額中南洋群島は出港税及鐵區税を除きて算出す。

稅種別金額 (昭和八年度)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州	南洋群島
四七、六三五、三六四	七四八、五六六、七四五	二〇、一五五、三六〇	一、二二五、三七三	六、〇五五、〇四一	三、一五二、二五三
六三三、三〇四	一七、九三三	一、一九七	六、〇五五	三、二一六	

財政

地租	一五、八五四	五八、一三七	五、七六五	一〇	二六	
所得稅	一、三三五	一五九、七〇七	五、八五〇	一九七	三八一	
鑛業稅	一、〇一〇	三、五五七	一八〇	二八		
營業收益稅(營業稅)	一、三三九	四〇、三九七		一七五		
資本利子稅	四八四	一四、六三四				
漁業稅				七九		
人頭稅						
取引所稅	三六七	一六、三四一			一三一	
銀行發稅			四〇			
酒稅	一三、五三九	二〇八、八五五	三、二三元	六八	五三〇	
砂糖消費稅	二、四一〇	七三、五三三	二、八三三			
織物消費稅		二九、四四一				
煙草稅					一、〇一四	
出港稅	一三〇			一三〇		三、〇三九
其他の稅		二八、八〇三	一九		三六一	

關	稅	一、二、五	二、三、九六三	二、八二	—	—	—	—	—
噸	稅	元	二、三〇〇	四	—	—	—	—	—

一戶當租稅負擔額比較 (昭和八年度)

朝鮮

內地

臺灣

國	一〇、七七二	國	五、四六六	國	二、三二〇
道	四、九〇三	道府縣	一、七三七三	州地方費	一、二〇〇
府	一、八八二	市	四、三三六	市	一、四〇三
邑	三、八〇三	町	二、二七四	街庄區	八、五七〇
學校費	〇、九〇七	村	二、二七四		
學校組合	一、三三四				
合計	二、二六四	合計	九、八二七	合計	四、八九七

國債及借入金比較 (昭和八年度末)

總額	四七三、〇五、六五七	朝鮮	二九、五三、二八八	臺灣	三八、四六、六〇〇	關東州	一三、五七、〇六一	南洋群島	七、四、一七〇
財政		臺灣		樺太					

國債	四六二、四九五、六五七	二六、三三二、二八八	三七、七三六、六一〇	一三、三二一、七〇六	七四、一七〇
借入金	一〇、五三〇、〇〇〇	三、一〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一六五、三五五	—
人口一人に		二二・七五	二五・六〇	二七・九九	九・六五
付國債額					〇・九〇

備考 内地の昭和九年度末の國債現在額は六、一七八、五二一、六一五圓なり。

國庫補充金比較 (決算額)

朝鮮	自明治四十三年度 至昭和八年年度	二七九、五七五、八五八	臺灣	自明治二十九年 至明治三十七年度	三〇、四八八、六九一
樺太	自明治四十年 至昭和八年年度	二七、五四五、七〇六	關東州	自明治四十年 至昭和八年年度	九〇、九四八、六六五
南洋群島	自大正十一年 至昭和六年年度	二二、一二二、四一九			

地方財政 道の財政は道税を主とし、國庫補助金、使用料、手数料等を以て其歳入に充て、各般の事業費を支辨する。府の經濟は之を一般經濟と特別經濟とに區分し、特別經濟は更に第一部特別經濟と第二部特別經濟とに區分せられ、一般經濟に於ては、府税、使用料、手数料其他の收入を財源として都市的施設に充て、第一部特別經濟は府内の内地人教育に關する經濟を分別したもので、小學校、高等女學校、實業學校、實業補習學校、幼稚園を經營し、之に屬する府税は内地人の負擔する戸別税で一戸當平均二十二圓七十四錢となつて居る。第二部特別經濟は主として府



内の朝鮮人教育に關する經濟を分別したもので、普通學校及實業補習學校を經營し、其主要財源たる府税は戸別税及家屋税附加税にして、一戸平均負擔額三圓六十一錢である。邑面は其邑面に屬する收入を以て、邑面の必要なる費用及法令に依り邑面の負擔に屬する費用に充て、仍不足あるときは邑面税及夫役現品を賦課徴收し得、國税及道税の附加税並に特別税を賦課する。學校、組合は内地人の教育に關する事務を處理し、營造物の使用には使用料を徴收する外、組合財産より生ずる收入、組合に屬する收入を以て其經費を支辨し、仍不足する場合は組合費及夫役現品を賦課徴收し、其一戸當平均負擔額は二十二圓五十六錢に達する。學校費は普通學校、其他朝鮮人教育に關する費用を支辨する爲め各郡島に置くもので、賦課金、使用料、補助金、財産收入、及其他の收入を以て財源とし、一戸平均賦課金は八十七錢九厘である。

地方財政 (昭和九年度豫算)

道	豫算總額	歳入	豫算中
	七〇、六二〇、六六四 <sup>円</sup>	租	公債
		一九、五三三、三六五 <sup>円</sup>	一三、八七八、五三三 <sup>円</sup>

備考	學校費及學校組合の租稅欄には學校費賦課金及學校組合費を掲上す。	府			總額
		第一般經濟	第一部特別經濟	第二部特別經濟	
		二〇、八八〇、四九一	一五、〇四一、六三四	三、五三六、七八四	三九、四五八、八〇九
		五、四一二、三九七	三、一〇三、五一五	一、四八三、七六三	九、九九八、四七五
		七五、一一九	七五、一一九	七五、一一九	二二五、二五七
		一四、三二一、五八八	一四、三二一、五八八	一四、三二一、五八八	四三、九六四、七六四
		三、三三七、六〇八	三、三三七、六〇八	三、三三七、六〇八	一〇、〇七三、八二四
		一、三六五、二二六	一、三六五、二二六	一、三六五、二二六	三、〇九六、七〇八
		一、一七二、〇七六	一、一七二、〇七六	一、一七二、〇七六	三、四一六、八二六
		一五八、三四〇	一五八、三四〇	一五八、三四〇	四七二、五〇〇
		一九六、七〇五	一九六、七〇五	一九六、七〇五	五九四、九一〇

## 八 專 賣

煙草・煙草專賣令は大正十年より實施したるが、漸次制度の完璧を見、製造設備及販賣機關も亦整頓し、今や其収入は半島に於ける重要な財源に屬して居る。毎年煙草を耕作すべき地域・面積及煙草の種類は豫め公示するものにして、現在の耕作地域は平安北道及咸鏡南北道を除きたる十道、六十三郡、三百二十六面に亘り、煙草の種類は大別して内地種・朝鮮種及黄色種の三種である。煙草製造工場は京城・全州・大邱・平壤の各專賣支局所在地に、印刷工場は京城に設置し従事職工は男女工を通じ二千八百餘名を算する。現在製造の煙草は、口付紙卷煙草に、敷島・朝日・松風・兩切紙卷煙草に、ジージーシー・コンゴウ・カイタ・ピジョン・銀河・蘭・マコー・メープル・牡丹・細刻煙草に、さつき・あやめ・荒刻煙草に、不老煙・長壽煙・五福草・蘿煙・福煙の十九種である。販賣官署は、專賣支局四、出張所二十二、販賣所數三百二十六箇所に及んで居る。

紅・人蔘は古來高麗人蔘と稱し世に貴重され、その中の紅蔘は夙に政府の專賣となつて居る。人蔘は一般作物と異り播種後五、六年を経ざれば收穫すること能はず、其製法に依り紅蔘白蔘の二種となる。紅蔘は開城地方の指定耕作區域に於て收穫され收納検査に合格の水蔘（生人蔘）を

蒸して日光及火熱に依り乾燥したもので、之が製造は專賣局開城出張所の工場にて行ひ、紅蔘、尾蔘、人蔘エキス、浴用人蔘等となり、紅蔘は専ら支那に輸出し、其價高きも支那に於ては萬病の靈藥として愛用さる。白蔘は指定耕作區域の不合格水蔘及其他に於て耕作された水蔘の表皮を撤きとり單に日光に乾かして製造したるもので、其價は廉價である。

鹽 古來朝鮮に於て消費する鹽は専ら沿海各地に於て製造する煎熬鹽を用いたのであるが、併合以來政府は官營鹽田を築造して製鹽を行ふと共に、製鹽等を保護する爲め、輸移入鹽の管理を行つて居る。現在鹽田總面積は二千四百七十四町歩あり、鮮内鹽消費量年額五億六千萬斤に對し、鮮内の天日鹽供給額は平年大體二億四千萬斤にて、之に在來の煎熬鹽六千萬斤の生産を見込むも尙多量の不足は海外より輸入に俟たねばならぬので、政府は鹽田の擴張計畫を有し、其産額増加に努めて居る。

阿片 阿片中毒者を根絶する目的を以てモルヒネ類の製造販賣を政府事業とし專賣局内に工場を設けて製造して居る。尙中毒者を登録して救療を爲すと共に、登録を受けたる者に對しては治療に必要程度のモルヒネ類の使用を許して居る。昭和八年度の阿片收納高は一千四百五萬八千瓦である。

製造煙草賣渡高

總價額	鮮		內		品		輸		移		入		品			
	數	量	數	量	價	額	數	量	價	額	數	量				
大正十三年度	二,五四四,六三一	千本	九五六,九五三	千本	二,五四五	貫	九四三,三三三	貫	二,三五七,五七	貫	二,二七六	千本	一四四,四八三	貫	一八七,三七四	貫
昭和八年度	三,三三一,八六	千本	三二二,三四三,七五,六一三	千本	八,二二四,三〇,九六	貫	三,三三三,三七,〇三六	貫	五二八	千本	一八三,一七四	千本	八六,一四八	貫		貫

葉煙草耕作及收納

耕作	收		納		數		量		賠償金額				
	人員	面積	總數	內地種	朝鮮種	黃色種	總數	量					
大正十三年度	八三,三七	町	二,一七二,九九,五九	貫	四八九,八三一	貫	一,八三四,二六一	貫	六〇五,五五五	貫	四,三二,二八四	貫	
昭和八年度	六,六四	町	一三,五五六,四,四二四,三六九	貫	三三,一四三,四八四,四二六	貫	六九七,七〇九	貫	四,八三,三五九	貫			

煙草製造及製造煙草輸入

專賣

五五

	紙 卷		刻		數		金 額
	兩切	口付	細刻	荒刻	紙卷	葉卷	
大正十三年度	三、八五、三〇三 <small>千本</small>	八五三、〇八〇 <small>千本</small>	三〇、四〇〇 <small>頁</small>	一、〇一七、七八 <small>頁</small>	五七 <small>千本</small>	一〇一 <small>千本</small>	三六 <small>頁</small> 一九、〇七九 <small>円</small>
昭和八年度	三、六三、一四二	一九二、三四三	七、六六四、三九二 <small>頁</small>	一、四一四、一四二	四四	一七三	一、六六三 四七、六七七

人蔘耕作及水蔘收納

	耕作人員	耕作面積	收穫高	收納高	賠償金額
大正十三年度	二四九	一、五五五、八四 <small>坪</small>	五七三、〇六 <small>斤</small>	一四三、二二 <small>斤</small>	一、一五三、六三四 <small>・四円</small>
昭和八年度	二九三	一、九四三、二八四	七三四、九九七	一四三、六五	一、二八、七三四 <small>・二</small>

備考

同一人にして二種以上又は二郡以上に耕作をなすものは耕作面積の多き方に掲記し、×印は主なる一方を除きたるものにして外書なり。收納せられざる水蔘は民間に於て之を白蔘に製造し自由に販賣するものとす。

紅 蔘 製 造 高

總 數	天 蔘	地 蔘	雜 蔘	尾 蔘
大正十三年度	五二、八八二斤	一八、九七〇斤	一八、八七〇斤	七三三斤
昭和八年度	四八、五三五	一七、八三四	一七、六六七	七九四
				三、三〇〇

天蔘、地蔘及雜蔘は紅蔘の品質區分名稱にして、天蔘は甲、地蔘は乙、雜蔘は丙に該當するものなり。

紅 蔘 拂 下 高

	昭和八年度			大正十三年度		
	數	量	價 額	數	量	價 額
總 數	三〇、九六三	斤	一、二七三、七四〇	三七、二四六	斤	二、一三三、二二二
天 蔘	一一、七二一		七六三、二三三	一五、一六〇		一、三三三、〇七三
地 蔘	一一、〇九三		四七六、一六八	一五、九〇〇		七九三、〇三〇
雜 蔘	一八九		二、九四五	五二七		一〇、五四五

專 賣

專賣

小片 尾 蔘

六,九五六

三,三九五

四,八二七

一〇,七四一

小片 蔘

—

—

八三三

五,八三四

五八

人蔘 輸移出入

紅蔘

白

蔘

水蔘

輸移 出

輸移 出

輸移 入

輸移 入

數量

價額

數量

價額

數量

價額

數量

價額

大正十三年度

四一,七二

二,二七九,四九五

八六,四六九,四三三

三,四八五

八,三三三

—

—

昭和八年年度

一六,五四

七六六,七二二

七六,二〇三,〇七二

八,四四〇

二四,〇〇四

一〇,五八四

一九,六四四

官 鹽 製 造 高

天日鹽

面

積

生

產

高

大正十三年度

一,七七八

一〇八,四一〇,三〇五

昭和八年年度

二,四七四

三三六,四一,〇〇〇



私 製 鹽

煎 蒸 鹽

製 造 者 數 釜 數

鹽 田 面 積

製 造 高

價 額

大 正 十 三 年 度

六、七三

二、四九〇

二、六〇二

五、三八二

一、三五七、三〇五

昭 和 八 年 度

七、八四三

一、四五四

二、一三三

六、九七二

八七四、八〇三

再 製 鹽

製 造 者 數

釜 數

製 造 高

大 正 十 三 年 度

九

一八三

四六、七九〇

昭 和 八 年 度

七

一五三

五〇、七九五

鹽 販 賣 高

數 量

價 額

百 斤 當 平 均 價 格

大 正 十 三 年 度

八九、四五一、七九

一、〇〇五、六八〇

一〇・二三五

昭 和 八 年 度

五八、四〇五、六四七

五、七五七、三九六

一〇・一一一

專 賣

五九

專賣

鹽輸移出 入

六〇

年度	政府購買鹽		自己輸移入鹽		輸移出	
	數量	金額	數量	金額	數量	金額
大正十三年度	— 斤	— 円	— 斤	— 円	— 斤	— 円
昭和八年度	— 斤	— 円	— 斤	— 円	— 斤	— 円
合計	— 斤	— 円	— 斤	— 円	— 斤	— 円

專賣收入支出

年度	收入		支出		差引
	總額	總額	總額	總額	
大正十三年度	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円
昭和八年度	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円
合計	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円

專賣收入比較 (昭和八年度決算額)

項目	大正十三年度	昭和八年度
總額	— 円	— 円
煙草	— 円	— 円
人蔘	— 円	— 円
鹽	— 円	— 円
阿片	— 円	— 円
其他	— 円	— 円
合計	— 円	— 円

	朝鮮		内地		臺灣		關東州	
	金額	比例	金額	比例	金額	比例	金額	比例
總數	四、八四三、七九二	100.0	三、七四、一二三	100.0	四、〇四五、五三四	100.0	六、八三九、七三六	
煙草	三、三三三、三八一	八二・六	二、六五八、五五五	八五・三	一、五、二二、三三六	三七・一		
鹽	五、五三八、五三八	二・六	四、一〇〇、五三三	一三・五	二、七三、九一七	六・五		
阿片	七五〇、〇四三	一・七			二、八九五、二六四	七・五	六、八三九、七三六	
人蔘	一、三三七、九四一	三・一						
樟腦			(樟腦及樟腦油) 三、六九五、四三三	一・二	五、七〇七、七六一	一三・九		
酒類					一四、四九七、二六五	三五・三		

備考

樺太に於て煙草の專賣が行はれるが、これは函館專賣支局の所管に屬す。

朝鮮の鹽は專賣ではないが、鹽の輸移入管理等總てそれに關する事務は專賣局の所管に屬し、更に天日鹽の製造は專賣局自らが經營する處のものである。

## 九 農 業

耕地 朝鮮は到る處農業に適し殊に南部地方は氣候温暖にして農作物の發育最も佳良である。冬季は寒氣強きも麥類の如き冬作物の枯死する虞なく、年中概ね空氣乾燥せるを以て收穫物の品質良好なるも、夏作物中水稻の如きは氣候の關係上生育良好なるべきに拘らず、従來用水不十分なるを以て屢旱害を被ることがあつた。しかしながら、灌漑の設備年々發達せるを以て、漸次其度を減じつゝある。産米増殖は初大正九年度より約十五箇年に亘り土地改良事業を施行することとなり、大正十五年更に計畫の一部を更正し、同年以降十四箇年を期し三十五萬町歩の土地改良を施行することとなりたるが、昭和九年五月内外兩地に於ける米穀事情の變遷に鑑み、本計畫は窮迫せる米穀事情の解消するまで當分の間之を中止する方針を採ることにした。昭和八年十二月末統計に依る耕地面積は左の如くなつて居る。

### 耕 地 面 積 (昭和八年末)

總 數	畝 (田)		田 (畑)
	一毛作	二毛作	
總 數	四、四九、三二〇	一、六八、八〇四	二、八〇七、四〇七
	町	町	町
	一、二八五、四八六	三九六、三八三	二、八〇七、四〇七
	町	町	町

土地臺帳登録耕地	四、四二一、八〇三・七	一、六六〇、三五四・七	一、三六五、四八一・五	三九四、七三・二	二、七五一、五四九・〇
土地臺帳未登録耕地	七七、四八・三	三二、五〇〇・〇	二〇、〇〇四・九	一、五四五・一	五五、八五八・三
火田	三六、五〇・三				

備考 耕地面積總數には火田を含まず。

自作小作別耕地 (昭和八年末) (單位町)

總數	自作		小作	
	總數	畝(田)	總數	畝(田)
土地臺帳登録耕地	一、六三三、二〇三・三	四六、五九七・六	一、四四五、七三三・六	一、三三五、四〇七・一
土地臺帳未登録耕地	一、九七七、六二・三	五五、七九六・一	一、三三七、三二・七	一、三三〇、四五一・一
土地臺帳未登録耕地	四、六〇九・九	六、五九三・〇	三、四九三・九	一、四九三・〇
農業者				
農業者中小作農大部分を占め、年々其數増加し自作農の減少を見つゝあり、當局は之を防止する爲め自作農創定、其他小農保護政策を實施して居る。大地主は多く都會に住居し、土地所在地に土地管理者を置きて小作地を管理し、小作料を徴収するを普通とする。小作料徴収の方法は概ね、(一)秋收期に於て檢見を行ひ、生産額の二分の一を標準として小作料額を定むるもの				

(二)收穫に際し其收穫物を折半し、其一を小作料と爲すもの、(三)年の豊凶に拘らず一定の小作料を定め置くもの、三種とし、小作契約は大地主・會社、農場等に於て成文契約をなすものあるも、一般には口約を以て之を定むるを普通とするが、小作農農保護の目的を以て農地令を施行して居る。

農業者戸數表 (昭和八年)

自作	自作兼小作	小作	火田民	被傭者	總數
五四五,五〇三 <sup>戸</sup>	七四,七四一 <sup>戸</sup>	一,五六三,〇五六 <sup>戸</sup>	八三,二七七 <sup>戸</sup>	九三,九八四 <sup>戸</sup>	三,〇〇九,五〇〇 <sup>戸</sup>
内地人	朝鮮人	滿洲國人及 中華民國人	計		
九,〇三五 <sup>戸</sup>	二,九九六,二〇三 <sup>戸</sup>	二,三三三 <sup>戸</sup>	三,〇〇九,五〇〇 <sup>戸</sup>		

備考 本表中被傭者とは耕地を所有並に占有せず、他人に雇傭されて農業に従事し、獨立の世帯を構成せる者を謂ふ。

耕地面積及農業戸口比較 (昭和八年末) (單位隋)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
四,四三三,一一一	五,九七八,九四〇	八二〇,一一五	三三,二六七	一〇三,三六三	一五,〇〇一
總數	×三六,三四二				

耕地面積	
畑	田
一、六六七、九〇五	三、一九八、九七〇
二、七八四、二〇六	二、七七九、九七〇
二、七七一、九七〇	二、八六一、一四五
三、二六七	三、二六七
二〇三、二五八	二〇三、二五八
一三、六二二	一三、六二二
一、三八八	一、三八八

農業戸數	
總數	
自作	自作兼小作
小作	小作
(被傭者)	
(火田民)	
三、〇〇九、五六〇	五、六一一、五三五
五四五、五〇二	一、七四五、八四七
七二四、七四一	二、三七五、八三三
一、五六三、〇五六	一、四九九、八五五
九三、八九四	一、五五、〇三七
八二、二七七	一、六六九
	一、〇三九
	六四、三七〇
	一〇、九七五

備考 朝鮮の總耕地面積中には火田面積を含まず、×印は火田面積にして外書なり。

### 農業狀態比較 (昭和八年)

農業者人口	朝鮮 内地 臺灣 樺太 關東州及鐵道附屬地 南洋群島					
	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
總面積に對する耕地(%)	二〇・二	一五・六	二二・八	〇・九	五四・二	六・九
耕地面積に對する田(%)	三七・五	五三・五	五三・三	〇・〇	〇・六	九・三

耕地面積に對する畑(%)	六三・五	六六・五	四七・七	一〇〇・〇	九九・四	九〇・七
農家一戸に付耕地(陌)	一・五	一・一	二・〇	三・〇	三・三	一・四
人口千に付耕地面積(陌)	二二四・一	八八・九	一六三・一	二〇七	一四四・四	一八二・三
總戸數千に付農家戸數	七六・五	—	四八・六	一八六・七	二七・九	五九八・九
人口千に付農業者人口	—	—	五三・三	一八六・三	一七四・八	三六・九

備考 (イ)内地及朝鮮の耕地は一ヘクタール三、〇二五歩にて換算し、尙ほ内地の耕地面積は昭和八年農林省統計年報の數字による。

(ロ)内地の總面積に對する耕地面積割合算出に當り總面積は日本帝國統計年鑑の數字による。

(ハ)朝鮮の耕地面積割合算出に當り火田は除外す。

農産物 米は農業生産中首位を占め、昭和八年に於ては、生産高一千八百十九萬石、輸移出七百九十九萬石、價額一億五千四百七十一萬圓に達した。農産物として大豆・麥・粟・甘藷・馬鈴薯・果實・蔬菜・棉花・繭・畜産としての牛・馬・騾・驢・綿羊・豚・家禽・養蜂等も有望であるが、特に棉花、綿羊は一大獎勵が加へられ、養蠶と相俟ちて將來重要生産品となるであらう。朝



鮮の農業發達の大勢を窺ふ爲め、試みに明治四十三年と昭和八年に於ける主要農産品生産價額を比較して見やう。

農業生産價額表

		昭和八年	明治四十三年
總額		310,841,296 円	331,071,155 円
植産物總額		702,677,555 円	300,868,427 円
米		341,590,126 円	29,966,969 円
麥		26,055,855 円	23,703,334 円
豆類		26,099,599 円	18,120,474 円
雜穀總額		55,568,330 円	33,355,569 円
特用作物總額		5,556,701 円	3,366,331 円
棉		19,687,036 円	1,377,566 円
棉以外の纖維作物		18,080,700 円	1,666,990 円
其の他の特用作物		187,955 円	32,764 円
蔬菜總額		26,391,151 円	?
果實總額		9,000,666 円	?
藁類		5,655,553 円	34,537,200 円
桑苗		268,687 円	?
蠶業生産品		23,445,969 円	47,630 円
畜産物並に同副産物		26,800,444 円	12,447,768 円
植産物加工品		3,366,266 円	?
蠶業生産物加工品		16,038,644 円	?
畜産物加工品		2,666,366 円	8,635 円
自給肥料		10,335,444 円	6,635,126 円

主要農產物生產高

昭和八年 明治四十三年

大豆類總數	麥			米			
	裸麥	小麥	大麥	總數	陸米	糯米	粳米
一、〇九四、八八四・八	二四、五八〇・八	三三、二六・八	八八、八三〇・三	一、三三五、六一八・四	三八、〇五一・八	五三、八四八・六	一、六五五、五六三・五
四、五五五、五一七	一、〇三三、一五三	一、七六二、二八七	七、五八五、三〇四	一〇、三七〇、七四四	二五八、四六三	五七、二四九	二七、四一七、〇〇八
〇・五六六	〇・八二一	〇・五四七	〇・八五三	〇・七七六	〇・六七九	〇・九六一	一・〇八五
四八八、〇五三・〇	三八、七四〇・八	二四三、八九四・三	五七五、九五七・五	八五七、五九二・六	一三、七八八・五	八三、六九八・四	一、二五五、三〇九・九
二、七四六、三五八	二五四、七二五	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三
〇・五三三	〇・六五七	〇・四九七	〇・八三四	〇・七二〇	〇・六九六	〇・七七五	一・〇七二
一、〇七二	一、〇三三、一五三	一、七六二、二八七	七、五八五、三〇四	一〇、三七〇、七四四	二五八、四六三	五七、二四九	二七、四一七、〇〇八
一、三五二、七九六・八	三、六三五、六八四	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三
一〇、四〇五、六三三	三、六三五、六八四	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三
一・〇七二	一、〇三三、一五三	一、七六二、二八七	七、五八五、三〇四	一〇、三七〇、七四四	二五八、四六三	五七、二四九	二七、四一七、〇〇八
一、六九七、四六三・九	二、七四六、三五八	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三
一、六九七、四六三・九	二、七四六、三五八	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三
一、六九七、四六三・九	二、七四六、三五八	一、二〇五、九七三	四、七四六、九三六	六、二〇七、六三三	九七、九四〇	五八二、六一	九、七三五、〇七三

農	業	特用作物	蕎麥	燕麥	玉蜀黍	蜀黍	黍	稗	粟	雜穀	其他	豌豆	菜豆	落花生	綠豆	小豆
			107, 340.7	119, 147.4	112, 77.6	86, 43.9	15, 249.5	73, 745.9	797, 238.3	7, 287.4	5, 094.4	6, 633.3	1, 442.7	38, 891.1	233, 770.8	
			560, 933	485, 272	682, 274	609, 374	86, 851	506, 489	5, 145, 301	25, 932	32, 886	27, 471	21, 170	130, 694	914, 564	
			0.533	0.407	0.605	0.705	0.570	0.687	0.645	0.356	0.635	0.489	1.467	0.336	0.393	
			?	29, 748.2	65, 856.0	64, 483.3	16, 914	133, 701.4	538, 167.5	?	?	?	?	?	29, 504.0	
			?	187, 373	400, 978	400, 956	98, 755	841, 332	3, 346, 600	?	?	?	?	?	889, 336	
			?	0.600	0.639	0.633	0.581	0.680	0.633	?	?	?	?	?	0.455	

農 業

陸地棉	一二七、三〇・八 <sup>町</sup>	一二四、三三、四七 <sup>斤</sup>	九七 <sup>斤</sup>	一、二六八・一 <sup>町</sup>	六六八、一五 <sup>斤</sup>	五三斤
在來棉	五九、三八・二	四五、一〇三、〇九六 <sup>斤</sup>	七六 <sup>斤</sup>	五八、八九二・〇	三〇、四二〇、六八五 <sup>斤</sup>	三三斤
人 蔘	一一六・九	七三〇、七八九 <sup>斤</sup>	六五 <sup>斤</sup>	?	?	?
大 麻	二七、二七九・〇	五、二七、三九 <sup>斤</sup>	一九 <sup>斤</sup>	一八、六三・八	一、七四九、七四〇 <sup>斤</sup>	九 <sup>斤</sup>
苧 麻	一、五三四・九	一四五、三七 <sup>斤</sup>	九 <sup>斤</sup>	八六四・三	四七、五三九 <sup>斤</sup>	六 <sup>斤</sup>
青 麻	四四五・〇	七、六五 <sup>斤</sup>	一六 <sup>斤</sup>	?	?	?
煙 草	一三、五八・四	四、四四、二六八 <sup>斤</sup>	三三 <sup>斤</sup>	二八、六七四	二、三七八、八七三 <sup>斤</sup>	八
杞 柳	一四八・九	一七二、五七〇 <sup>斤</sup>	一五 <sup>斤</sup>	?	?	?
除 蟲 菊	一〇・五	一、七二五 <sup>斤</sup>	一六 <sup>斤</sup>	?	?	?
薄 荷	三五三・八	三八五、〇八一 <sup>斤</sup>	一〇 <sup>斤</sup>	?	?	?
莞 草	三、九九三・二	一、三三七、二四三 <sup>斤</sup>	三三 <sup>斤</sup>	?	?	?
楮	七、一一一・一	一、七九七、四三三 <sup>斤</sup>	二五 <sup>斤</sup>	?	?	?
荏 苳	一三、五三九・〇	五四、六六七 <sup>斤</sup>	〇・四〇四 <sup>石</sup>	一〇、九六三・三	四五、七六一 <sup>石</sup>	〇・四一七 <sup>石</sup>
胡 麻	一〇、〇四一・六	三九、〇七三 <sup>斤</sup>	〇・三九九 <sup>斤</sup>	?	?	?
蓖 麻	二、三四・五	二、六六七 <sup>斤</sup>	一・五六二 <sup>斤</sup>	?	?	?

農業	果樹		蔬菜	
	樹數	收穫高	作付段別 收穫高	一段步 收穫高
柿	七七八、四七	五、九九五、七三	一八、九四〇・一	三六
梨	八三三、五六六	三、四七七、二五六	四三、二六五、四九三	一五
苹果	一、九九二、六五九	一、二八九七、一五三	六、三三〇・〇	二六
柑			一四九、七六、四四四	二六
葱			六、四七・九	二六
甘藍			一、五、八四、六九	二六
白菜			四、七四・二	二六
萝卜			一〇六、一〇、三五	二六
茄子			七四・六	二六
胡瓜			二、六〇・〇	二六
			五、二七五、〇三	二六
			一、九〇・七	二六
			四、四六、一八〇	二六
			七、三六・六	二六
			一八、一六、三六	二六

農業	果樹		蔬菜	
	樹數	收穫高	作付段別 收穫高	一段步 收穫高
葡萄	三三〇、七九	六三三、一四	三、七六・一	二六
桃	二六、八四三	一、一〇、四九三	二、〇六、五四	二六
西瓜			四、三二・五	二六
甜瓜			三、四七、七四	二六
南瓜			二、七七・七	二六
西葫芦			六、一五、九〇九	二六
大芥			七、六三・一	二六
葱蒜			九、五三、五八	二六
コシニヤク芋			六・二	二六
蕃椒			三、一八・七	二六
芹			一〇、一五、三二	二六
			九、九七	二六
			三、三六、六五	二六

家蠶

昭和八年

明治四十三年

總數 春蠶 夏秋蠶

總數 春蠶 夏秋蠶

飼養戶數 一、三九〇、三五四 八二二、〇〇九 五七八、三四五

? 七六、〇三七 ?

蠶種掃立枚數(枚) 一、二二八、一八一 六四四、三六七 四六三、八九三

八九、九八〇 八四、五六六 五、三九四

繭產高(石) 六六六、〇三四 四三七、一四〇 二四〇、八九四

一三、九三二 二二、九六〇 九七一

製造戶數 釜數 生產高

製造戶數 釜數 生產高

家蠶糸 二八三、六三六 二八三、九二一 一、五九五、八八一

五二、〇二五 ? ?

柞蠶

昭和八年

明治四十三年

總數 春蠶 秋蠶

總數

飼養林面積(倍) 五九六

一、六六三

飼養戶數 一六九

一一八 五一 一、〇二〇

放養蛾數(千隻) 四五一

三二六 一三五 ?

繭產高(千顆) 三、九六六

三、一四七 八一九 三五、七五九

蠶業

蠶種製造 昭和八年 大正二年

製造人員 二七五 八九、八三三

製造枚數 一、二八七、八七三 一九〇、八三三

稚蠶共同飼育 昭和八年 明治四十二年

共同飼育 個所 二、四七三 三〇

蠶種掃立枚數(枚) 九二、六三〇 六七三

繭產高(石) 五九、八三三 七九六

一戶繭產高(石) 六四六 三〇六

平均繭產高(石) 一〇六 五〇三

繭產高(石) 一〇六 五〇三

養蠶比較 (昭和八年)

桑 昭和八年末 明治四十二年末

本段別(町) 田 七九、六八八 三、四三〇・五

見積段別(町) 二七、八四七 八九一・六

五二、三〇四・一 二、四五一・九

桑苗生產 昭和八年 明治四十二年

桑苗生產業者數 九二四 一四六

生產成苗(千本) 一〇一、八二二 六、五三三

朝鮮 臺灣

關東州及鐵道附屬地

桑園面積(扇) 七八五二四五一

六四九、六四 二七五

價額	飼育戸數			掃立枚數			產繭(町高)			價額		
	夏	春	總	夏	春	總	夏	春	總	夏	春	總
數	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶
量	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶	蠶
價額	八二,〇〇九	五七八,三四五	一,二二八,一八〇	六六四,二八七	四六三,八九三	一一〇,五〇七	七七,〇五二	四三,四五五	二一,八六四,六九〇	一六,〇九二,三〇四	五,七七二,三八六	二,〇五七
畜産物産額 (昭和八年)	二,〇五七	一,三二一	九,二七六	五,六三一	三,六四五	二五九	二五〇	一一三	七四,四〇七	五六,七五二	一七,六五五	四四三
畜産品總價額	二九四	二,一六七	九四七	一一,三二〇	一〇九	六一	四八	二四,三五五	一五,五六九	八,七八六	三,八〇六,四四四	三,八〇六,四四四

總價額 | 數量 | 價額 | 畜産品總價額 | 數量 | 價額

三六,〇三三,六三二 | 四 | 三,八〇六,四四四





	昭和八年		明治四十三年	
	數量	價額	數量	價額
牛 皮	總數	四四三、六八五	二、六三九、二〇五	一、八九一、四三〇
	改良皮	二、〇四〇、六〇一	九八七、四二二	—
牛	骨	二、三三七、〇二七	—	—
	脂	五、〇三六、四二二	二、六三九、二〇五	一、八九一、四三〇
豚	毛	八、一六三、五三三	一、〇八七、五〇〇	一、三〇、五七六
	脂	二、三八、一六二	七、三五、九七七	一、三〇、七九三
豚	毛	二、三八、一六二	七、七、一六一	一、六、六五〇
	脂	六〇五、九六八	五、二、四〇五	九、八、三二
家畜及家禽				
牛	飼養戶數	一、一九九、六二五	—	—
	頭數	一、六六三、三三六	—	—
馬	飼養戶數	三、七、三二〇	—	—
	頭數	五、一、九四四	—	—
明治四十三年末				
牛	飼養戶數	—	—	—
	頭數	—	—	七〇三、八四四
馬	飼養戶數	—	—	—
	頭數	—	—	三、九、八六〇

豚	九七六、九三三	一、四二五、一四二	五六五、七五七
驢	四、六六八	四、八九〇	八、二六四
騾	一、三四二	一、四六一	八二二
山羊	一九、〇六九	二八、六五一	七、三三二
緬羊	七八	二、六七五	四七
雞	飼養戶數 一、五八〇、六三七	總羽數 六、八六八、〇三七	飼養戶數 二、七九六、二五九
鶩	七、八〇三	二八、六五六	?
七面鳥	二八三	一、一五〇	?
其他養兔及養蜂			
養兔	昭和八年末 昭利四年末	養蜂 昭和八年末	昭和三年末
飼養戶數	一一、八九五 一三、八八五	飼養戶數	九七、五三五 八一、一六九
頭數	三九、一八一 四一、一六〇	飼養箱數	二〇四、三七二 一七〇、七〇五

屠場

農業

昭和八年

明治四十三年

屠場數  
屠場內屠畜數

一、三九二

一、〇八九

總數

頭數

價額

頭數

價額

牛

二八七、六四三

二〇、五八四、五〇八

一七五、九四七

四、一五三、三〇九

馬

四六〇

一七、二九一、八五七

一九

三、八八一、六八六

豚

二八九、二九六

三、二八二、五九一

八六、一〇一

二七一、四三五

驢

一五

九九

一

一

騾

三

四一

一

一

家畜及家禽比較 (昭和八年)

朝鮮

內地

臺灣

樺太

關東州及  
鐵道附屬地

南洋群島

一、六三三、一三六

一、五五九、八三六

三六六、二七〇

四、六六二

二四、七三四

四、七五五

牛

五三、九二四

一、五〇一、二七七

三四八

一三、四三四

一〇、七六七

三

馬

七面鳥	鷺	鷺	鷄	鹿	豚	綿羊	山羊	騾	驢
一,一五〇	—	二八,六五六	六,八六八,〇三七 羽	—	一,四三五,一四三	二,六七五	二八,六五三	一,四六一	四,八九〇
—	—	四六七,七三三	五〇,九一〇,九九四 羽	—	九二三,五〇三	三〇,五二六	二二六,〇二一	—	—
二,二二九	三九,六〇六	一,四九六,一六五	五,七四六,五二四 羽	一,一三〇	一,八九六,四八九	三二三	八七,〇九三	—	—
二〇二	三四三	八七五	八七,六三八 羽	—	七,四四〇	三六	六一	—	—
八三	二,九七六	四八,八九六	三六〇,二六四 羽	—	一四二,六三三	三,〇五八	五,五三四	二七,五一	二五,三九七
六八四	—	四,五五一	八七,八二四 羽	—	一五,七八六	—	三,〇七〇	—	—

## 一〇 林業

林野面積 朝鮮の林野面積は一千六百四十三萬五千五百七十三町歩を有し、全土の約七割三分を占む。朝鮮の林業上の位置は、これを植物地帯上より水平的に觀察するときは、その大部分即ち北緯三十五度乃至四十一度に亘る區域は温帶林に屬し、アカマツ・ビヤクシン・テウセンマツ・テウセンモミ・コノテカシハ・エノキ類・ナラ類・ケヤキ・クヌギ・アベマキ・クリ類・トネリコ類・サクラ類・白楊類・シデ類・ニレ類・カヘデ類・ハンノキ類・ハリギリ等を産し、その北方鴨綠・豆滿兩江上流地帯は寒帶林にして、タウヒ類・タウシラベ類・カラマツ類・カンバ類・ヤマナラシ類・ドロノキ類・クルミ類・ナラ類等を産し、北緯三十五度以南は暖帶林にして、濟州島・莞島・大黒山群島の森林はこれに屬し、クロマツ・アカマツ・カヤ・カシ類・シヒ・アキニレ・エノキ・ムクエノキ・ツバキ・コナラ・シデ類・ダブ・クス類等を産する。又これを垂直的に觀察するときは、濟州島漢拏山には暖帶・温帶・寒帶林の森林景を、また智異山脈・金剛山脈には温帶・寒帶林の森林景を併備して居る。

森林行政 森林保護の爲めには、國有林に對しては森林保護區を設けて森林主事を配置し、民有林に對しては森林保護職員を置いて、森林保護の完璧を期し、殖林事業としては官公營の殖林植

樹を行ひ、種苗の無償下付、造林貸付、造林補助等を行ひ、砂防事業としては、荒廢山野の治水  
 上復舊を要すと認むる地域に對し復舊造林を行ひ、更に窮民救済砂防事業として、昭和六年度よ  
 り同八年度に亘り繼續事業として、大規模の砂防工事が行はれ、治水と窮民救済とが同時に實施  
 されたのである。國有林の經營に對しては營林署を設け、營林、伐木運材及流筏、製材、販賣、  
 立木拂下、森林土木、森林鐵道等が經營されて居る。  
 北鮮開拓事業としては、鴨綠江、豆滿江の上流地帯の山地帯八郡に對し、森林の利用開發、火田  
 民の指導、森林保護等を行ひ、其他林業關係官廳及試驗場ありて、監督、指導、試験、調査等を行  
 行つて居る。

### 所有別林野面積 (昭和八年末)

總數	國有林	要存豫定	不要存豫定	計
一六、四三五、五七 <sub>町</sub>	國有林	要存豫定	不要存豫定	計
國有	六、三〇〇、〇六四	營林署管轄	三、〇三五、九六 <sub>町</sub>	一三、四〇〇
公有	八六、三〇六	道管轄	一、五五六、三三三	一、五二五、〇三三
寺刹有	一七九、三六四			一、五二五、〇三三
私有	九、一七七、八一九			三、一七一、三三八

林業

林相別林野面積 (昭和八年末)

總數 一六、四三五、五七三<sub>町</sub> 開墾適地 二六、九七〇<sub>町</sub>

立木地 一〇、九一八、三三九 放牧適地 一四四、四三三

散生地 二、六五三、六五五 採草適地 二一九、九九七

未立木地 一、四五八、二三四 除地 三五三、〇九七

火田 四七〇、九四九

立木地 一〇、九一八、三三九

}	針葉樹林	五、四三三、二八八
	闊葉樹林	三、〇三三、三〇七
	針闊混淆樹林	二、四六八、一五三
	竹林	四、五八二

林野面積比較 (昭和八年末) (單位ヘクタール)

朝鮮

內地

臺灣

樺太

關東州

總數

一六、三九九、七三二

(御料林 二、三、六四五、七三三  
一、四二三、八八五)

二、四四九、三三九

二、九〇四、二九四

一〇〇、九四七



森林	1,892,433	76,495
原野	556,916	33,508
國有	7,557,600	2,904,294
森林	2,195,603	1,384
原野	1,680,299	11,388
公有	505,304	1,384
森林	17,149	1,384
原野	14,127	18,933
私有(寺刹有)	3,031	1,384
森林	246,587	48,126
原野	197,997	1,384
總面積に對する林野面積(%)	48,590	1,384
造林面積	68,590	1,384
備考	68,590	1,384

内地の林野面積は農林省統計により換算し、總面積に對する割合算出に當り總面積は帝國統計年鑑による。

林産物産額 (昭和八年)

總額	數量	價額	種類	數量	價額
總額	九四、三九、九七三	四、〇、四八六、八三三	山野菜	二、六七、一五七	三三、七六九
用材	九八、九、八八五	三、七六八、九七三	藥草	五七、七五四	三三、三三二
竹材	一、五八、五七七	二、九〇、七八〇	染料	七、一九八	五、三九一
薪	一、二八三、八九一	三、一〇五、六七三	漆液	八九九	一七、七七一
其他林産物	三、八六七、四〇五	三九、七九四、四二二	松脂	六三四	一、〇九〇
肥料	一、三〇四、四三〇	二、六八五、八四八	アパマ	七四四、三六八	三、三六三
肥料及堆肥原料	一、三〇四、四三〇	二、二〇八、〇三二	キ樹皮	四、五九八	七二七
木炭	二、八七六、〇六九	二、二〇八、〇三二	竹皮		

林産物比較 (昭和八年)

總價	朝鮮	内地	臺灣	樺太	南洋群島
總價	九四、三九、九七三	二四八、一五、〇八八	一〇、四八六、八三三	一一、五四七、三三七	三、四八八、八六九
用材	九八、九、八八五	一五、六六五、二九八	一九四、五三三	三、一六七、八九七	三、三四三
竹材	一、五八、五七七	二、九〇、七八〇	二、九〇、七八〇	二、九〇、七八〇	二、九〇、七八〇
薪	一、二八三、八九一	三、一〇五、六七三	三、一〇五、六七三	三、一〇五、六七三	三、一〇五、六七三
其他林産物	三、八六七、四〇五	三九、七九四、四二二	三九、七九四、四二二	三九、七九四、四二二	三九、七九四、四二二
肥料	一、三〇四、四三〇	二、六八五、八四八	二、六八五、八四八	二、六八五、八四八	二、六八五、八四八
肥料及堆肥原料	一、三〇四、四三〇	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二
木炭	二、八七六、〇六九	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二	二、二〇八、〇三二

林業	椰子實		コブラ		柴草		枝葉		竹材		木炭		薪材	
	價額(円)	數量	價額(円)	數量	價額(円)	數量	價額(円)	數量	價額(円)	數量	價額(円)	數量	價額(円)	數量
								六、七五、九二三 <sub>尾</sub>	二九〇、七八〇	一五八、五六七 <sub>束</sub>	二〇八、〇三二	八二、〇三五 <sub>尾</sub>	四、八一四、五一 <sub>尾</sub>	四、八一四、五一 <sub>尾</sub>
							四、九三、八七六 <sub>尾</sub>	二、五九六、七九〇	五、一七三、五六四 <sub>束</sub>	七六、一五四、六〇五	一、九七七、六九六 <sub>尾</sub>	一九、〇三一、二六九 <sub>尾</sub>	一、二五六、八九六 <sub>束</sub>	一九、〇三一、二六九 <sub>尾</sub>
							(生のもの) 一五、五七五、五四二	五、二七五 <sub>本</sub>	五、二七五 <sub>本</sub>	二、〇八九、九一一 <sub>尾</sub>	三、四三七 <sub>本</sub>	四七、三九三、七三三 <sub>尾</sub>	三、四三七 <sub>本</sub>	四七、三九三、七三三 <sub>尾</sub>
								一、一九九、七七三	五、九、五二三、〇二三 <sub>本</sub>	一、二六三、六三三	五七、三八五 <sub>尾</sub>	二、〇八九、九一一 <sub>尾</sub>	四三九、二五六 <sub>尾</sub>	二、〇八九、九一一 <sub>尾</sub>
									一、五五、〇一〇	一、五五、〇一〇	一、五五、〇一〇	三三、七六五 <sub>尾</sub>	一、五五、〇一〇	三三、七六五 <sub>尾</sub>
										九〇三、五二四 <sub>尾</sub>	九〇三、五二四 <sub>尾</sub>	六一、三三七 <sub>立方米</sub>	九〇三、五二四 <sub>尾</sub>	六一、三三七 <sub>立方米</sub>
									二、〇一一 <sub>束</sub>	二、〇一一	二、〇一一	二、〇一一	二、〇一一	二、〇一一
八五	二、四四、九四一		八六三、九七六		一〇、七六四 <sub>尾</sub>				九八一			一一、二九九 <sub>尾</sub>		一一、二九九 <sub>尾</sub>
			一三三、二四七、〇七二 <sub>個</sub>									九〇三、五二四 <sub>尾</sub>		九〇三、五二四 <sub>尾</sub>

其他價額(四)三〇、四五、五七

一七、七〇七、八一三

一、九三三、七三〇

四五、六三四

林產物

昭和七年

明治四十三年

昭和七年

明治四十三年

數量價額

數量價額

數量價額

數量價額

總額

一五五、〇六九千円

一、九四三〇千円

二八千束 四〇六千円

三、七三〇千束 一三七千円

用材

四、七六千尺結 七、四三三

二、二四三千尺結 一、二二三

八五、五五千貫 一三、五五二

二〇四、六九〇千貫 五、二一七

薪材

五三、三七二千貫 二、一三二

二、六六八千貫 九、五五四

柴草 一、四七〇千貫 二〇一、八二六

二、三〇三、八九〇千貫 一、三六八

木炭

一九、一九千貫 一、九二三

五、一八五千貫 三六五

副產物 一 三、三七二

一 一、五八七

砂防事業

工事費

區域施行植栽面積面積本數

總額

溪間

山腹

造林

使人員役

至三年度

一四六千本

五千本

三九一千本

八、九五千円

二九、〇五六千円

一千円

昭八年度

六二、二九四

一一、三三一

一六、一一三

四四、三六〇

二、七五九

五四、五九六

五八、五三九

造 林 事 業 (昭和八年)

國 費 經 營

施業面積 總 數	種 苗		種 苗		種 苗	
	總 數	種 苗	種 苗	種 苗	種 苗	種 苗
八、四五〇 畝	八、四五〇	八、四五〇	一、五二〇	六、〇八七	二、二二〇	二、二二〇
二、八五・八 千本	九、三八〇	二九六・〇 千本	五三〇 千本	四、四七九 千本	一、一三三・九 千本	四、七七一 千本
アカマツ	二七三・四	—	三六	一七・五	一九二	一五五・九
テウセンカ	九四・三	八四・〇	—	一〇・三	一、六九七	—
ラマツ	二、五八三	—	—	—	—	八八六
テウセン	五四三・〇	四三・〇	一	二六三・〇	二、三四	一三七・〇
マツ	四、三七七	—	—	—	—	二、〇三
クヌギ	六四・〇	一〇	一〇	—	—	六四・〇
其 他	一、三五・一	一、四七	一七〇・〇	四八三	一、〇七六・一	一〇六・〇
						六六八

地 方 費 經 營

林 業

施業面積 總數	新植		補植		新播		補種	
	數	面積	數	面積	數	面積	數	面積
アカマツ	一六,四四二	七二,九三六	八,一八二	六七,七八八	六九一	一三,三六三	—	—
クロマツ	一六,二八三	—	八,三〇四	—	六〇	—	—	—
カラマツ	三八,六七四	—	一〇,六七三	—	一九	—	—	—
テウセンマツ	九,三一九	—	一,五九〇	—	九五二	—	—	—
クヌギ	一三,八八三	—	四,五三九	—	八,五六六	—	—	—
クヌギ	三三,九一八	—	三,三六六	—	四三,一五三	—	—	—
ハンノキ類	二六,七九三	—	六,九五六	—	三,二〇一	—	—	—
ポプラ類	二二,二八七	—	二,一五九	—	—	—	—	—
ニセアカシヤ	七四五	—	五一	—	一,一三〇	—	—	—
其他	一五,八七三	—	二,九七七	—	一〇一,五八四	—	—	—
竹	二一八	—	二	—	—	—	—	—

營林署事業

買收材及賣却材

年次	買收材		賣却材	
	材積 <small>立方米</small>	價額 單價 總價額	材積 <small>立方米</small>	價額 單價 總價額
明治四十三年	四,三五四	二四三,七九 五,七五六	九一,三六一	一四,五三六 四,八七四
昭和八年	—	—	五,八三三 六九八 (素材) 二九一,三九二 一〇,五六 (製材) 一七五,二六三 三,六四九 四三三 二〇,八二三	一五,四八四

斫伐及製材

(單位立方米)

年次	伐木山地		市場著材		製材	
	材運	材地	總數	著材其他	資材製材	製材副產物 (層積)
明治四十三年	五四,三三	五四,三三	六六,七〇	六六,七〇	—	八九,六〇四 四八,三三一
昭和八年	四三,六四	四三,六四	九四,三六四	九三,〇四七	二,二四二	二六,二七六 一七,一三五 二九,三三七

林業

## 一一、鑛業

●主要鐵產物 ●朝鮮は各種の鐵產物に富み、就中、金(砂金)、鐵、石炭(無煙炭)、黒鉛は四大鐵産に算せられる。金鐵は到る所に分布し、平安北道、忠清南道、江原道、咸鏡南道等最も多く、砂金も各道に分布して居る。鐵は鐵は赤鐵鑛、褐鐵鑛、磁鐵鑛にして、赤鐵鑛は咸鏡南道利原、黃海道安岳の鐵山、赤褐兩鐵鑛の混合せるものに平安南道价川及黃海道載寧、銀龍、下聖、南陽、黃州、兼二浦等の鐵山あり、これ等の内兼二浦鐵山を除く外は主として褐鐵鑛を産し、赤鐵鑛は少い。將來有望なるは各地に豊富に埋藏せらるゝ磁鐵鑛にして、咸鏡北道茂山には四億噸以上の埋藏量ある優に南滿洲鞍山鐵床に匹敵するものあり、この外咸鏡南道端川、忠清北道忠州、慶尙南道金海、江原道襄陽等の磁鐵鑛床も豊富なる埋藏量を有して居る。石炭中の褐炭は、吉州、明川、鏡城炭田、會寧炭田、慶源慶興炭田最も賦存多く、其外、安州、鳳山、咸興炭田あり、近來之を低溫乾留して液體燃料製造の新工業が勃興して居る。無煙炭は全埋藏量十七億五千噸と稱せられ、平壤炭田を始め、文川、開慶、和順等の炭田及平安南道北部炭田の一部にて稼行し、將來有望視さるゝものに三陟寧越炭田、高原炭田等がある。黒鉛は鱗狀及土狀の二種あり、鱗狀黒鉛は平安



北道・咸鏡北道を、土狀黒鉛は慶尙北道、咸鏡南道を主要産地とし、品質共に良好にして、鑛山の主なるものは鱗狀黒鉛に在りては江界鑛山・新溪里鑛山・伏木鑛山・城干鑛山・城津黒鉛鑛山等にして、土狀黒鉛に在りては山野月明鑛山・小宮黒鉛鑛山・永興鑛山・長興鑛山・价川第一鑛山等がある。

亞鉛鑛床は平安北道寧邊郡蘇民洞・咸鏡南道端川郡檢徳に於ける鑛床は其の主要なるものにして、現在稼行しつゝある鑛山は、前記蘇民洞の蘇民鑛山・黃海道載寧郡の銀積鑛山・平安南道成川郡の成川鑛山等にして何れも三成鑛業株式會社の經營に係るが、頗る將來有望なる鑛産である。

タングステン鑛は軍事上必要なるものにて内地に無き貴重鑛物なるが、現在稼行中の鑛山は大華・百年・箕洲・谷山・九來里等にして、既知鑛床中江原道金剛山附近・忠清北道忠州郡・黃海道谷山郡及忠清南道青陽郡に存するものは其の主要なるものに屬し、其他諸所に發見せられたるもの亦少くない。

水鉛鑛も最近再び製銅事業の盛んなるに伴れ、採掘者多く、其主なるものは全羅北道の長水鑛山・江原道の金剛鑛山・黃海道の天惠鑛山等にして、其産額の殆んど全部を内地へ移出して居る。銀銅亞鉛金の混合鑛も亦昔時銀鉛として稼行せられたるものにして、疆内各地殊に南鮮地方に多く賦存し、漸次其開發を見るに至つた。

鑛産物の分布 尙ほ右の諸鑛物の外にも各種の鑛産を埋藏して居るが、各道に於ける主要鑛産物の種類を示すと左の通りである。

京 畿 道 金・銀・銅・鉛・亜鉛・鐵・硫化鐵・タングステン・水鉛・黒鉛・石炭・石

綿・砂金

忠 清 北 道 金・銀・銅・鉛・亜鉛・鐵・タングステン・黒鉛・石炭・砂金

忠 清 南 道 金・銀・銅・鉛・錫・鐵・タングステン・水鉛・黒鉛・石炭・雲母・石棉・

砒砂・砂金

全 羅 北 道 金・銀・銅・鉛・亜鉛・水鉛・黒鉛・砒砂・砂金

全 羅 南 道 金・銀・銅・鉛・亜鉛・鐵・水鉛・黒鉛・石炭・高嶺土・砒砂・砂金

慶 尙 北 道 金・銀・銅・鉛・蒼鉛・亜鉛・鐵・硫化鐵・タングステン・水鉛・砒・黒鉛・

高嶺土・砒砂・砂金

慶 尙 南 道 金・銀・銅・鉛・蒼鉛・亜鉛・鐵・硫化鐵・滿俺・黒鉛・石炭・高嶺土・砒

砂・砂金

黃 海 道 金・銀・銅・鉛・水鉛・亜鉛・鐵・タングステン・黒鉛・石炭・雲母・高嶺

土・砒砂・砂金

平安南道 金・銀・銅・鉛・安質母尼・水鉛・亞鉛・鐵・滿俺・黑鉛・石炭・雲母・砂金  
 平安北道 金・銀・銅・鉛・亞鉛・鐵・タングステン・砒・燐・黑鉛・石炭・雲母・砂金  
 江原道 金・銀・銅・鉛・亞鉛・鐵・硫化鐵・滿俺・タングステン・水鉛・黑鉛・石炭・石綿・高嶺土・砂金  
 咸鏡南道 金・銀・銅・鉛・亞鉛・鐵・黑鉛・石炭・雲母・高嶺土・砂金  
 咸鏡北道 金・銀・銅・鉛・亞鉛・鐵・水鉛・黑鉛・石炭・雲母・高嶺土・砂金

鑛種別鑛區數及面積 (昭和八年)

鑛種	鑛區數	面積	鑛種	鑛區數	面積
		千坪			千坪
金	鑛 一、六二	九八五、三〇	滿	鑛 二	二九四
銀	鑛 一六	四、七五九	俺	鑛 七	二、一七〇
銅	鑛 五	一、五七七	タングステン	鑛 九	三、四九六
水	鑛 三	四四	水	鑛 八	二、六四四
亞鉛	鑛 一四	六二、四一七	鉛	鑛 一	九六
鐵	鑛 六	二、三三三	タングステン水鉛鑛	鑛 一	三六八、八五一
硫化鐵	鑛 六	二、三三三	砒	鑛 一	九六
其他鑛	鑛 六	二、三三三	其他鑛	鑛 一	九六

鑛業

燐	鑛	一	九〇	蠟	石	八	三、七〇〇
黒	鉛	一三四	一九、四〇一	螢	石	九	二、九三三
石	炭	三〇〇	四七〇、七五三	重晶	石	三	二、三五〇
雲	母	二	三、六七三	砂	金	一八四	六〇、四一〇
石	綿	六	三、九一九	一切鑛物	計	三	× 一〇三、三五〇元
高	土	五	九、三三〇	合	計	三、三三三	× 一〇五、〇四四元
硃	砂	三	三、五五七				× 一〇二、三五〇元

備考

本表には雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを計上せり、×印は河床の延長に依り許可したるものにして、單位は里町間とす。次表亦同じ。

鑛種別稼行鑛區數及面積 (昭和八年)

金	鑛	種	鑛區數	面積	鑛	種	鑛區數	面積
銅	銀	鑛	一、〇八一	六七、四三四 <small>千坪</small>	亞鉛	鑛	二六	六、七八八 <small>千坪</small>
鉛	鑛	鑛	一	一、五六一	安質母	鑛	一	九、六六一
水	銀	鑛	一	三八	鐵	鑛	三	一六、八三三
		鑛	一	八五	硫化鐵	鑛	七	三、三六六

石	雲	石	黑	金銀銅鉛亜鉛其他鑛	砒	タングステン水鉛鑛	タングステン鑛
綿	母	炭	鉛	鑛	鑛	鑛	鑛
二	三	七	三〇	六	一	一〇	四
一、八二三	六〇七	五、八七一	八、二一〇	三、七五五	一、一五三	三、五五五	三、〇三三
合	一	砂	重	砒	明	螢	高
計	切	品	品	鑛	鑛	石	嶺
物	鑛	金	石	砂	石	石	土
一、四七一	二	九〇	七	四	五	七	八
×元・三・〇六	八四、七八	×元・三・〇六	二、七五五	一、一六三	一、三三九	三、七二一	三、二三五

鑛 産 額

(昭和八年)

種	別	數	量	價	額	種	別	數	量	價	額
金	鑛	一〇、三〇三	四八瓦	二六、〇〇六	四、七四四	銅	鑛	五、九四四	四瓦	四、九七五	四、九七五
金	銀	二、二六三	三瓦	一、九〇六	四、四五	銅	鑛	七、八四八	四瓦	四、七、三、六八	四、七、三、六八
銀	鑛	二、八六四	五三瓦	七二、五二	一、二七六	鉛	鑛	二、二七六	一瓦	一、二七六	一、二七六

鑛 業

九五



鑛業出願

昭和八年

明治四十三年

	出願受理件數	鑛區數	稼行區數	出願受理件數	鑛區數	稼行區數
總數	四、八七七	二、五五六	一、二三五	七九九	四六三	一三一
金銀鑛	三、四〇八	一、六一	一、〇八一	四八九	二四三	四三
砂金	三七	一八四	九〇	二七四	一七六	七九
金・銀・銅・鉛・亞鉛其他鑛	一、四三	六二	六	三六	四三	一

金産額

	總數	金	砂金	金銀鑛	汰鑛
明治四十三年	五、〇七六、一八九 <small>円</small>	三、七四、九五七 <small>円</small>	八二、六〇九 <small>円</small>	二六三、九九二 <small>円</small>	三四六、六三一 <small>円</small>
昭和八年	三、三〇〇、八九一	二六、〇六六、七四	三、三七、六六三	一、九四六、四四五	(金銀鑛に含む)

備考 明治四十三年の金は鑛業権者の報告を其儘集計したるため銀を含む。

鑛産額比較 (昭和八年)

(主要なるものみの數字を掲す)

朝鮮 內地 臺 灣 樺 太 關東州及  
鐵道附屬地 南洋群島

總生產價額(円) 四八、三〇一、四六四 四九、九九七、九〇四 一五、一九六、二五〇 六、七〇三、九一六 三、三四八、一五二 一、三六二、八七九

主要鐵產物

金 數量(金) 一〇、二〇三、四〇八 一三、七〇一、二〇〇 五九九、二〇八

價額(円) 二六、〇六七、七六四 三三、七九〇、六六八 一、五八一、三三八

砂金 數量(金) 一、三〇四、七五七 二七、三九〇

價額(円) 三、三七、六六二 五五、六三四

石炭 數量(噸) 一、三〇六、七四四 三三、五三三、七四六 一、五三三、一〇三 八八八、九一三 七、八〇六、七三四

金額(円) 七、三〇五、四〇六 一九五、四六七、二六四 七、六八一、六九九 六、七〇三、九一六 五〇、二五〇、二〇〇

鐵鍍 數量(噸) 二五八、二六七

金額(円) 一、二八七、七八八

銑鐵 數量(噸) 一六三、九三七

金額(円) 五、六〇五、六一一

※ 三三、四八〇 一一、六六九 一、二〇〇、八七一

※ 八、九〇六、四八八 二、一〇九、〇七六 一、八七六、二六六



鋼鐵	數量(尾)		金額(円)	
	—	—	—	—
備考	—	二、六三、九七〇	—	—

朝鮮の鐵鐵産額は五二二、五五三瓊なるも右表の數字は銑鐵原料に供したるものを含まず。

内地の鐵の生産額は鑛山及砂鐵の製鍊所並に主として内地産鑛を處理するものゝ産額にして八幡製鐵所、再製銑製鐵所及他産銑を原料とする製鋼所の生産額を包含せず。又銑鐵産額中には本表鋼の原料に供せられたるものを含まず。

※は鑛業法又は砂鑛法の適用を受けざる製鍊場に於て製鍊したるもの。

## 一二二 工業

工業の勃興 朝鮮の工業は往時相當の發達を遂げたることありしも、秕政の結果漸次衰退し、李朝の末期に在りては纔に機業・窯業・製紙業・皮革業・醸造業・金屬工業等の家内工業等小規模工場工業に其の片影を留むるに過ぎず、日常必需品の多くは之を輸入に俟つ状態なりしが、施政以來銳意之が改善と發達に努めたる結果、在來工業品の品質は漸く改善せられ、産額も亦増加し來れると同時に、朝鮮人の工業に關する知識開發せられ、工場經營を試みんとする者増加し、且内地資本家の朝鮮進出を爲す者多きを加へ、紡織・製絲・製鐵・精糖・パルプ・硬質陶器・セメント・製粉・製油・硫安・硬化油等各種の大工場設立せらるゝに至り、殊に最近滿洲國の建國、日滿新交通路の開通以來、滿蒙に對する經濟進出上朝鮮の地位有利なるを認め、或は朝鮮に於ける各種工業資源の開發に着目し各種事業を目論むもの益々増加して居る。昭和八年に於ける工産額は三億六千七百二十三萬圓に達し、此の内一億四千七百四十六萬圓は家内工業又は副業の所産である。朝鮮は地理的に有利なる地位に在る上に各種の原料及動力資源も豊富であり、勞力過剰し

勞銀低廉なるを以て、製造工業の經營は將來頗る有望である。  
主要工産物 家内工業としては、機業に木綿織物、麻織物、絹織物あり、陶磁器、朝鮮紙、酒類

(藥酒、酒) 金屬品(真鍮製食器、金銀、火鉢、便)、莞草蓆及莞草スリツバ、竹細工、硝子珠、繩込等は主要なるものである。工場工業としては、製絲、綿紡織、絹織物、絹織物、人絹織物、靴下、綠綿、金屬製鍊、金屬製品並機械器具、陶磁器、硝子、セメント、煉瓦、石炭液化、石鹼、油脂、硬化油、護謨製品、製紙、硫酸アンモニア、皮革、醸造品(日本酒、麥酒、燒酎、醬油、味噌)、製粉、澱粉、精糖、精米等の大工業が各地に勃興しつつある。

### 種類別工場數

工場數	從業者數	生産品價額	
		加工及修理料	
明治四十四年	二五二	一九、六三九、六五五円	
昭和八年	四、八三八	三六八、六三三、五三三円	一六、一八九、六五五円
紡織工業	二六六	三八、七三〇、九二二	一七八、三〇六
金屬工業	二二九	二九、三三七、八四九	八五、五六三
機械器具工業	二七二	三、〇一〇、四一六	一、八〇五、三二一
窯業	三〇五	八、七一九、七二〇	四三、九五二
化學工業	八二〇	二四、四四五	—
工業			

工業

1011

製材及木製品工業	1011	4,533	9,950,681	63,896
印刷及製本業	256	6,221	9,549,468	16,734
食料品工業	2,183	4,529	101,330,607	13,876,221
瓦斯及電氣業	51	1,355	10,986,745	—
其の他の工業	245	4,589	5,143,022	119,782

工産物價額 (單位円)

總額	15,645,129	紡織工業	—	金屬工業	—	機械器具工業	—	窯業	—	化學工業	—	製材及木製品工業	—	印刷及製本業	—	食料品工業	—	瓦斯及電氣業	—	其他の工業	—
明治四十四年	15,645,129	昭和八年	3,573,565,553	3,573,565,553	91,086,667,503	22,141,586,591	5,268,868,969	9,949,468,237	3,373,886,000	9,986,745,000	13,876,221,000	10,986,745,000	5,143,022,000	119,782,000	—	—	—	—	—	—	

主要工産物 (昭和八年)

紡織工業	數量	價額	數量	價額
一、製絲	—	1,785,551	—	6,146,600
生絲	—	1,537,073	—	15,933,757
二、紡績	—	1,785,551	—	6,146,600

工業	窯業	綿絲	八、三三、六〇〇 <sup>庄</sup>	一、陶磁器	二、一五三、六三〇 <sup>円</sup>
		三、織物	六、一四六、六〇〇 <sup>円</sup>	セメント	五、六三五、四七〇 <sup>庄</sup>
		綿織物	一五、八六三、五五九	化學工業	二四八、九九四 <sup>庄</sup>
		絹織物	三、七三三、七五二	一、藥劑	七〇、五一九、一七〇
		麻織物及 麻交織物	七、〇六二、三〇〇	賣藥及 賣藥類似品	四、四五六、七八四
		四、莫大小製品	二、四六三、五八六	二、植物油脂	四、〇八六、〇三五
		靴	二、二六九、四八三	三、動物油脂	三、九三八、三五五
		金屬工業	九、一〇八、三六六	鱈油	四、三六七、九三五 <sup>庄</sup>
		一、鑄物	二、三三〇、七四八	四、加工油	三、九八六、九九二 <sup>庄</sup>
		銑鐵鑄物	二、三四、八九一	五、護謨製品	七、〇四〇、九四〇
鍋、釜、鐵瓶 及其他	一、八七〇、四八八	靴及其他の 履物	六、九一三、〇六四 <sup>足</sup>		
機械器具工業	七、五三三、〇三三	六、製紙	三、七九三、一四九 <sup>足</sup>		
一、車輛	三、一九〇、三三五	包裝用紙	四、九三九、四二一 <sup>庄</sup>		
鐵道車輛	二、一〇〇、二六四	朝鮮紙	二、三六九、六七一 <sup>庄</sup>		
	一、二、四一、五七八	七、肥料	二、一八七、二七四 <sup>庄</sup>		
			三、三三五、三七七		

工業

植物質肥料	三、三七、七〇八	食糧品工業	一三、七九、八五六
動物質肥料	四、九五、四三三	一、酒類	五〇、四九〇、五〇五
魚絞糟	七六、七五、六七〇	清酒	一六二、九八
鍍物質肥料	三、七〇、四九八	燒酒	八〇七、三三
硝酸アム	四〇、一三	藥酒	三四七、八九六
モニヤ	三、五四七、〇九五	濁酒	二、〇八九、四三
硫酸アム	二四、七五	二、醬油及溜	三、三一、九九八
モニヤ	一九、〇五九、九一八	三、味噌	五、八三六、二六四
八、其他	—	四、製粉	—
コークス	三三〇、二五三	小麥	三九、九五六、七五〇
煉炭	一、四、六五三	五、澱粉	—
木炭	八二、一九	六、砂糖	三、二〇一、八九
製材及木製品工業	—	精製糖	六、四九二、五〇八
一、木製品	—	七、菓子	六、九七三、三〇四
家具	—	八、水産品	九、三六五、三六八
印刷及製本業	—		
一、印刷	—		



工業

一〇六

職工總數	職工		生產品價額 (円)	職工一人に付生産 額(円)	備考 内地は昭和七年末現在調なり。
	男	女			
九,四三〇	六,一八七	三,二四三	五八,六三三・五三	三・七〇七・六	
一,七三三・五二	八八,三〇七	八七,二〇四	—	—	
六,七三三	四,一八三	二,五五〇	二〇六,七三三・八三	三,一九三・〇	
六,三三二	五,二〇八	一,一二四	五九,六二九・八四	九,九三三・四	
六,三三四	五,一六九	一,一六五	二九,八六六・六四	一,八八七・七	
三三三	—	—	一五,五〇〇・五七	五九,二三・六	

工業額 (昭和八年)

總生産額	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
五七,三五六・六五	五,九六二・四九	三〇六,七三三・八三	五九,五六一・三四	二九,八六六・六三	二,四三三・五六	





には内地人の漁村も多くまた季節的に内地漁夫の朝鮮沿海に通漁するものも尠くない。

水産業者戸口

	明治四十 四年末		昭和 八年末	
	戸數	人口	戸數	人口
區分	内地人	四、三三九	朝鮮人	一四、三三二
	朝鮮人	八三、五三〇	内地人	四、四三四
總數	八七、八六九	二七五、〇三六	一四六、三六三	三三〇、四五五
漁撈	五八、〇四〇	一八二、三三九	一〇六、五八八	二二六、一九四
養殖	三、九一七	一一、〇四三	二八、三三二	九四、八五四
製造	一〇、〇七三	三三、八四六	一一、四三三	二九、四〇七
(水産物 販賣業)	一五、八三九	四六、八八八	削除	削除

水産業者用船舶

漁船及運搬船

昭和八年末

大正元年末

總數

漁船 運搬船

總數

漁業及水產物製造  
 養殖用 運搬販賣用

動力を有せざるもの

不登簿船

朝鮮型 内地型 其他

一、九、五、六  
 二、一、七、五  
 一、九、五、五

三、六、〇、三  
 二、一、五、三  
 二、六

動力を有するもの

發動機船

汽船

一、一、二、五  
 四、九、三

汽船

一、一、二、五  
 四、九、三

水產物生産高

總數

九四、一、八、〇、七、九円

漁獲高

六、七、六、三、一、六、〇円

養殖生産高

？円

水産製造高

二、六、五、四、九、一、九円

水産

昭和八年 八九八七、二二六 五二、三七八、二五八 二、九〇三、九二二 三五、五八九、一四六

出漁船及漁獲高

昭和八年

大正元年

總數 内地人 朝鮮人

出漁船 七九、五二

一六、一五五 五六五三 一〇、五〇二

乗組人員 四七七、四六四

一八三、二九七 一三、四八八 一六〇、八〇九

漁獲數量(ト) 一、〇〇七、五八三、〇三三

— — —

高價額(円) 五二、三七八、二五八

八、四六六、〇八一 三、六三六、二三八 四、八八九、八五三

主要漁獲高 (昭和八年)

數量 價額

數量 價額

ア ナ 四、四三、八七五 五七七、〇九五

エ ビ 二、二七九、二〇四 一、六四四、六九九

ア ジ 七、九七五、三五一 七六七、一五一

カ タクチイワシ 三、四五〇、七四七 三、〇三三、八一〇

エ イ 四、五三七、六二三 五三一、三六七

レ イ 一四、二八、六四〇 一、三三三、九〇八

グ	チ	六七、〇三六、六六一	三、七〇六、四九九	ニ	シ	四〇、四八〇、七三三	一、九〇二、一九三
ク	ヂ	二、一二三、八〇七	六二〇、二九一	ハ	モ	四、二九二、九二二	五九九、九六二
サ	バ	一〇三、六二二、七七六	六、三八四、八二五	ヒ	ラ	三、八一六、九〇四	六八五、四〇六
サ	ワ	三、六六六、二一八	一、四〇四、一七九	ブ	リ	三、五〇八、三三三	七三七、六三六
タ	イ	三、三六二、四八八	一、五三七、四一八	フ	カ	八、五四三、九六〇	五八五、五〇八
タ	チ	二四、八一八、七〇三	一、六四二、五〇〇	フ	ノ	三、六五七、七四四	七三四、五五六
タ	ラ	三三、四三三、三二九	一、七三三、四三六	ボ	ラ	三、三二九、〇五三	五七五、三八一
ナ	マ	四、三三三、九六一	五三四、三六六	マ	イ	三三六、七五八、二七六	五、七六六、五四八
ニ	ベ	五、九二二、六三二	九二二、八八一	メ	ン	七四、〇四二、八五八	三、五四九、二二六

備考 本表は漁獲高五十萬圓以上のものを掲上す。

### 水産製造物

種別	數量	價額	種別	數量	價額
總數	—	三、五八九、一四六	節類	三、七五〇	八五〇
食用品	—	二、三、九六三、八一九	素乾品	—	七、七四五、〇九九
水産					

水産

明太魚 一三、二七、四七<sup>庄</sup> 三、二五、六四<sup>四</sup>

海苔 四一六、六三六、七九四<sup>枚</sup> 二、四九、七四一

其の他 一、九八、七六六 一、九八、七六六

鹽乾品 八、〇五、二七六<sup>庄</sup> 二、〇一、五、八四四

石首魚 四、六九、四九九<sup>庄</sup> 一、〇四、五、〇四九

其の他 三、八四、五七七<sup>庄</sup> 九七〇、八三五

煮乾品 一三、八四、三四<sup>庄</sup> 四、八三、八八九

鱈イリコ 七、八五、一三三<sup>庄</sup> 二、七五、三、二〇〇

其の他 五、九四、一九二<sup>庄</sup> 二、〇七、九、〇六九

鹽藏一品 三三、三九、九〇〇<sup>庄</sup> 四、三、一、五四三

石首魚 五、六三、〇〇四<sup>庄</sup> 一、一、一、六、三三一

鯖 八、四六、〇三三<sup>庄</sup> 八、八三、〇七四

練 四、五、六、七、六三<sup>庄</sup> 六、九、七、四七

其の他 一四、五、九、八、一〇一<sup>庄</sup> 一、七、五、三、四九〇

罐詰品 一、四、三、一、〇三三<sup>庄</sup> 一、四、三、一、〇三三

瓶詰品 一〇、八、八、三、九三<sup>庄</sup> 五、五、七、六六<sup>四</sup>

鹽辛品 四、四、五、六、九八一<sup>庄</sup> 一、九、八、七、三、八九

明太魚卵 六、三、八、一、四三三<sup>庄</sup> 九、五、八、八、七

其の他 二、〇、六、二、七六<sup>庄</sup> 一、〇、三、八、五、六一

冷凍品 二、九、四、三、二七<sup>庄</sup> 四、三、三、九三

其の他 二、〇、五、三、九五六<sup>庄</sup> 一、四、六、九、九、五

蒲鉾 八、八、九、二、六二<sup>庄</sup> 七、四、五、八、二、五

其の他 七、三、四、一、六〇<sup>庄</sup> 七、三、四、一、六〇

非食用品 一、二、六、三、五、三七<sup>庄</sup> 一、二、六、三、五、三七

壓搾肥料 七、三、〇、〇、五、二四三<sup>庄</sup> 五、八、〇、〇、七、八三

鱈締精 七、二、四、八、〇、七六<sup>庄</sup> 五、七、二、六、一、四七

其の他 一、五、三、七、一、六六<sup>庄</sup> 七、四、〇、六、六

乾製 八、七、四、一、二、八三<sup>庄</sup> 二、八、六、二、八、五

其他の肥料 四、六、九、三、五、五五<sup>庄</sup> 四、八、四、五、〇、〇〇

魚油 四、三、六、五、一、九五<sup>庄</sup> 四、六、七、三、九、八

鱈油 四、三、六、五、一、九五<sup>庄</sup> 四、六、七、三、九、八

其 他 三〇四一、五〇〇<sup>立</sup> 三三八、五〇三 海藻 晒藻 九〇、三〇六<sup>庄</sup> 一〇七、七七七  
 工 藝 品 | 二六、七九〇 海藻 乾藻 一、二〇〇、四三三 五三四、六六六  
 藥 用 品 | 一八、七六六 其 他 一四、三三〇  
 小分類は五十萬圓以上のもののみを掲上す。

水産養殖

	總 數		總 價 額	
	養殖個所	養殖面積	數量	價 額
大 正 七 年	六五	二四、七二六、〇四六 <sup>平方米</sup>	六四六、〇〇〇 <sup>尾</sup>	一〇四、三五六 <sup>圓</sup>
昭 和 八 年	一、二八五	三三三、六二七、五五五	四一八、一五八、五九四 <sup>枚</sup>	二、九〇三、九二一
總 數	一、二八五	三三三、六二七、五五五	四一八、一五八、五九四 <sup>枚</sup>	二、九〇三、九二一
ノ	四九三	五六、〇一五、五三七	四一六、六三六、七九四 <sup>枚</sup>	二、四九九、七四一
水 産				一 一三

水産

一一四

カキ	一六〇	五六、二〇、四〇七	二、四五〇、五八二 <small>斤</small>	三〇〇、〇七四
ウナギ	二	一八一、〇〇五	五八、二五 <small>斤</small>	六二、〇〇〇
其他	四三〇	一一〇、三〇、五七六	一、五二一、八〇〇 <small>枚</small>	四二、〇九七
其の他			五六、七〇六 <small>斤</small>	

魚市場

昭和八年

大正元年

市場數

二八

二六

市場數	昭和八年		大正元年	
	數量 <small>斤</small>	金額 <small>円</small>	數量 <small>斤</small>	金額 <small>円</small>
總賣上高	五三、五七三、一八三	六、九九〇、五一六	一三、二四九、〇八八	二、一九〇、六六六
朝鮮内消費高	四八、〇六六、八〇二	六、〇三四、〇九〇	一一、四一六、九五五	二、〇五一、六九一
移出高	三、三二六、七三七	四九〇、六六八	六六一、四一〇	一〇六、六一四
輸出高	二、一八九、六四四	四六五、七五八	一七〇、七三三	三二、三六〇

捕鯨



明治四十三年 昭和八年	捕鯨船數	捕鯨高			一隻平均 捕鯨高	一頭平均 價額
		頭數	價額	額		
一四	一四	三三六	二三八六六二	二四〇〇	八〇〇	
二二	二二	一七七	六〇九五二二	八〇〇	三四四四	

水產業者比較 (昭和八年末)

	朝鮮	內地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
水產業者戶數	一四、六三	—	—	五、五〇一	九、〇六七	八〇三
漁業	一〇六、五九八	—	—	五、五〇一	九、〇六七	—
養殖業	二八、三一	—	—	—	—	—
水產物製造業	一一、四三	—	—	—	—	—
水產物販賣業	—	—	—	—	—	—
水產業者人口	三五〇、四五五	一、四九九、一七五	二二七、六一	二五、三五九	二二、一五	一、五三九
漁業	三三六、一九四	一、〇九七、二五四	八四、四九	二五、三五九	二二、一五	—
養殖業	九四、八五四	一四、六五五	二八、四七八	—	—	—

水產

水産

水産物製造業	二九、四〇七	二五七、二六六	四、四二五	—	—
水産物販賣業	—	—	—	—	—
總戸數千に付	三七〇	—	—	九三一	三六・三
水産業者戸數	—	—	—	—	四三八
總人口千に付	一六・九	三・三	三三・二	八四・一	一六・四
水産業者人口	—	—	—	—	一八七

備考 内地は農林省統計による、尙内地の總人口に對する割合算出に當り總人口は昭和八年十月一日現在の推計人口による。

漁獲物比較 (昭和八年)

	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島	
總價額(円)	五、三七八、一五〇、六三三、八七四	二〇、八〇六、六七〇	六、八九二、三四一	五、〇三三、八六七	一、七九〇、三七三	—	
數量(噸)	八三六、九六六、八六九	二、八六〇、五五五、五〇〇	—	三三〇、五八〇、九八三	四五、八三三、三四五	七、三五、〇八八	
魚類	價額(円)	四四、〇九一、四三四	一三八、一五一、七二二	一〇、〇三四、八八七	六、〇九八、五四三	四、二五八、三四一	一、七〇八、九三三
	數量(噸)	三二、六六四、一七四	一三三、五九三、一三六	四三、八六六	三、五九五、三六三	四三二、二八八	—
貝類	價額(円)	一、八九四、八九〇	七、九七二、〇一〇	四一、八九九	三四、三七〇	六三、七四〇	七五、一七六



水産

備考	其他		魚油		肥料		鹽藏品		煮乾品		鹽乾品		素乾品	
	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量
内地の數字は農林省統計表による。	八、八三四、六八三	四	四、八四五、九〇〇	四	六、〇八七、〇六八	四	四、三八一、五四三	四	四、八三一、八八九	四	二、〇一五、八八四	四	四、六〇一、三三〇	四
	四八、七八五、〇五九	一	六、九四七、一九八	一	二八、八四三、八五七	一	九、七七三、三三一	一	一六、七九四、五二二	一	八、三〇〇、一八九	一	三、三三二、九三八	一
	三八五、七〇三	一	四三、〇四六	一	二、一九五	一	二四、五三〇	一	五五〇、四九五	一	一九五、四九一	一	五九六、三〇一	一
	四二一、七〇七	一	四六四、四〇三	一	五、六七一、五六四	一	一、三四四、五三六	一	二、七五八、四三二	一	六三三、七八五	一	九、三二一、三九七	一
	八、〇三三	一	一〇、七九六	一	一一五、三〇五	一	一、三四四、五三六	一	一六、九九五	一	四〇七、五〇九	一	二、一八一、五四三	一
	六、四六六	一	一〇、七九六	一	一、一五五、三〇五	一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一
		一		一		一	九一、二七五	一	二、五七三、五四六	一	六三三、七八五	一	二、一八一、五四三	一

# 一四 商 業

●商店及商人 古來朝鮮人の商業取引は、大部分物々交換時代の遺物たる舊式の市場に於て行はれ、常設店舗に於て營業するものは極めて尠く、その取引方法も甚だ幼稚で、また賣買高も至つて僅少であつた。近時漸く市街の發達に伴ひ、常設店舗を設けて商業を營むものが増加して來たが、取引上に於ける勢力は頗る薄弱で、卸賣問屋の如き大資本を要する商業取引に、朝鮮人の携はつて居るものは極めて少く、大部分は朝鮮人相手の小賣を營むに過ぎない。朝鮮人商賣の名稱及び看板等も漸次内地流になつて居るが、今試みに在來のものに就いて二三の例を述べて見ると、客主(娼屋)、居間(仲立)、都賣商(卸賣)、散賣商(小賣)、權負商(行商)、典當舖(質屋)、福德房(厨役)等があり、商店名の舊來の名稱を踏襲せるものとしては、

- 毛物塵(毛皮、毛皮製品店)、鞋塵(鞋店)、布木塵(織物類を賣る店)、笠子岩巾(笠子(平常用ゆる帽)子岩巾(虎毛にて)、網巾塵(網巾(虎鬚にて製したる巾、須髮)の亂れざるやうに纏ふもの)店)、鎗器塵(銅器、真鍮製)、鐵塵(鐵器、衣盒店)、瓮器塵(香燭、物店)、砂器塵(磁器店)、冊肆(本)
- 銀房(銀細工、工屋)、玉房(玉細工、工屋)、飯饌假家(日用品店)、乾劑藥局(漢藥)、貝物塵(玉製裝、身具店)、喪頭都家(喪具店)、貫物塵(冠婚葬祭用品店)等がある。

●市場 朝鮮に於ける市場取引は商業上最も重要なる部分を占め、殊に都會地以外に在りては、

日用品の賣買は殆んど市場のみに於て行はれ、市場は生活上、及び經濟上極めて大切な機能を有して居る。昭和八年末現在の調査に據ると、市場規則第一條に規定されてある第一號市場（場屋を設け又は設けざるも區劃したる地域に於て毎日又は定期）、一千四百三十六、この一箇年の賣買取引高一億八千四百一十四萬一千圓、第二號市場（二十人以上の營業者一場屋に於て主と）、二十、賣買取引高一千六十三萬五千圓、第三號市場（委託を受け購買の方法に依）、四十一、賣買取引高一千二百五萬圓になつて居る。開市日は、主要市街に設置されて居る公設市場、魚菜市場は毎日開市する、が、在來の普通市場は大抵一六、二七、三八、四九、五十と云ふやうに五日目毎に開市され、中には毎日開市又は月三回或は附近市場と交互に定期開市のものあり、藥令市の如きは秋期又は冬期に一箇月乃至二箇月一回開市される市場は概して交通の便利なる地に設置され、河原、路傍等の空地を利用して居るものも今尙ほ尠ならず、中には墓地の附近などに設けて居るものもあるが、郡廳の所在地に開かれて居る市場の數が甚だ多い。市場の分布は一郡四、五箇所より十箇所内外に及ぶものもあり、市場の大小並に季節に依りて、商人及び購買者の出場數は一定しないが、數百人より數千人の多きに達し、秋の收穫後は市場の最も繁昌する時で、春より夏に掛けては一般に取引閑散の時である。市場の利用範圍は、三四里より七八里に及ぶ。

商業組織 以上は主として朝鮮商賣の状態を述べたのであるが、各市街地には内地人の商店も

多く、近年百貨店の進出も眼覚ましきものあり、また支那商人の市街及村落に於ける活躍も著しきものがある。市場の外に、取引所及正米市場もある。商業組織としては會社組織の經營が次第に發達し、最近の會社数は二千二百八十社、其公稱資本金六億八千二百萬圓に達し、内地又は外國に本店を有し朝鮮に支店を設くる會社數も百六十二を算して居り、また保險業の發達も見るべきものがある。

會社

昭和八年

明治四十四年末

業	朝鮮に本店を有する會社		朝鮮に本店を有する會社	
	社數	公稱資本金 千円	社數	公稱資本金 千円
總數	二,三八〇	六二,四七六	一六三	一五三
農林業	二三	四,三七六	三	二,四三五
商業	八二	五,〇四一	一一	七五二
鑛業	三六	七,九五〇	一	三〇〇
工業	五二	一七,九四〇	二七	二,六五七
總數	一〇八	一八,一八八	三	一,一三七

商業







銀行及 金融業		鑛 業		工 業		商 業		水 產 業	
社	資	社	資	社	資	社	資	社	資
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
數	數	數	數	數	數	數	數	數	數
拂 達 資 本 金	一 三 〇、 一 一 〇	拂 達 資 本 金	二 四、 一 四 五	拂 達 資 本 金	一 七 五、 九 四 〇	拂 達 資 本 金	三、 七 九 六	拂 達 資 本 金	三、 八 七
一、 八 三 九、 〇 一 八	—	七、 〇、 五 八 六	—	五、 五 四、 〇 五 九	—	四、 一 六 五、 〇 七 八	—	二、 三 四 六	—
二、 三、 一 〇 九	三、 九、 〇 三 六	一、 九、 一 三 三	三、 一、 三 五	一、 九、 五、 九 八 四	二、 八、 六、 九 九 八	三、 九、 五、 〇 八	七、 六、 六、 六 三	七、 四、 六、 六	一、 〇、 三、 〇 六
七、 五、 二	—	二、 〇	—	一、 一、 六、 一	—	二、 二、 七、 一	—	一、 五、 一	—
三、 四、 九、 一、 二	—	三、 三、 五、 六、 六	—	一、 五、 四、 三、 〇、 三	—	六、 一、 〇、 四、 六	—	四、 五	—
—	—	—	—	一、 〇、 六、 三	二、 〇、 六、 〇	一、 四、 八、 四	二、 二、 七	空	空
—	—	—	—	—	—	五	—	三	—

運輸業	社		資		其他	資	社	資	其他
	數	金	數	金					
運輸業	39	5,083	187	1,873	1	1,000	1	1,000	1
資	106	9,500	1	187	1	1,000	1	1,000	1
拂込資本金	55	2,821	157	1,566	1	1,000	1	1,000	1
社	35	359	1	1	1	1	1	1	1
資	134	1,021	1	1	1	1	1	1	1
其他	67	311	1	1	1	1	1	1	1
拂込資本金	67	311	1	1	1	1	1	1	1

市場

市場數 開回數

賣 買 高

明治四十四年	昭和八年	種類別 (昭和八年)	總額	農產物	水產物	織物	畜類	其他
1,084	7,144	1,084	5,162,444	1,868,821	5,160,180	1,310,137	2,961,015	3,681
1,084	7,144	1,084	5,162,444	1,868,821	5,160,180	1,310,137	2,961,015	3,681
1,084	7,144	1,084	5,162,444	1,868,821	5,160,180	1,310,137	2,961,015	3,681

第一號市場	總數	種類別 (昭和八年)	總額	農產物	水產物	織物	畜類	其他
1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084
1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084
1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084	1,084

第二號市場	三〇	六八三	一〇,六五,九五五	四,七九,七三	三,三九,三三	三三,一八	五,三五	二,三五,六九
第三號市場	二	三六三	三〇,四,五〇五	二,四九,七〇九	九,六四,九七	—	—	—

保 險 (昭和八年)

社 數	支店支部分 出張所及 代理店數	年 末 現 在 契 約 高			收 入 保 險 料	保 仕 保 險 金
		件 數	金 額	保 險 料		
三	一,九二六	一五,七四四	二九八,九九七,一三三	一〇,九二,二三四	三,〇五四,〇三	
四	三,〇五八	二四九,六〇八	五三八,五三一,八八六	四,二八四,二九五	一,九五六,〇三七	
四		二三八,六六六	五二〇,九三〇,一四五	三,五六九,〇七九	一,三三三,四七一	
一七		九,八七七	一九,四六八,六三六	六四六,〇三七	六二二,四六五	
一六		六〇四	七,〇八二,〇六三	六〇,八八三	一七,七二一	
九		三五〇	七四三,九八八	二,八八四	一,三五四	
四		九八	一三七,一五四	三,三九二	八五九	
二		一	一五〇	一	—	

信用保險  
森林保險

賃銀指數

一 二 三 一六〇・七五〇 一九九 二五七

年次	內地人朝鮮人		月次	內地人朝鮮人		平均	內地人朝鮮人	
	指數	數		指數	數		指數	數
昭和元年	100.0	100.0	一月	82.6	76.3	八月	82.6	76.9
同二年	101.6	101.5	二月	82.5	75.7	九月	86.6	83.2
同三年	103.3	105.0	三月	82.3	76.0	十月	86.5	83.7
同四年	101.3	103.5	四月	83.2	76.6	十一月	88.7	83.1
同五年	95.6	93.9	五月	83.0	77.0	十二月	85.8	83.0
同六年	84.3	83.9	六月	83.5	76.0	平均	85.8	83.0
同七年	86.0	80.5	七月	83.5	76.5			
同八年	84.6	76.1						
同九年	85.8	82.0						

商業

賃 銀 調

	昭和九年十二月平均賃銀		昭和元年を基準とせる指數	
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
指數總平均	—	—	八五・八	八二・〇
熟練勞働者	—	—	八六・四	八三・一
1 建物に關するもの	—	—	八〇・七	七八・〇
家 作	三・〇三 <sup>円</sup>	一・七〇 <sup>円</sup>	八五・一	八四・六
船 造	二・九八	一・五八	七七・四	六八・四
左 官	三・三六	一・九八	八六・六	八六・五
石 工	三・三四	一・八三	八二・七	七八・九
木 挽	二・七三	一・六五	七四・〇	七六・〇
家 根 葺	二・九八	一・五五	八一・五	七四・二
瓦 葺	三・〇六	一・七三	七九・一	七八・六
煉 瓦 積	三・〇九	一・八三	七六・九	七七・二

商 業	ペンキ塗職	二・九〇	一・五九	八一九	七七・九
	2 器具製造に關するもの	—	—	八二・六	八一・四
	指物職	二・八九	一・六五	八一・四	八〇・七
	建具職	三〇・一	一・七八	八六・五	九三・七
壘刺	二・七六	一・四八	八〇・九	八五・一	
表具師	二・五九	一・四五	七九・〇	七七・一	
桶工	二・六六	一・四六	八五・〇	七八・一	
車製造職	二・六三	一・五一	八二・七	七三・七	
3 交通に關するもの	—	—	九六・六	七六・四	
汽船	×四〇・〇〇	×二五・五〇	九八・四	八〇・三	
下級船員	×三五・〇〇	×一九・〇〇	一〇七・七	八二・六	
帆船	—	—	八三・八	六六・四	
其他	×三一・六七	—	九五・六	一〇一・七	
4 飲料及衣料に關するもの	—	—	一〇三・六	九〇・六	
染物職	二・三二	一・一五	八三・一	七二・六	
洋服裁縫職	二・五五	一・五一	—	—	

杜師

×七四・二三

×四〇〇〇

九六・三

一二九・七

醬油製造職

×五五・〇〇

×二七・五〇

九九・四

一一三・八

5 雜

靴職

二・三三

一・四六

八五・四

七〇・五

理髮職

一・九一

一・三三

九五・五

九六・九

活版植字工

二・二三

一・二六

八四・九

八四・六

不熟練勞働者

|

|

八四・一

七九・一

寫人足

二・六四

一・五五

八六・〇

九二・八

平人足

一・一九

・七一

六九・六

八二・六

土方

一・三五

・八三

六六・五

八〇・六

擔軍

|

・六四

|

八〇・〇

仲仕

二・〇七

一・二七

七八・一

八九・三

下男

×二・二〇

×一〇・二三

一二七・七

七六・五

下女

×一四・三八

×七・三一

八〇・四

七四・〇

農作夫

男

一・三五

・六四

九〇・〇

七二・七



漁	一 女	●九〇	●四〇	一〇〇〇	七六九
備考	夫	一四八	●九六	六八・五	六五八
×印は賄付月給とす。					

小賣物價指數 (昭和元年平均小賣物價を基準とす)

商 業	年 次	指 數	昭和九年		月
			次	指 數	
同	昭 和 元 年	一〇〇〇	一	月	七九二
同	二 年	九七四	一	月	七八七
同	三 年	九四九	二	月	七八九
同	四 年	九五・一	三	月	七八三
同	五 年	八六・六	四	月	七八六
同	六 年	七四・二	五	月	七七四
同	七 年	七四・一	六	月	七八三
同	八 年	七七・五	七	月	七七二
同	九 年	八〇・七		月	八〇七

小 賣 物 價

品 名		昭 和 九 年 十 三 月 中	昭 和 元 年
單位平均物價		を基準と せる指數	
1 穀類	指數總平均	—	—
精米	一升	〇・九	八二・八
櫻麥	同	・二七	八〇・九
大豆	同	・一八	七五・〇
大豆	同	・三三	七六・六
粟 (精)	同	・三三	一〇九・五
2 肉類	同	—	八〇・九
牛肉	百匁	・三八	八八・三
雞肉	同	・五七	八〇・二
豚肉	同	・三五	七九・五
3 調味料類	節	百匁	一・三六
鰹節	同	—	七三・二
味噌	內地製 (赤)	百匁	・〇八
味噌	朝鮮製 (赤)	同	・〇七
醬油	內地製	一升	・六四
醬油	朝鮮製	同	・五二
食鹽	朝鮮二等官鹽	一斤	・〇四
白糖	同	同	・二五
飲料類	同	—	八二・三
牛乳	一合	・〇八	六六・六
雞卵	十箇	・三六	九〇・〇

清	酒	一升	一・五五	八七・〇	綿縫糸(三合)	一棹	〇・五	四五・四
	藥酒	同	六・〇	六八・二	打	綿	一貫	三七・四
朝鮮酒	濁酒	同	六・八	六〇・八	6 燃料類		一	八九・〇
	燒酎	同	六・六	六〇・五	石油(上松)	一升	六・六	七六・五
麥酒(キリン)		一本	三・四	八二・九	薪(松)	一貫	六・六	八五・七
葡萄酒(蜂)		同	一・二	一〇〇・八	根炭	同	二・二	八〇・七
三ツ矢サイダー		同	二・九	八六・三	木炭	同	二・二	一〇〇・〇
シトロン		同	二・九	八六・三	白炭	同	二・二	九一・三
正喜撰		一斤	九・一	七九・一	石炭	一吠	一・四〇	一〇〇・〇
コンデンス		一罐	五・九	一一・三	7 雜		一	八三・八
ミルク(鷲)				七三・一	擗	寸	一袋	八〇・〇
衣料類				五三・三	和紙(半紙)	一帖	〇・五	八三・三
日本小巾白木綿		一疋	一・四七	九一・三	朝鮮紙(丈紙)	十枚	四・五	一一八・四
朝鮮白木綿		同	二・五四	七六・五	神戸用紙(丈封度)	同	二・二	五三・八
朝鮮麻布		同	三・六	九二・一				
支那麻布(大夏布)		同	五・五					

商 業

## 一五 貿易

貿易躍進 日韓併合前に於ける朝鮮の貿易状態は極めて貧弱なるものであつたが、併合後政府の産業上に於ける諸般の施設と民間の企業の勃興とに依り漸次増進の趨勢を示し、殊に歐洲戦亂以來急激の伸張を見るに至り、更に滿洲事變の影響とインフレーション景氣の刺激は、一層貿易の躍進を招致して居る。

### 貿易品價額比較

年次	輸出			輸入		
	輸出	移出	計	輸入	移入	計
明治四十三年	四、五三五 千円	一五、三七八 千円	一九、九一三 千円	一四、四四四 千円	三五、三四八 千円	三九、七八二 千円
昭和八年	五三、七七三	三五、八五四	三六、六七	六四、三六	三三、八七	四〇四、一八五

即ち明治四十三年に比較すると、昭和八年に於ては、輸移出に於て四割六分、輸移入に於て十割強の激増である。貿易の相手國は時代に依りて異なるも、近年内地との關係愈々密接となり、昭和八年に於ては輸移出の八割六分、輸移入の八割四分は實に對内地貿易である。

開港 朝鮮に於ける開港は仁川・釜山・新義州・元山・鎮南浦・群山・木浦・清津・雄基・城津・龍巖浦の十一港にして、京城・大邱・平壤には税關支署を置きて開港及陸接國境地方より保稅運送に依る貨物の輸移出入を取扱ふ。貿易額は釜山港第一位を占め、仁川港之に亞ぎ、此の兩港は實に朝鮮の二大關門にして、釜山港は内地朝鮮間貿易の樞要となり、仁川港は關東州・中華其他歐米諸外國貿易の中心となり、其他輸移出に在りては鎮南浦・群山・新義州・木浦・清津等、輸入に在りては新義州・鎮南浦・京城・清津・元山・群山・平壤等を主たるものとする。重要貿易品 朝鮮に於ける輸移出品は農産物が最も重要なる部分を占め、鐵産物及水産物も多いが、特にその大宗たる米は總輸移出高の五割強を占め、生絲、肥料これに亞ぎ、この三者は三大輸移出品に屬し、この外大豆・魚類・鐵・銅・牛皮・繭・金鐵・鐵鑛・石炭・生牛・砂糖・繰綿・木材・綿織物・海藻等は何れも重要なる輸移出品である。産業は農業を主とし、工業は尙幼稚なるを以て、輸移入品は多く工業製造品に屬し、就中綿織物は實に輸移入貿易品の大宗を爲し、其他絹織物・粟・鐵・機械類・肥料・石炭・繰綿及打綿・毛織物・礦油・木材・綿絲・砂糖等之に亞ぎ、輓近企業の發達に伴ひ、各種原料品の輸移入益々増進の趨勢を示して居る。

### 主要輸移出品價額 (昭和八年)

主要輸移入品價額 (昭和八年)

品名	價額	品名	價額
米	一五四,七〇六千円	砂	二,五三七千円
大豆	一九,二七五	牛皮	一,四二六
鮮、乾、鹽魚	一二,一五八	魚油	一,一七七
海藻	三,四五一	綿	六,四九九
繭	一,七七四	銅	五,七三二
生絲	一四,〇〇九	鐵	八,七五六
黑鉛	一,〇四六	牛	四,一六一
石炭	四,六〇二	洋紙	四,〇六二
金	一,八八二	木材	五,七五六
鐵	一,九〇七	肥料	一三,六〇七
米及粗	一,八三九千円	粟	二,七八七千円

貨 易	紙	絹	毛	支	揮	綿	線	マ	鹽	地	肌	砂	大	小
	類	織物	織物	那麻布	發油	織絲	綿及打綿	ツチ		下足袋	衣	糖	豆	麥粉

八、六一五	五、四一七	一八、四四五	八、五二八	一、二四七	五、四六四	六、八〇〇	九、五八三	一、四九三	二、七六九	二、一七三	七、六九六	五、八五一	二、七三六	三、九八九
-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

其	木	機	鐵	鐵	陶	鐵	セ	石	肥	綿	柞	燈	麥	清
他	材	械	電鍍板	條竿及板	磁器	筒及管	メント	炭	料	織物	蠶生絲	油	酒	酒

一七八、九九四	六、一三五	一一、五二二	二、九五二	七、〇五二	二、九二二	一、九六三	三、三四八	一〇、七三五	一一、四五三	四三、八〇一	九、四五二	三、〇一五	二、一一〇	一、二一八
---------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------

國別外國貿易額 (昭和八年)

國別	輸出	輸入	合計
滿洲國	四〇、五八八 <small>千円</small>	四〇、七六五 <small>千円</small>	八二、三五三 <small>千円</small>
中華民國	一、五九八	五、八五八	七、四五六
英領印度	一一五	七六三	八七七
英領海峽植民地	一一三	一一七	三三〇
蘭領印度	一〇三	二、一三七	二、二四〇
佛領印度	四	一	四
露領亞細亞	七九	一、二四四	一、三三三
暹羅	九	三二七	三三六
英吉利	一一	九八八	九九九
獨逸	七二〇	四三三	一、一五三
北米合衆國	二、七四六	二、一九五	四、九四一
其他	六、五八八	九、六四一	一六、二二九
合計	五二、七七三	六四、三六八	一一七、一四一



輸移出入品總額比較

貿易	種類	朝鮮							内地		臺灣		樺太		關東州		南洋群島						
		總額	輸	出	入	出	入	超過(△)入超	總額	輸	出	入	出	入	超過(△)入超	總額	輸	出	入	出	入	超過(△)入超	
外國	總額	一七,四三二	一,八六二	一,〇四六	一,九一七	三三〇	△二,五九五	△一,〇四六	三九六	五三,一四三	一七,六六六	三,四七七	△一七,八一〇	一五二	七四,二九九	一〇九,五三三	一〇九,五三三	一八,三三三	一〇八	二九三,三四五	二九三,三四五	一,〇三三	一,〇三三
	輸	五三,七三三	一,八六二	一,〇四六	一,九一七	三三〇	△二,五九五	△一,〇四六	三九六	五三,一四三	一七,六六六	三,四七七	△一七,八一〇	一五二	七四,二九九	一〇九,五三三	一〇九,五三三	一八,三三三	一〇八	二九三,三四五	二九三,三四五	一,〇三三	一,〇三三
內國	總額	六五,六七二	一,〇四六	三九六	四八九	六七九	△一,〇四六	△一,〇四六	三九六	一〇四,八八六	四一,五八七	四一,五八七	一〇四,八八六	四一,五八七	四一,五八七	四一,五八七	四一,五八七	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇
	輸	三三,八五四	一,〇四六	三九六	四八九	六七九	△一,〇四六	△一,〇四六	三九六	一〇四,八八六	四一,五八七	四一,五八七	一〇四,八八六	四一,五八七	四一,五八七	四一,五八七	四一,五八七	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇	一四六,三三〇
超過(△)入超	總額	△三,九六三	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六
	輸	△三,九六三	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六
差引超過(△)入超	總額	△三,九六三	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六
	輸	△三,九六三	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六	△一,〇四六

備考 (イ) 内地の内國貿易額は内地と南洋群島、臺灣及朝鮮間の貿易額を掲す。それ〴〵貿易月報による。  
 (ロ) 合計と内容と符合せざるものは四捨五入の關係による。

## 一六 金融

**金融機關** 現在朝鮮に於ける金融機關は、中央金融機關として朝鮮銀行券を發行する資本金四千萬圓の朝鮮及關東州、滿洲に勢力を有する朝鮮銀行あり、不動産金融機關としては資本金三千萬圓の朝鮮殖産銀行及東洋拓殖株式會社あり、貯蓄銀行業務を營むものに資本金五百萬圓の朝鮮貯蓄銀行あり、商業金融機關として普通銀行の朝鮮に本店を有するもの八、内地に本店を有するもの四あるが、朝鮮銀行及朝鮮殖産銀行も亦其特殊銀行業務の傍ら普通銀行業務を兼營して居る。尙信託業務を營むものに資本金一千萬圓の朝鮮信託會社あり、地方民の小金融機關としては各地に金融組合(都市金融組合)及金融組合聯合會あり、金融組合は總數六百八十五を算し地方金融上非常なる活動をして居る。この外、無盡會社、質屋、契等も下層金融機關として利用され、重要都市には手形交換所も設けられて居る。

**通貨** 現に朝鮮に流通する通貨は内地の各種鑄造貨幣及朝鮮銀行券である。朝鮮銀行券は朝鮮銀行法に依り發行せらるゝ兌換券にして、關東州及南滿洲鐵道附屬地に於ても亦無制限通用を認められ、其保證準備發行制限額は五千萬圓であるが、昭和九年十二月の最高發行額は實に一億九千九百三十萬五千圓に及んで居る。

## 金融機關

	昭和八年末		明治四十三年末			昭和八年末		明治四十三年末	
	本店	支店	本店	支店		本店	支店	本店	支店
銀行	總數		總數		金融組合	聯合會		聯合會	
朝鮮殖産銀行	一	二	一	二	聯合會	一	一	一	一
朝鮮貯蓄銀行	一	一	一	一	聯合會	一	一	一	一
普通銀行	八	一〇	四	三	金融組合	六	五	三	〇
	六	六	一	一	金融組合	六	五	三	〇
	四	四	一	一	手形交換所	九	一	一	一
	一	一	一	一	無盡會社	四	一	一	一

備考 朝鮮殖産銀行の明治四十三年末は農工銀行の計數を掲上す。以下凡て同じ。

銀行營業狀況 (昭和八年) (朝鮮外の計數は含まず)

	年	末	現	在		入	金	出	金	在	高	銀	純	益	金
明治四十三年	二	五	三, 五〇	三, 〇〇	三, 七〇	一, 〇六	一, 〇四	一, 〇七	一, 〇七	八, 七五	三, 〇	三, 〇	三, 〇	三, 〇	三, 〇
昭和八年	二	一五	一〇, 〇五	六, 八七	三, 〇	三, 一九	五, 〇三	三, 二五	六, 六八	八, 四	六, 〇	六, 〇	六, 〇	六, 〇	六, 〇
朝鮮銀行	一	二	五〇, 〇〇	三三, 〇〇	五, 〇〇	一〇, 一	一〇, 一	一〇, 一	一〇, 一	七, 六三	七, 六三	七, 六三	七, 六三	七, 六三	七, 六三
本店															
支店															
出張所															
公稱															
拂込															
積立金															
入金															
出金															
在															
高															
銀															
純															
益															
金															

金融

金融

朝鮮殖産銀行	一	天	30,000	30,000	11,100	5,730,500	5,730,500	3,300
朝鮮貯蓄銀行	一	天	5,000	20,000	170	3,570,000	3,570,000	1,100
普通銀行	八	天	3,600	1,400	3,700	4,136,600	4,136,600	1,000

朝鮮銀行券發行高及朝鮮殖産銀行債券發行高

發行高	正貨準備	保證準備	保證準備	制限外	朝鮮殖産銀行債券發行高
總數	發行高	發行高	制限額	發行高	發行高
明治四十三年末	20,163 千円	7,035 千円	1,118 千円	20,000 千円	960 千円
昭和八年末	14,126 千円	9,876 千円	4,433 千円	50,000 千円	253,483 千円

明治四十三年の朝鮮殖産銀行券發行高は農工銀行の農工債券發行高を揚上す。

銀行預金及借入金並に貸出高

預金	借入金	貸出金
總額	普通貸付	割引手形及荷爲替手形
明治四十三年末	5,000 千円 18,355 千円	2,303 千円
昭和八年末	3,913 千円 35,188 千円	23,700 千円

昭和八年末 × 六、六六六  
三〇〇、七三三 二二七、四七三 六三六、六一 × 九六、九二七  
五九四、三九九 四四、二八一

昭和八年末銀行種類別

朝鮮銀行	× 六、六六六 五七、六七九	一八四、〇五三	× 九六、九二七 一七六、七六八	× 九六、九二七 一六五、六〇九	一三、一五九
朝鮮殖産銀行	八四、七七七	三三、四五九	三五、三九三	三三、一四六	一四、二四七
朝鮮貯蓄銀行	三〇、一三九	—	八、五三〇	八、五三〇	—
普通銀行	一八、一三六	三〇、九六三	一六、〇〇〇	九九、三四	一六、八七六

備考 ×印は朝鮮銀行本店に於ける朝鮮に關係なき數字にて内書、※印は政府預金を示し外書とす。

銀行貸出金擔保別

總額	不動産	有價證券	商品	財團船舶 鑛業權 漁業權	及其 其他	信託及 信用
明治四十三年末	一六、六四五 <small>千円</small>	四、四七四 <small>千円</small>	九四六 <small>千円</small>	三、一八〇 <small>千円</small>	— <small>千円</small>	九、〇四五 <small>千円</small>
昭和八年末	五四一、七五四	一九八、九六三	三、四四三	五九、四〇〇	一五、四八〇	二七、四四九
昭和八年末銀行種類別						二〇九、〇一九

金融

金融

一四四

朝鮮銀行	八、八四一	一五、二四四	一七、六九七	一九、八二二	七、七七九	一〇、四九九	一〇、九三八
朝鮮殖産銀行	三五、三三三	一六、五六六	四、一六四	二四、八五四	六、五八八	四、九九八	一五、八、二三
朝鮮貯蓄銀行	八、五三〇	一、三九三	一、三六七	—	—	五、八六一	—
普通銀行	一六、〇〇〇	四、八五一	八、三三三	一四、七四四	一、二二三	六、二二一	三九、八七六

銀行比較(昭和八年、内地は昭和七年、純益金以外は年末)

本店	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地
支店及出張所	一一	六五二	五	一	一四
公稱資本金	一七九	六、六九〇	五八	一一	五六
拂込資本金	一〇一、〇七五	—	二八、三〇〇	二、〇〇〇	—
積立金	六二、八七一	一、六七二、〇〇〇	二〇、六八〇	一、四七五	一一、四三一
預貸金	二〇、三五八	九八三、六九一	三、〇四〇	一九八	一、〇三四
純益金	三〇〇、七三三	一一、七六四、五三二	一八二、〇〇二	二〇、六一八	二四三、九八一
貸出金	六三八、六八一	一〇、五八九、六三二	三七、九一五	一七、九四六	二〇一、三八三
純益金	六、五二六	一八〇、九二九	八六四	—	七三

銀行券發行高比較 (昭和八年末、内地は昭和七年末)

	朝鮮銀行券	日本銀行券	臺灣銀行券
發行現在高	一四八、二七六 <small>千円</small>	一、五四四、七九八 <small>千円</small>	四八、九九四 <small>千円</small>
正貨準備發行高	九八、七五四	四二五、〇六九	一三、七六八
保證準備發行高	四九、四三二	一、二一九、七二八	一五、三三六
餘裕高	五七八	(二一九、七二八)	(五、三三六)

(制限外發行高)

金融組合業務總況

	組合數	組合員數	拂込済出資金	基本金	預り金	貸付金	現金及預け金	積立金	純益金
明治四十三年末	三〇	三九、〇五一 <small>千円</small>	一 <small>千円</small>	一、〇〇〇 <small>千円</small>	一 <small>千円</small>	七九 <small>千円</small>	七六 <small>千円</small>	三 <small>千円</small>	一〇 <small>千円</small>
昭和八年末	六五一	一、〇〇三、六八八	九、八七一	四、〇三三	二四、三六五	一、三三、八七七	四、五、七〇七	一、五、八三三	二、六、六三

金融組合及信用組合比較 (單位圓)

金融

金 融

一四六

朝 鮮

臺 灣

樺 太

關東州及  
鐵道附屬地

南洋群島

(金融組合)

(信用組合)

(信用組合)

(金融組合)

(信用組合)

組 合 數 六五

三四〇

三九

二〇

三

組 合 員 數 一、〇〇三、六四八

三五六、九一〇

四、八三六

八、八八七

三三六

組 員 數 一五、二九、七五五

一三、四三三、四八六

七六四、九五〇

一四一、五〇〇

出 資 總 數 九、八七〇、八四一

一〇、五八三、〇七九

九三、九五〇

四三、九三七

準 備 金 一

五、九七七、三四〇

銀 三〇九、六三三

一

政 府 下 附 金 四、〇九二、〇〇〇

一

一

一

積 立 金 一五、六四七、〇五六

三、二六九、一四八

一

六七

借 入 金 五六、五四、八七一

九、一九〇、四一

一七五、〇二七

一

貯 金 一

三四、四三三、三九五

一

六、四五三

預 金 一三四、二八四、七八二

一

金 一、五九三、九九四

一

貸 付 金 一三三、八九七、〇三四

四九、一五、四三九

金 二、二九三、六〇一

一〇三、三三五

貸 付 金 一三三、八九七、〇三四

四九、一五、四三九

銀 八九五、〇一〇

一



剩餘金	—	六七、〇六	—	—
純益金	二、六八、五三	—	—	—
			金 二四、〇八七	—
			銀 二八、八七七	—

備考 朝鮮は昭和八年度末、臺灣は昭和九年二月末、樺太は昭和八年末、關東州及鐵道附屬地は昭和八年六月末、南洋羣島は昭和九年二月末現在とす。

### 金利調

#### 朝鮮銀行平均金利

明治四十三年	定期(年利)	分	四七	當座(日歩)	錢	〇・八	貸付(日歩)	錢	三・〇	當座貸越(日歩)	錢	三・二	手形割引(日歩)	錢	三・〇
	昭和八年		四五			〇・三			二・四			二・五			二・三

#### 朝鮮殖産銀行平均金利

融

預金 貸出

定期(年利) 當座(日歩) 貸付(日歩) 當座貸越(日歩) 手形割引(日歩) 年賦及定期貸付(年利)

明治四十三年

六・七分 〇・七錢 三・五錢 三・五錢 三・六錢 九・五一分

昭和八年

四・九 〇・四 二・八 二・八 二・七 八・三

朝鮮貯蓄銀行平均金利

預金 及 積金 貸付(日歩)

普通貯金(年利) 据置貯金(年利) 定期積金(年利)

昭和四年下

四・五分 五・八分 四・三〇分 二・八錢

昭和八年下

三・六〇 四・八〇 四・三〇 二・五

普通銀行平均金利

預金 貸出

定期(年利) 當座(日歩) 貸付(日歩) 當座貸越(日歩) 手形割引(日歩)

明治四十三年

五・七分 〇・九錢 三・七錢 四・〇錢 三・六

昭和八年 五・〇 〇・四 二・七 二・九 二・六

金融組合聯合會金利

預金 貸出

定期預金(年利) 當座預金(日歩) 普通貸付及當座貸越(日歩) 長期貸付(年利)

大正七年 六・〇分 一・三一—一・四銀 二・四—三・〇銀 六・〇—八・〇分  
 昭和八年 四・二 〇・七 二・〇—二・二 六・六以下

金融組合金利

預金 貸出

定期預金(年利) 貯蓄預金(日歩) 當座預金(日歩) 普通貸付當座貸越(日歩) 長期貸付(年利)

大正十三年 八・五以下 二・二以下 一・五以下 五・〇以下 一五〇以下  
 昭和八年 四・六位 一・〇位 〇・四位 三・一—三・五 九六位

貸金業者平均金利 (單位分厘)

金融

市場	昭和八年					明治四十四年				
	最高	普通	最低	最高	普通	最低				
内地	三三	二三	一六	四八	三三	二三				
朝鮮	四一	二八	二〇	六〇	三八	二五				
外地	三三	二三	一七	四九	三〇	一九				
朝鮮	三七	二七	一九	五六	三七	二八				
内地	四〇	二八	二〇	五四	三八	二四				
外地	三五	二四	一六	—	—	—				
市	八四	六三	四九	八三	六〇	四四				

備考 明治四十四年の欄中市場貸は大正五年の調なり。

無盡業比較 (昭和八年末、内地は昭和七年末)

本	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
店	三	三	三	七	九	一



## 一七 教 育

從來朝鮮に於ける内地人と朝鮮人との教育は其系統を異にしたるも、時勢の進歩は此の差別を撤廢するの必要を認め、普通教育に在りては國語を常用する者(主として内地人)と國語を常用せざる者(主として朝鮮人)との二種に分つも、特別の事情ある場合は相互に其入學を認むるの途を開き、實業教育・専門教育・大學教育及師範教育に在りては内鮮人の共學を原則とし、新に教育系統を立て之を統一するに至つたのである。

普通教育 國語を常用する者の教育は、小學校、中學校、高等女學校にして、官立小學校二、公立小學校四八三、公立中學校一一、公立高等女學校二六、私立高等女學校一ある。國語を常用せざる者の教育は、普通學校、高等普通學校、女子高等普通學校にして、官立普通學校二、公立普通學校二、一二八、公立高等普通學校一五、公立女子高等普通學校七、私立普通學校八六、私立高等普通學校一一、私立女子高等普通學校一〇ある。書堂は古來朝鮮に於ける少年子弟唯一の教育機關にして、部落又は個人或は教師自らの設立に係り、極めて不完全なる教育を施せるも、遽かに廢止し難き事情にあり、當局の指導監督に依りて改良されつゝあるが、未尙ほ全鮮に總數七、五二九あり、教員數七、九六四人、生徒數一四八、一〇五人に及ぶ。幼稚園は公私立併せて、園數

二八七、兒童數一四、九一八人ある。

實業教育及専門教育 實業教育、専門教育は内鮮人の共學を原則とし、實業學校は實業學校令及文部省令の當該規定に準據し、専門教育は専門學校令に依つて居るが、近來普通教育の普及に伴ひて實業及専門教育も亦勃興し、其教育機關たる諸學校は、官立専門學校(醫・高工・高農)五、公立専門學校(醫)二、私立専門學校八、官立實業學校(工)、公立農業學校(農・林)二八、公立商業學校(商)一六、私立商業學校五、公立水産學校三、公立職業學校三、私立職業學校二、官立實業補習學校一、公立實業補習學校八八、私立實業補習學校三ある。

大學教育 大學教育及其の豫備教育は内地の大學令に依り同令中文部大臣の職務は朝鮮總督之行ふこととなり、京城に綜合制の官立大學を設置し、差當り法文學部及醫學部を置き大正十五年度より開設した。其の豫備教育としては内地高等學校同様修業年限三年の豫科あり、大學の組織内容は内地の帝國大學と殆ど同様にして、内鮮人共學なるも、各學部に於て其特長を發揮すべき使命あるを以て、法文學部に於ては朝鮮の法律・制度・經濟及言語・文學・思想・信仰・風俗・習慣・美術・歴史等に關する研究を爲し、其他社會百般の事象に關し特に其推移變遷に留意して之が研究に努め、又醫學部に於ては朝鮮特殊の疾病・藥物等の研究に關し、大に其特色を發揮せんとして居る。

師範教育 師範教育は内鮮人共學を本體とし京城の官立師範學校の外、各道に之を置きたるも、昭和四年四月師範學校は當分官立とするの方針を定め、同四年六月大邱及平壤に官立師範學校を設置し、各道地方費立師範學校は何れも同六年三月限廢止し現在官立師範學校は京城、大邱、平壤の三である。

内地留學生 内地に於て勉學する朝鮮學生は四千八十七名(昭和八年末現在)にして、之を地方別にすれば、東京在學者二千七百八十二名、地方在學者一千三百五名である。東京に朝鮮教育會の朝鮮留學生督學部を置き、其指導監督を行ひ、總督府は内地諸學校卒業の朝鮮人の就職に付便宜を計つて居る。

教育 (昭和九年五月末)

學校數	學級數	職員數			生徒數	
		教員	兼務者	其他	總數	内地人
小學校	四五	二、三五	九	一〇	八、五三三	八〇、三七
普通學校	三、三六 × 五	九、九三 × 四	一〇、六六 × 一	五	六、六、九六 × 三、一八三	六、五、三三
簡易學校	三四	三、七	三	二	一、七、六九	二



實業補習學校	二	一八	三六	一五	二	四、六二	五	四、一七
中學	二	一七	三三	一三	一九	六、七五	六、三五	三四
高等普通學校	六	六二	五八	六	五	一四、〇六	一九	一三、九九
高等女學校	七	一五	六七	四	四	九、九〇	九、三六	五四
女子高等普通學校	七	二七	三五	七	一三	五、五〇	—	五、五〇
實業學校	八	三〇	三七	六	七	一六、三九	五、二二	一、〇六
師範學校	三	一五	二七	一七	六	二、〇〇	九、九五	一、三五
專門學校	五	一五	三〇	一〇	五	三、九二	一、七七	二、三五
大學豫科	一	八	三三	四	三	五、九	三〇	一〇
大學	一	一	一〇	一	四	三	四	一八
各種學校	四〇	一、三三	一、六〇	六	七	六、四七	一、四九	三、八五
幼稚園	六七	四八	六八	四	三	一四、二六	三、〇五	二、八五
書堂	七、五五	—	七、六四	—	—	一四、〇五	—	—

備考 ×印は間島琿春内各學校を示し外書、折弧内の數字は外國人にして内書なり。





教 育

實業學校

教員 七五  
生徒 一四、八〇

實業補習學校

教員 三〇  
生徒 四、三五  
學校 九  
教員 一五、〇八三  
生徒 一、三二、七六一

高等教育

高等師範學校

學校 一  
生徒 三九七

臨時教員養成所  
實業教員養成所  
實業補習學校教員養成所

水原高等農林  
附屬實業補習  
學校教員養成  
所あるが前校  
生徒中に含む

學校 一  
生徒 一、九四

專門實業學校

學校 五  
生徒 三、七〇

朝鮮内地臺灣樺太關東州及鐵道附屬地南洋羣島

一五八

一三三

六

一三三

二、五五

一

一

一

一

一

一

三〇

一

一

一

一

學科	朝鮮		内地		臺灣		樺太		關東州及鐵道附屬地		南洋群島	
	學校	生徒	學校	生徒	學校	生徒	學校	生徒	學校	生徒	學校	生徒
高等學校	1	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大學豫科	1	34	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大學	1	69	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
各種學校	1	74	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
盲學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
聾學校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

備考 内地の學校、生徒數は日本帝國統計年鑑による。大學の學生中には一部専門部生を含む。内地の専門學校欄の括弧内の數字は他學科を併設する學校の再掲、朝鮮の普通學校中には間島琿春所在のものを含む。高等學校大學豫科欄中△印は東京工業大學特設豫科にして其の生徒欄の\*印は高等學校尋常科生徒にして共に外書とす。

## 一八 宗 教

●**祭祀** 高麗朝以前の殿陵に對しては、特に國家の儀制として從來の規格に依り享祀の典禮を行ひまた先賢の學徳、烈士の節義を追慕し、且其徳化を報謝する爲めに書院又は祠宇を設立して享祀を行ふ儀制を公認せるもの全鮮を通じ四十四箇所あり、この外にも地方儒林又は名門の建設に係る書院祠宇が尠くない。

●**神社** 内地人の移住増加に伴ひ各地に神社を勧請するもの多く、成規に違由して創立せられたる神社數は昭和八年末には五十一に達し、地方著名の都市には概ね其存置を見るに至り、この外、神祇を勧請して一般公衆の禮拜に供する小設備の神祠は二百十六箇所あり、いづれも他日神社となるべきものである。

官幣大社朝鮮神宮は、朝鮮の總鎮守として、天照大神・明治天皇の二柱を奉祀し、大正十四年十月十五日鎮座祭を執り行はせられ、爾來例祭を十月十七日と定め、勅使を差遣せらるゝことに御治定相成つた。鎮座以來十年を經過し、神徳彌々高く、參拜者の年と共に増加し行くは尊き極みである。

●**宗教** 新羅・高麗時代には朝鮮の佛教は隆盛を極めたのであるが、李朝になつてから排佛崇儒の

政策を執り、寺院及僧侶に對して抑壓を加へた爲め、教勢衰微し寺院の荒廢に歸したものが頗る多い。李太王時代になつてから信教の自由を得、明治四十四年寺刹令の發布に依り、數百年沈衰したる佛教は茲に漸く蘇生の觀を呈し、現在朝鮮派の佛教としては本寺(本)三十一、末寺一千三百七、布教所百四十七、僧侶五千七百十二、尼僧一千八十、信徒十二萬八千餘人あり、宗旨は禪・教二宗である。

内地神道には天理教・神理教・金光教・神習教・大社教・扶桑教・神道・黒住教・實行教及御嶽教の十派あり、布教所二百四十四、布教者五百一、信徒八萬八千二百餘、内朝鮮人一萬五千八百餘人である。内地佛教の現在朝鮮布教に従事する宗派は眞宗・日蓮宗・淨土宗・眞言宗・曹洞宗・臨濟宗・黃蘗宗及天台宗に屬する二十六派にして、寺院百二十三、布教所四百四十一、布教者五百九十七、信徒二十四萬一千八百餘、内朝鮮人八千二百餘人を算す。

基督教は現在外國人の關係ある教派は朝鮮耶蘇教長老會・基督教朝鮮監理會・聖公會・第七日安息日耶蘇再臨教・東洋宣教會・救世軍及東京四谷宣教會基督教會の七派あり、又内地人新教基督教は日本基督教會・日本メソヂスト教會・日本組合教會である。現在以上の外東洋宣教會ホーリネス教會及基督同信會あり、朝鮮人側には朝鮮基督教會・朝鮮會衆基督教會あり、以上新舊各派を通じて現在布教所四千二百六十九、布教者二千六百四十七、内外國宣師四百四十四、信徒内地人

七千六百餘、朝鮮人四十一萬四千六百餘、外國人三百餘、合計四十二萬二千五百餘人に達する。以上を以て見ても、朝鮮に於ける民衆の宗教信仰心は未だ盛んなりと稱し難いが、民間には天道教、侍天教、其他各種の宗教類似團體があり、民衆の大部分は今尙ほ原始信仰たる巫覡の祈禱に依頼して居る。しかしながら、近來心田開發の運動が叫ばれ、寺院の淨化も行はれつゝあるを以て、今後朝鮮の社會には敬神信教の念が大に普及するものと期待される。

社 寺 及 教 會 數 (昭利八年末)

神 社 及 寺 院	神 社	神 祠	寺 院
	五 一	二 二 五	一 二 三
寺 刹 及 祠 院	一、三三八		
僧 尼	六、七九二	五、七二二	
	尼	一、〇八〇	

布教所・布教者及信徒數 (昭和八年末)



宗教	教派數	教會堂布教所及講義所	布教者數	信徒數
神道	一〇	二四四	五〇一	八八、三三九
内地佛教	一六	四四一	五七九	二四一、八〇八
朝鮮佛教	一	一四七	一四八	一、二八、〇四八
佛敎計	一	五八八	七四五	三六九、八五六
基督教	一六	四、二六九	二、六四七	四三、五八〇

神社及神職數比較 (昭和八年末、内地は昭和七年末)

宗教	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地
神社	五一	一一一、一五四	二三	一〇九	四一
神職	四八	一五、三七五	二五	二九	三四
神社又は社	二二六	一	九〇	一	一

布教所・布教者及信徒數比較 (昭和八年末、内地は昭和六年末)

宗 教

一六四

朝鮮 內地 臺灣 樺太 關東州及鐵道附屬地 南洋

神道

布教所	二四四	一四、五一	六	四二	六	二
布教者數	五〇一	一〇一、五九	一〇七	四三	二六	三
信徒數	八八、三三九	—	三三、三七	一六、三一	二〇、三七	一六
布教者一人に付信徒數	一七六・一	—	二七・九	三七九・三	九四・二	四三・〇

佛 教

布教所	內地佛教	朝鮮佛教	四一	一四七	七、一三一	一〇七	一一五	二二七	五
寺院其他	內地佛教	朝鮮佛教	一、三三	一、三三八	七、三三三	五	四	—	—
布教者數	內地佛教	朝鮮佛教	五九七	六、九四〇	五五、〇九四	二八	一一二	三三七	七
信徒數	內地佛教	朝鮮佛教	二四二、八〇八	一三八、〇四八	一六七、五三三	五九、四三八	八七、六四六	二三、二六二	—
布教者一人に付信徒數	內地佛教	朝鮮佛教	二〇八・〇〇	一八・〇〇	七六・六	五三〇・六	二六〇・一	三、三三三・一	—

基督教

布教所	四、三六	一、八一五	二五〇	二	五七	一四二
布教者數	二、六四七	二、五七四	二八〇	二	九二	一六七
信徒數	四三、五〇	—	五、三九九	一、二七二	七、二四九	四〇、八七四
布教者一人に付信徒數	一六〇・〇	—	一八三・六	一〇六・四	七・八	二四四・七

備考 ×印は境外佛堂にして外書なり。

## 一九 衛生

醫療機關 併合以來總督府は總督府醫院(昭和三年六月より京城帝大醫學附屬醫院と改稱)、小島島慈惠醫院(昭和九年十月より小島島更生園と改稱)の外、各道に道立醫院を設置し、警察醫及公醫を設けて一般に醫藥の便を與へ、大正八年各道に衛生技術官を配置し、飲料水改良方法としては諸市街地に水道を敷設し、或は敷設せしめ、又國費の補助を與へて共同井戸の掘鑿を奨励し、傳染病及獸疫の豫防或は除穢事業の如き亦常に勵行して、衛生機關の充實と社會衛生の進歩とを圖つて居るが、未だ醫療機關の普及は不充分にして、昭和八年十二月末醫療機關は、醫(病)院官立四、道立三五、公私立九五、計一三四、醫師内地人九六四、朝鮮人二、〇九四、外國人三二、計二、〇九〇、醫生四、二六七、限地開業醫三〇七、齒科醫六〇五、藥劑師三〇八、産婆一、五八六、看護婦一、五八六、傳染病院四、隔離病舎三八九である。

飲用水 傳染病の流行と飲用水とは密接な關係があるが、朝鮮に於ては一般に飲料水不良なるを以て、之が改良の必要を認め、併合以來毎年國費及道費補助の下に、地方をして水道の敷設及模範的公共井戸の掘鑿を行はしめつゝあり、現今水道の設備あるは京城・仁川・光州・清津・咸興・新義州・晋州・釜山・平壤・木浦・鎮南浦・群山・羅南・會寧・元山・義州・鎮海・大邱・海州・公州・清州・全州・江景・統營・浦項・春川・平康・金泉・城津・高興・麗水・馬山・莞島・兼

二浦・載寧・開城・大田・論山・裡里・順天・羅老島・慶州・密陽・三千浦・東萊・金海・蔚山・鐵原・興南・永興及新高山である。

公共井戸の改良に關しては國庫補助又は地方費により挿鑿改修を行はしめつゝあるも、尙ほ地方によりては河水、池水、灌漑用水等の不良水を飲用するものが尠くない。

傳染病 傳染病としては、コレラ、痘瘡、赤痢、腸チブス、猩紅熱、腦脊髄膜炎等の流行あり、當局は其豫防撲滅に力を盡しつゝあり、慢性傳染病中の癩及結核患者も多く、地方病には、肺チストマ、十二指腸蟲、マラリア等の分布廣範圍に亘り、又家畜傳染病中其慘害の最も甚大なるものに、牛疫、牛肺疫、口蹄疫、炭疽、氣腫疽の流行も尠くない。

### 醫療機關表 (昭和九年十二月末)

	官立	公立	計	總數	内地人	朝鮮人	外國人
病院	五〇	八六	一三六	一三〇一	一〇五四	一、二二八	三〇
衛生							一六七

鍼 術	按 摩 術	看 護 婦 婆	產 婆	入 商 營 業	齒 科 醫 師			限 地 醫 業	醫 生	醫 師			衛 生	
					其 他	開 業	官 廳 奉 職	總 數			其 他	開 業	官 廳 奉 職	
八八二	八六八	一、六七二	一、七六六	一九九	一〇	六四一	四二	六九三	二九六	四、二五五	一〇九	一、五八四	六〇九	
三八三	五九〇	一、二九三	一、三九六	八六	七	四五六	二二六	四九九	七九	—	五四	五六六	四三四	
四九九	二七七	三三九	三六八	一一三	三	一八二	六	一九一	二〇八	四、二五五	四七	九九六	一七五	一六八
	-	〇	二			三		三	九		八	三		

灸 衛 六七七 四三三 二五四

種痘施術生 二、二一六 一六〇 一、九五六

公醫 國費 三六一 一〇三 二五九  
道費 四八 三三 三六

醫師一人に對する人口 八、八三六人

醫生一人に對する朝鮮人人口 四、八六二人

醫療機關比較 (昭和八年末)

朝鮮内地臺灣樺太關東州及南洋群島

病院 一三四 四、一〇〇 二二一 二四 三三 八

醫師 二、〇九〇 五、二七五 一、三〇六 一一六 五四四 三四

限地開業醫及醫生 四、五七四 九二 四四一 七六 七八 五

齒科醫師 六〇五 一七、九八六 二九八 五四 一六〇 一〇

藥劑師 三〇八 二、八〇二 一三六 三八 一二三 一〇

衛生

衛生

産婆	一、五八六	五、六、五九二	一、五四二	一、五五	五八四	四二
看護婦	一、五八六	—	三四	八六	一、八三二	三四
藥種商	一、二一〇	二、八、一五六	二、七二二	六六	二、三〇〇	九
製藥者	四四	三、八三二	二二	一三	二〇	—
醫師限地開業醫	三、二一〇	一、二七三	二、八九七	一、五六四	二、二六五	二、二〇九
醫師一人に付人口	三、二一〇	七、二四	二〇、五九	一、八七九	六〇三	五九六九
醫師限地開業醫	三、三二三	—	—	—	—	—
醫師一人に付面積(方軒)	三、三二三	—	—	—	—	—
備考	内地病院中には隔離舎(七、三九八)隔離所(七五)を除く、樺太に於ける病院は病床十個以上のものを掲ぐ。	—	—	—	—	—

傳染病 (昭和八年中)

朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島	
患者	二〇、五四一	二、三、七五八	二、〇二二	九〇〇	五、五六四	一〇七
死亡者	三、三六九	二、七、七六一	四〇八	一五八	六五八	一〇
死亡率	一六四	二、三、四三三	二〇、二	一七、六	一一、八	九三
人口千人に付患者	一、〇〇	一、八七	〇、四	三、〇	四、〇	一、三
總數						



衛生	痘瘡			流行性腦脊膜炎			スチブラ			腸スチ			赤痢		
	死亡率	死者	患者	死亡率	死者	患者	死亡率	死者	患者	死亡率	死者	患者	死亡率	死者	患者
	一九・六	九六六	四、九二八	四五・一	五九	二八	六・九	三九	五六五	一四・〇	一〇七八	七、七二五	一九・五	五三三	二、八三三
	一四・九	五六	三七五	六一・〇	二二九	三五九	六・八	三六一	五、三〇五	一八・八	七、三二九	三八、五八	三七・四	一四、三二〇	三八、〇五一
	二〇・〇	一	一	八五・七	一八	二二	二六・七	八	三〇	二二・八	二四六	一、〇三五	二三四	三四	二四七
	一	一	一	一〇〇・〇	一	一	八・六	三	三五	一五・三	五六	三六六	二六・二	一一	四一
一七一	二三・三	一四九	六四〇	六〇・四	一九	四八	三・三	七	二五	一三・七	一一〇	八〇〇	九・二	二〇〇	二、一八三
	一	一	一	一	一	一	九・二	一	二	四・七	一	二二	二〇・〇	二	一〇



## 二〇 交通

鐵道 朝鮮の鐵道は國防並に統治上重要な使命を有し、殊に民度の向上、産業開發に密接の關係あり、半島を縦走する幹線は滿洲國の鐵道と連絡し、日滿交通の要路となり、尙ほシベリヤを經由して歐洲に達する國際交通の捷路を爲すものにて、其軌幅は概ね一米四三五耗の廣軌を使用して居る。

國有鐵道は、京釜線、京義線、湖南線、慶全線、京元線、咸鏡線、滿浦線、惠山線、白茂線、平元西部線、東海線、圖們線の諸線あり、咸鏡線清津會寧間、會寧炭礦線及圖們線は日滿聯絡の關係上滿鐵に委託經營せしめて居る。

右委託線の延長は三百二十八杆五分にして、之を除きたる朝鮮總督府直營線の現在延長は三千七十七杆四分である。

### 國有鐵道開業線 (昭和九年十二月十六日現在)

線	路	區	間	程	主要旅客 列車數
京釜線	京	釜	本線	釜	五
	京	仁	線	山	往復
	永	登	浦	仁川(海岸)	同
	三	一	〇	一	三
	〇	五	〇	五	〇

京		慶全線			湖南線		京義線									
咸鏡本線	元線	光州線	慶全北部線	鎮海線	慶全南部線	群山線	湖南本線	龍山線	新義州荷拔所線	博川線	平壤炭礦線	平南線	兼二浦線	京義本線		
○輸城	元山	龍山	松里	裡	昌原	三津	裡	大田	龍西江	新州	孟中	大同	平壤	黃海州	京城	
會輸寧	元山	潭陽	谷城	鎮海	晉州	群山港	木浦(海岸)	唐人里	新州村	新義州荷拔所	博川	勝湖	鎮南浦	兼二浦	安東	
八四·八	五三·七	二二·三	三六·四	一〇六·一	二〇·六	一一〇·一	二六·一	六·七	一·六	一·八	九·三	二三·三	五五·二	一三·一	四九·三	
二同	二同	一	一	一	一	三	三					四	四		五	
																同

交 通	東海線			平元	白山	惠山	滿浦線			咸鏡線				
	東海北部線	東海中部縣	東海南部線	西部線	茂山線	龍山線	价川線	滿浦本線	鐵山線	遮湖線	北青線	會寧炭礦線	川內里線	清津線
	安	慶大	釜山	西	白	吉	球	新	順	羅	會	新	○會	○清
	邊州	邱鎮	浦	岩	州	場	州	川	興	山	青	寧	潭	津
	高	蔚鶴	佐	長	山	白	龍	价	熙	利	遮	北	新	川
	城	山	川	林	羊	岩	登	川	川	原	湖	青	鷄	內
		(狹軌)			(狹軌)			(狹軌)		鐵			林	里
	一	一	一	一	三	七	二	一	三	四	九	一	四	九
	一	四	四	四	三	〇	九	〇	〇	九	一	七	四	〇
	四	一	二	六	三	〇	五	八	〇	九	七	四	〇	

圖 們 線

○會	寧	雄	基	二二〇・四
○上	三	峰	三峰橋中心(狹軌)	一・四
○南	陽	圖們橋中心		一・二

合 計

三、〇七七・四

備考 (一)〇印は委託鐵道にして合計に含まず。(二)列車數は直通主要列車のみを掲げ、  
 他は省略す。

下關、釜山間海上二百四十籽の聯絡船は鐵道省の經營に係り、現在景福丸・德壽丸・昌慶丸(各  
 三、六一九噸)の三艘を交替運航し、晝夜二回兩地發船、最短時間(晝航便)約八時間にして、尙  
 新羅丸(三、〇三五噸)、多喜丸(一、二二七噸)の二艘は旅客輻轉の場合及貨物運送の爲め不定期に  
 運航す。  
 私設鐵道及軌道の延長は、昭和九年十二月十六日現在の開業線一千三百二十二籽、未開業線二百  
 二十七籽、専用鐵道敷設線百五十九籽に達して居る。

私設鐵道開業線 (昭和九年十二月十六日現在)

經營者及 主たる事 務所所在 地	線 名	區 間	籽 程	軌 間	動 力	敷設免許 年月日	公 稱	拂込額又 は建設費
---------------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-------------	-----	--------------

朝鮮鐵道株式會社  
(京城)

線名	站名	距離 (km)	軌間 (mm)	動力	敷設年	許年月日	公稱資本額 (千円)	拂込額 (千円)	建設費 (千円)
忠北線	烏致院、忠州	九四・〇	一、四三三	蒸氣輕油	六、八、一六				
	慶北線	金泉、慶北安東	二八・一	一、四三三	同	八、一〇、一六			
黃海線	沙里院、水橋	六四・一							
	上海、龍塘浦	六六・五							
	海州、土城	八一・五	七六二	同					
	花山、內土	二二・一							
	新院、下聖	五六							
咸南線	咸興、上通	三〇・三							
	五老、咸南新興	二四・〇	七六二	同					
	豐上、長豐	二二・三							
咸北線	古茂山、茂山	六〇・一	七六二	蒸氣	八、六、二二				
小計		五四・六					四、五〇〇	一、七、五〇〇	

經營者及主たる事務所所在地

區間

行程

軌間

動力

敷設許年月日

公稱資本額は建設費

朝鮮京南鐵道株式會社 (天安)

天安、長湖院、安、長項棧橋

行程 一、四三三

動力 蒸氣

敷設許年月日 八、九、三〇

公稱資本額は建設費 一〇、〇〇〇

交通

小計 二四・〇  
 金剛山電氣鐵道 鐵原、内金剛 二六・六 一、四三 電氣 八、八、三 一三、〇〇〇 七、八〇〇  
 株式會社 (釜山)

新興鐵道株式會社 (興南) 咸南新興、赴戰湖畔 五〇・六 七六三 蒸氣、電氣 昭和 五、一、五  
 上通、舊津 六・八 七六三 蒸氣、ガソリン 六、九、五 } 八〇〇 六四〇  
 西咸興、天機里 一四・八 七六三 蒸氣、ガソリン

小計 二七・二

京東鐵道株式會社 (水原) 水原、驪州 七三・四 七六二 蒸氣、輕油 大正 九、三、三 三、〇〇〇 一、二五〇

南朝鮮鐵道株式會社 (光州) 麗水、寶城 九三・〇 } 一、四三 同 昭和 二、四、五 一〇、〇〇〇 八、〇〇〇  
 寶城、光州 六七・〇 }

小計 一六〇・〇

朝鮮瓦斯電氣株式會社 (釜山) 釜山鎮、東萊 九・五 七六二 電氣 明治 四三、六、二九 電燈瓦斯を含む 建設費を含む 一、一九七  
 六、〇〇〇 一、一九七

私設鐵道開業線合計 一、四九・三 一〇六、三〇〇 四六、四二七  
 内建 一、一九七

備考 一、此の外昭和二年十一月一日より國に於て借上げ運轉營業を開始せる川内里鐵道會社線龍潭川内里間四紮三分あり。

二、私設鐵道の取扱を受くる北鮮鐵道管理局線三百二十八紮五分あり。



主たる軌道開業線 (昭和九年十二月十六日現在)

經營者及主たる事務所所在地	區	間	料程	軌間	動力	許年月日	可建設費	記事
京城電氣株式會社	京城府内及郊外	三・五 <small>杆分</small> 米	一・〇七	電氣	三、六、一四、六三、五五 <small>明希</small>	最近の決算を計上す		
朝鮮瓦斯電氣株式會社	釜山府内	九・八	一・〇七	同	四三、五、一八 <small>明治</small> 四、三、九 四、六、一	前出	私鐵欄に計上す	
平壤府	平壤府内及郊外	二・九	一・〇七	同	二、七、三 四、三、三	最近の決算額を計上す		
咸平軌道株式會社	鶴橋驛、咸平邑内	六・一	一・〇七	輕油	一五、五、二			
京城軌道株式會社	東大門、蘆島	九・一	一・〇七	同	九、一六 六、九、一六 <small>昭和</small>			
其他		一・一	〇・六〇		九、二、七 三、五〇〇 <small>大正</small>			
軌道開業線計		七三・五			五、八三、二四三			

道・總督府設置の初、先づ道路の根本制度を樹つると共に道路網を確定し、此の道路網は昭和八年度末現在に於ては一等道路三十八線(市街地線二十)延長三千二百二十三杆、二等道路九十一

線(市街地線九線を含む)延長九千七百七十八籽餘を主要路線となし、別に三等道路四百六十六線延長一萬三千三百五十五籽餘を以て地方的脈絡を完うすることを期してゐる。以上總督府に於て直轄施行するもの、外、總督府は地方廳に對し補助を與へ、一、二、三等道路の修築改築を行はしめつゝあるが、尙別に國庫より補助を與へ、窮民救済土木事業として昭和六年度より工費三千三十四萬七千圓、又時局應急施設土木事業として昭和七年度より工費百五萬八千圓を以て一、二、三等道路の改修及修繕工事を起したが右實施の結果最近に於ける道路改修濟延長は、夫役施工に依るものを加へ一、二等道路一萬三千三百三十籽餘、三等道路一萬二百八十一籽餘、金山道路及林業道路延長百七十三籽餘に達して居る。

朝鮮に於ける自動車運輸事業は輓近急速なる發達を遂げ、其の營業者數は乗合自動車二百三十五、貨物自動車二百三十七、賃貸(貸切)六百三十五、計一千百七名に達し、營業路線延長(許可籽)は乗合營業路線二萬九千三百十五籽九分、貨物營業路線二萬七千六百四十一籽八分、計五萬六千九百五十七籽七分にして、鐵道延長籽數の約十二倍に達する。

港灣 現在定期航路は百八十線、三百三隻、十六萬四千四百八十九噸に達して居る。港灣は統監府時代釜山・仁川・鎮南浦・平壤・元山・新義州・群山・木浦・清津・城津・馬山の十一箇所の方々應急施設を行ひしも、釜山・仁川・鎮南浦の如きは工事半途に併合となりしを以て、總督府は更に

規模を擴大し水陸連絡設備を大成するの計畫を樹て、之を施行し、次で元山港、清津港及城津港の修築に着手し、群山・木浦・多獅島及雄基港、仁川・鎮南浦港の擴築を行ひ、城津港に貯木場、清津港に漁港の設備、雄基港の擴張工事を起工し、群山・元山・城津・木浦・多獅島及雄基の修築は既に施行を了し、目下清津・仁川・鎮南浦・城津港(貯木場)及雄基港の工事施行中なり、地方港灣の修築施設は主として地方公共團體に於て之を施行し、總督府は其緩急を計り、相當國庫補助金を支給して之が完成に努めつゝあるが、尙普通補助工事の外昭和六年度より窮民救濟土木事業、又昭和七年度より時局應急施設土木事業として國庫より補助を與へ漁港の修築を行つて居る。羅津港は滿鐵の經營を以て、目下其の工事を急ぎつゝあり、近く開港すべく、之が完成の曉は日滿交通上一大革命を來すものと期待されて居る。

### 鐵道線路行程及運轉成績

	昭和八年度	明治四十三年度	
停車場數	四三三	一〇五	
營業行程(程)	二、九三五・四	一、〇八五・七	
開業線(程)	二、九三四・四〇三	一、〇八六・一	
列車走行行程(程)	一七、九五七、七三三	三、三六三、〇三七	
		昭和八年度	明治四十三年度
總數	一七、九六三、四二五	二八、三〇八、九七四	
客車	六、六八八、五九四	九、〇六六、二五三	
貨車	一七、二七三、八三二	一九、二四二、七三三	

交通

鐵道收入及支出 (單位圓)

昭和八年度	收 入			支 出			差引
	總額	旅客	貨物	總額	其他	其他	
昭和八年度	5,356,331	3,454,555	3,264,766	2,525,766	2,966,666	3,055,322	2,300,709
大正十四年度	5,350,561	1,534,960	1,550,184	5,043,361	5,043,361	5,133,769	8,333,262
						諸棟民立 養金及缺 損補填金	

鐵道比較 (昭和八年度、内地は昭和七年度)

營業線(軒)	朝鮮			内地			臺灣	樺太
	百平方軒に付營業線(軒)	旅客	貨物	旅客	貨物	旅客		
營業線(軒)	1,333	2,935	1,537	1,003	343	0,95		
百平方軒に付營業線(軒)	1,333	2,935	1,537	1,003	343	0,95		
運 輸								
旅 客	23,383	781,238	1,735,105	1,344,198				
貨 物	7,548	61,737	515,885	601,790				
手小荷物(箱)	4,777	53,960	141,839	95,400				

地方鐵道比較

營業	損	營業	運輸收入	總數	旅客	貨物	手小荷物	費(千円)	益(千円)
關東州及 鐵道附屬地				四〇八、〇九三、七〇二	一三三、三八七、二五九	一七四、七〇六、四四三	旅客收入に含まる 一六、三六七、二六〇	二六五、〇八一	一六〇、八七一
樺太				一九、五〇八、七五〇	七、〇六一、五七五	一一、九五六、七三二		一一、七四三	七、七六六
朝鮮				四三、六二一、二四二	一九、一六二、〇四一	二二、八〇九、四二二		四九、二九八	一六、九〇七
臺灣				四〇八、〇九三、七〇二	一三三、三八七、二五九	一七四、七〇六、四四三	旅客收入に含まる 一六、三六七、二六〇	二六五、〇八一	一六〇、八七一
總數				一〇五八、四五八	七六〇、三三二	一、二七八、八九		二、四三九	(損) 三〇三
營業				一、二、三	一、二、三	一、二、三		一、二、三	一、二、三
費(千円)				四九、二九八	四九、二九八	四九、二九八		四九、二九八	四九、二九八
益(千円)				一六、九〇七	一六、九〇七	一六、九〇七		一六、九〇七	一六、九〇七

營業	運輸收入	總數	旅客	貨物	手小荷物	費(千円)	益(千円)
關東州及 鐵道附屬地		一〇五八、四五八	七六〇、三三二	一、二七八、八九		二、四三九	(損) 三〇三
樺太		一九、五〇八、七五〇	七、〇六一、五七五	一一、九五六、七三二		一一、七四三	七、七六六
朝鮮		四三、六二一、二四二	一九、一六二、〇四一	二二、八〇九、四二二		四九、二九八	一六、九〇七
臺灣		四〇八、〇九三、七〇二	一三三、三八七、二五九	一七四、七〇六、四四三	旅客收入に含まる 一六、三六七、二六〇	二六五、〇八一	一六〇、八七一
總數		一、〇五八、四五八	七六〇、三三二	一、二七八、八九		二、四三九	(損) 三〇三
營業		一、二、三	一、二、三	一、二、三		一、二、三	一、二、三
費(千円)		四九、二九八	四九、二九八	四九、二九八		四九、二九八	四九、二九八
益(千円)		一六、九〇七	一六、九〇七	一六、九〇七		一六、九〇七	一六、九〇七

貨物	二,三三三,三八五	六,三三,三三三	六〇四,三四七	九五,七七七,四四六
雜	八二,四七	五七,四〇七	六二,二九六	六,六五九,〇七八
政府補助金(円)	五,〇〇〇,〇〇〇(豫算)	三〇,三〇〇	一,二〇〇,〇〇〇	—

備考 臺灣は會社専用線の運輸數量收入を含まず。

南洋群島には鐵道無く軌道も一般交通用として敷設されたものは無いが、僅に官有としてアンガウル島に於ける燐礦運搬用のものと、私設としてはサイパン島、テナアン島に於て南洋興發株式會社の事業用のものがある。

道路延長

總	數	昭和八年度末	大正十三年度末
		道路網延長 <small>千</small>	道路網延長 <small>千</small>
一 等 道 路	二六,三五七,二八〇・〇	二二,六二二,七〇・六	一三,九二一,四二六・〇
二 等 道 路	三,三三三,〇三〇・九	二,九九〇,八二・三	三,二〇九,〇二七・九
三 等 道 路	九,七七八,九〇七・一	八,三四〇,一〇八・四	九,四五六,三三六・四
總	一三,三五五,三四一・〇	一〇,二八一,七九九・九	一一,二四六,〇七二・七
		道路網延長 <small>千</small>	既成延長 <small>千</small>
			一六,一九三,四五三・二
			二,四八二,三六二・五
			六,一一四,七六三・一
			七,五九六,三三六・六

面積一方里に付  
既成延長

—

一五〇

—

一三三

水運

船舶

昭和八年度末

明治四十三年度末

總數

隻數

總噸數

隻數

總噸數

登簿船

總數  
汽船  
帆船

一一,三六七

一九〇,四二七

一一,四五五

一四四,三三六

一,〇三二

八四,四九三

八八

九,三八二

二三五

五七,九二〇

四〇

七,八一五

七九三

二六,五七三

四七

一,五六七

不簿

登船

總數  
汽船  
帆船

一〇,三三六

一五,九四四

六,一四〇

六,七八六

三六四

三,六六六

一五二

一,六八二

九,九七一

一〇,一五八

五,九八八

六,一〇四

備考

帆船中には石數船を含み、石數船は十石を一噸として計上す。

交通

一八五

關釜連絡船

總 朝 鮮 行 行 數	昭和八年度			明治四十三年度		
	航海度數	乗客人員	貨物噸數	航海度數	乗客人員	貨物噸數
二、二六	七二九、四九	一七、五七七	一、〇八四	一七、四九六	七九、九二五	
一、〇六三	三五五、四四	一五、六五	五四三	七三、八五	四六、七五	
一、〇六三	三六三、九四五	四六、九八二	五四三	六三、四八一	三三、一六〇	
一九六	五三三	二六	一〇〇	一〇〇	一〇〇	

船舶比較 (昭和八年末、内地は昭和七年度末)

汽 船	帆 船	朝鮮			内地			臺灣			關東州			南洋群島		
		噸數	隻數	噸數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數
六、五八六	九、五八九	三、九三八	三、五八	八、八三九	三、三〇	五、四五	二、三九七	二、二七	一、三〇	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	
五九九	八七〇九	二六九	一五二	二六九	一五二	二六九	一五三	二六九	一五二	二六九	一五二	二六九	一五二	二六九	一五二	
一、三〇九	六四九	一、三〇九	六四九	九、一六五	八、三〇六	一、三〇九	六四九	九、一六五	八、三〇六	一、三〇九	六四九	九、一六五	八、三〇六	一、三〇九	六四九	



石數船	隻數	一二七九	三五七七	—	—	九六
	噸數	二二,四五一	四三,三八一	—	—	一,〇五六

命令航路比較

航路	朝鮮	臺灣	樺太	關東州	南洋群島
航路補助額	一七 <small>(昭和九年度豫算)</small>	一一	二〇	七	一三
航路補助額	八四九,〇〇〇	一三九四,一〇〇	三四二,〇〇〇	三三,〇一〇	六二八,二〇〇
航海度	數回	一二八七	六四六	一,〇一一	一六七六
使用船舶	隻數	七五	二九	三三	九
	噸數	四八,四九九	一〇,二五〇	三九,六〇四	—

備考 南洋廳命令航路は群島の交通大系を成すと同時に唯一の郵便線を成してゐる。

諸車比較 (昭和八年末、内地は昭和七年度末)

自動車	乗用	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
交通	?	齒,三三	三,一四	三〇	一,五〇一	—	—
							一八七

一貨物用	?	三五、九三六	七六七	一三六	五三三	
自動自轉車	?	三〇、五三三	三七七	五三	五四四	二一
荷積用馬車	四、四三三	二九七、九一八	二〇、一〇七	四、〇〇〇	一〇、一八七	一
荷牛車	一一三、七九八	九三、四四五	四八、四〇〇	五	一〇、一四三	二、四三三
手輓荷車	三四、一九六	一、六六〇、五九六	一三、七六七	一、三三九	八、六四一	一七三

備考 朝鮮の自動車及自動自轉車は資源調査の關係により發表し得ず。

## 二二 遞 信

通信機關 通信機關の配置は都鄙を通じて九百を超え、主なる地點には電信及電話を開始して舊來の面目を一新し、昭和九年三月末に於ては郵便局八十五、同分室十一、同出張所二、電信局七、電話局一、同分局二、郵便所七百十五、郵便取扱所十六、電信電話取扱所十三、電信取扱所九五、同出張所一、郵便切手賣捌所四千九百七十四を算するに至つた。

郵便爲替貯金 郵便爲替貯金業務に關しては常に朝鮮人特殊の風俗習慣に留意し、其改良發達を圖り、又郵便爲替貯金は地方に於ける一の金融機關たるを以て、近來一般に其利益を認めらるゝに至つた。

郵便振替貯金 大正七年、府又は府の區域を包含する學校組合公金受拂の爲に要する郵便振替貯金特別取扱を、同九年國債募集、賣出及元利金支拂郵便振替貯金特別取扱を開始せし以來、之を利用する者漸次多きを加へ、郵便振替貯金制度開始當時即ち明治四十三年に於ては僅に二百七十九人の加入者を有するに過ぎざりしが、昭和九年三月末現在に於ては二萬八千六百六十九人の多き上つて居る。

簡易生命保險 朝鮮に於て簡易生命保險事業は昭和四年十月一日より之を實施することゝ爲りた

るが、昭和四年十月事業創始以來四年五箇月を経過したる同九年三月末現在に於ける事業の成績は、契約件數五十三萬一千五百五件、保險金額九千七百二十二萬二千八百八十一圓にして、當初の計畫に比し遙に良好なる成績を示し、殊に朝鮮人の加入は全加入件數の六割五分を占め、最初より意外の好成績を示したのである。

航空 世界大戰以來朝鮮の航空界も異常なる發達を遂げるに至つたが、國防上及交通上より見て朝鮮の航空地位は最も重要性を有して居る。

朝鮮民間航空事業の概況 (昭和九年三月末現在)

日本航空輸送株式會社支所	出張所	一
同	出張所	三
同	營業所	一
滿洲航空株式會社出張所		一
飛行機	數	六
操縦士	數	二〇 (内地人 一七)

機	關	士	數	八	(内地人)
		士	數	九	(朝鮮人 一七)
					(全部内地人、内一名は操縦士に して機關士免狀の併有者とする)

朝鮮に於ては前記定期航空に備ふる蔚山飛行場には航空用無線電信局並氣象觀測支所を設置し、又京城飛行場には滑走路の構築・連絡道路の改修・航空標識の設置及夜間照明設備等を施して國際飛行場としての面目を一新した。新義州飛行場にて滿洲航空株式會社の新義州奉天線に連絡し對滿洲國との空の連繫に遺憾なきを期し、更に航空路の安全の爲には蔚山・黃澗・大田・天安・京城・沙里院・平壤及新義州の八箇所に航空標識をも設置せるが、尙將來に於ては既設航空路の一段の整備と共に、各主要都市に對する支線の設定も考慮されて居る。

電氣及瓦斯事業 昭和九年三月末現在に於ける電氣事業者數は營業用五十八(内開業五十六、未開業二)、官廳用十七、自家用九十五、合計百七十にして、又瓦斯事業者二ある。

近時北鮮地方には大規模の水力電氣會社が興り、西鮮及南鮮の電氣事業は合同せられ、電氣供給力に一段の力を加へて來た。

## 通 信 機 關

郵便電信電話局所

郵便私書函

總數

郵便局 郵便所 郵便取  
同分室及電信局 同分局 郵便所 扱所  
出張所 出張所 出張所

郵便切手賣捌 郵便筒

設備數 貸與數

公衆電話

明治四十三年度末  
昭和八年年度末

三零 一四三 一四三 二〇 一 八五 九四 三六 二二 三  
六六 六 七 三 七五 六 六 三 四 九七 六 七四 二 九二 二 〇 五 〇

×印は郵便受渡所

通常郵便物

引 受 通 數

總數 書狀 無封書狀 葉書 其他 無料

配達通數

明治四十三年度  
昭和八年年度

四七,〇八三,五〇 一五,四九,九五三 三〇,三二,〇〇 一六,二五,六四三 六,七五,四七五 八,四四,一五〇 三,一八,一七二  
三九,二七,二五七 六八,六六,〇六一 六,〇二,七五七 九七,九八,一三五 三,〇四,五九七 二,三三,〇七七 二,九一,五四一,五〇

小包郵便物

昭和八年年度

明治四十三年度

引 受 配 達 引 受 配 達

總 個

數 二二,二九四,四〇九

三,三二七,九二四

六六二,六五五

九二八,〇九七

書留 個數

二二八九、五八一

三二七四、八二〇

六五九、五一

九五、九四

價格表記

個數

四、八三七

四、三九四

二、二一四

二、一七三

金額(円)

八四四、四二八

六八七、三五四

三九九、二五

四〇五、九九七

郵便爲替

振出

拂渡

明治四十年度

總數

一〇八、二九四

二八、二八九、一九九

六〇二、五〇四

二二、五二八、九五九

內國爲替

一〇八〇、九二六

二八、三三、八八六

六〇〇、九五四

二二、四五二、四八九

外國爲替

二、〇二七

五五、三三

一、五五〇

七七、四七〇

昭和八年度

總數

三、四八二、一五〇

一〇八、五五七、二二

三、二六、八八八

一〇〇、四四、五八〇

內國爲替

三、四七四、六〇九

一〇八、二五四、四三〇

三、〇九八、八〇八

九九、七三、二五三

外國爲替

六、五四一

三〇、二七二

二八、〇八〇

七〇、一三七

郵便貯金現在高 (昭和八年度末)

逓信

昭 和 年 度	明治四十 三年 度		人 員	金 額	一 人 平 均
	朝 鮮 人	內 地 人			
加入人員	二,八四〇,六五六	一,〇四,〇七三	三,八八四,七四九	三,二〇六,四六五	一三〇・七〇
脫人員	六六七,三五六	三,四九,九二三	四,一五四,一〇〇	三,〇一六,四二〇	二八九・八四
拂込	二,一七三,三〇〇	二,八四〇,六五六	五,〇一三,九〇六	一,九〇〇,〇四五	五・四四三
拂出	三七,三八三,八一	四四,八〇七,一五四	八二,一九〇,九二六	七,四三三,三四三	一五・七七四
年度末現在	五・六〇二八	三・四一六	九・〇一九四		

郵便振替貯金

昭 和 八 年 度	明治四十 三年 度		人 員	金 額	一 人 平 均
	朝 鮮 人	內 地 人			
加入人員	一,〇一〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	二,〇二〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	一〇・〇〇〇
脫人員	一,〇一〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	二,〇二〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	一〇・〇〇〇
拂込	一,〇一〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	二,〇二〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	一〇・〇〇〇
拂出	一,〇一〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	二,〇二〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	一〇・〇〇〇
年度末現在	一,〇一〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	二,〇二〇,〇〇〇	一,〇一〇,〇〇〇	一〇・〇〇〇

電信



昭和 八年度	昭和 八年度		明治四十 三年度		發 信	着 信	中 繼 信	料 金
	歐 文	和 文	歐 文	和 文				
總數	六、四二九、五六八	五、九五〇、八三四	二、九四八	一、八五四、八〇七	二、〇五九、六四八	二、〇〇八、九二〇	三、〇五八、六六七	六、五〇七、三
諺文	四四六、一八四	四四一、八九六	一七五、三九三	一、七九九、六〇六	一、八五四、八〇七	一、七九四、八〇四	一、七九四、八〇四	一、七九四、八〇四
歐文	三三、五五〇	四六、八〇七	二九、四四八	三、四、五二〇	二、〇五九、六四八	二、〇〇八、九二〇	三、〇五八、六六七	六、五〇七、三
和文	五、九五〇、八三四	五、八六〇、九九一	六、四二九、五六八	六、三五〇、六九四	二、〇五九、六四八	二、〇〇八、九二〇	三、〇五八、六六七	六、五〇七、三
總數	六、四二九、五六八	五、八六〇、九九一	二、九四八	一、七九四、八〇四	二、〇五九、六四八	二、〇〇八、九二〇	三、〇五八、六六七	六、五〇七、三
諺文	四四六、一八四	四四一、八九六	一七五、三九三	一、七九四、八〇四	一、八五四、八〇七	一、七九四、八〇四	一、七九四、八〇四	一、七九四、八〇四
歐文	三三、五五〇	四六、八〇七	二九、四四八	三、四、五二〇	二、〇五九、六四八	二、〇〇八、九二〇	三、〇五八、六六七	六、五〇七、三

電話加入者

電話市內通話

昭和 八年度	明治四十 三年度	總數	內地人	朝鮮人	外國人
三六、三二九	六、四四八	六、四四八	六、一四	二五四	八〇
二八、三〇〇	三六、三二九	二八、三〇〇	二八、三〇〇	七、三三三	五五六

逓 信



預入口に付預金高	三・二六	一六・六六	三・八〇	三〇・八四	四一・八三	二五・九
人口千に付預入員	一・六六	六〇・九	一〇・一	三〇・四	二〇・九	三三・八

備考 内地の人口千に付ての預入員算出にて人口は昭和七年十月一日の推計人口による。

郵便爲替比較 (昭和八年度、内地は昭和七年度) (單位圓)

内 國 爲 替

振 出	口 數	朝 鮮		内 地		臺 灣		樺 太		關 東 州 及 鐵 道 附 屬 地		南 洋 群 島	
		口 數	金 額	口 數	金 額	口 數	金 額	口 數	金 額	口 數	金 額	口 數	金 額
振 出	三,四四,六〇	一〇六,二四,四〇	三,四四,六〇	三,四四,六〇	一,四一,〇四	四九,八四〇	一,四一,〇四	四九,八四〇	一,四一,〇四	四,六三,八七	五,八四,〇〇	六,一六	六,一六
拂 渡	三,二六	三〇六,八八	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六
口 數	三,二六	三〇六,八八	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六
金 額	三,二六	三〇六,八八	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六
口 數	三,二六	三〇六,八八	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六
金 額	三,二六	三〇六,八八	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六	三,二六

外 國 爲 替

遞 信

振出	朝鮮		内地		臺灣		樺太		關東州及 鐵道附屬地		南洋群島	
	口 數	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額
金	六、五四一	三三、七八一	三九、一七七	一、五六一、五四七	一〇、二六六	三〇〇、七九九	三、二五五	三〇、〇一八	四、〇五八	五二		
口 數	四六、二九	三九、八九	二九、四四	六五、六一	三六、二八	七九、五六						
拂渡	金	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額	口 數	額
金	七〇一、三三七	四、九三三、五九六	五〇、〇〇五	一〇、七七七	三三、八二六	四、三四九						
口 數	二八、〇八〇	一〇七、三三九	一、五四三	一〇一	六、一〇三	五三						
付 金	額	二四、六六	四六、五二	三三、四三	一〇五、五五	三七、〇一	八三、〇六					

備考 内地は振出欄に外國へ振出、拂渡欄に外國より振込を記入す。

郵便比較 (昭和八年度、内地は昭和七年度)

郵便取扱局所	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及 鐵道附屬地	南洋群島
	八三	一〇、三三	一六	共	三三	九

備考	郵便物		普通郵便物	
	小包	郵便物	配	引
内地の普通郵便物引受、配達數中外國郵便は發送、到着を計上せり。尙割合算出に當り内地の人口は昭和七年十月一日現在の推計人口による。	人口一に付引受	人口一に付配達	人口一に付引受	人口一に付配達
	0.1	0.1	0.1	0.1
	人口一に付配達	人口一に付引受	人口一に付引受	人口一に付配達
	0.1	0.1	0.1	0.1

電信比較

電信取扱局所	朝鮮	内地	臺灣	樺太	關東州及鐵道附屬地	南洋群島
發信	八三四	七、八二六	一九五	八六	三二〇	九
着信	六、四九、五六八	五、四三、〇〇〇	一、五三、三九八	八八六、二九六	三、三三、四六六	一、七二、三〇七
着信	六、三〇、六九四	五、七九、〇〇〇	一、六九、〇七一	八五七、九六四	三、〇九、五四六	一、五二、〇八二

逓信





二二二 社會事業

罹災救助　水害・風害・火災・旱害・雹害・冷害其の他非常災害の罹災者にして救済の必要ありと認むるものに對しては韓國併合の際、朝鮮各道の府郡島に下賜せられたる府郡島臨時恩賜金一千七百三十九萬餘圓の利子の十分の一は道費凶歉救済費及道費救恤費を以て、一面明治四十五年明治天皇及大正二年　昭憲皇太后崩御に際し慈惠救済の資として下賜されたる金額三十一萬五千圓及國庫の補助に係る金額十萬圓、合計四十一萬五千圓より成る恩賜罹災救助基金の利子を以て之に充て、種穀・種苗又は材料の給與、農具の貸付及給與、被服の給與、醫藥費の給與、應急救護を行ひ、基金設定以來昭和八年度迄に支出したる金額は五十九萬二千六百八十七圓に及び、非常の天災に際しては其度毎に被害の程度に應じ御内帑金の御下賜ありて救恤の資に供せられ、併合以來昭和八年度迄既に三十一回に互り、合計二十四萬八千四百圓に達した。

賑恤救護　老幼・不具・癡疾等生業を營むこと能はざる者の救護賑恤に關しては恩賜賑恤資金を設定し、大正四年御大禮に際し下賜せられたる御内帑金二十萬圓、昭和二年二月御大喪に際し下賜せられたる三十四萬六千二百圓及昭和三年十一月御大禮に際し下賜せられたる三十四萬六千二百圓を基本とし、之より生ずる利子を以て窮民救助を爲しつゝあり、現在被救助者一千四百七十七



名にして、何れも鴻恩に感泣して居る。行旅病人及同死亡人の取扱は、併合の際下賜せられたる臨時恩賜金三千萬圓分配殘額及其預金中の利子合計二十六萬三千六百五十圓餘を以て、大正六年四月行旅病人救護資金を設定し、人口稠密・往來頻繁なる都會地に於ては行旅病人又は同死亡人多き京城外二十二箇所には宗教團體・宗教家又は篤志家を選定し慈善事業として救護所を設けしめ、前記資金より生ずる利子を此等事業經營の設備及維持費の一部に補助して其の發達を期しつゝある。既に補助したる總金額は昭和八年度迄に設備費三萬四千六百十圓、維持費十七萬五百十七圓に達し、其事業成績は何れも相當良好にして、所在宗教家又は篤志家に依る自治的救護の基礎漸く確立せんとする傾向に在り、現在基金總額は三十二萬二千九百八十七圓餘に達して居る。

福利施設 公益住宅は京城・木浦・大邱・釜山・新義州・清津の六府及公州・海州の二邑に互り經營戸數約五百戸あり、公益市場は京城・仁川・木浦・大邱・釜山・馬山・平壤・元山・清津・咸興の十一府及び興南・羅南の二邑にして、市場數二十三箇所、店舖數二千餘、一箇年の賣上高五百三十七萬餘圓に達し、共同宿泊所は京城府・仁川府・平壤府及釜山府に於ては之を經營し、尙京城府に在りては和光教團に於ても之が經營を爲し、簡易食堂は釜山府に於て之を經營し、公益浴場・公益洗濯場・公益理髮場は各地に於て經營せられつゝあり、公益質屋は京城・釜山・木浦・大邱・平壤・清津・咸興・元山・新義州・仁川・群山の十一府及興南邑に設置し、國費より

補助金を交付し、助成指導を爲しつゝある。小額生業資金は朝鮮農家總戸數の大部分を占むる小農が、生産資金の融通を受くること困難なるため、已むなく貸金業者、地主等より、高歩の小口資金を借入れ一時の急を凌ぎつゝある實情に鑑み、昭和三年度より邑面をして小額生業資金の貸付事業を實行せしめ、小農者に對し低利且容易に小口の資金を融通し、以て生業を奨め、之に保護と指導とを加ふる爲、部落單位に依り一部落三十戸内外の小農を以て勤農共済組合を組織し、組合員の指導者として一組合に一名の勤農輔導委員を置き、勤勞主義の下に小農者の生活安定を圖りつゝありて、昭和八年度迄に實施したる資金總額は三百十餘萬圓に及び、勤農共済組合數は五千三、其組合員數は十四萬六千餘人を算して居る。

職業輔導、輓近西北鮮地方に於ては鐵道・河川・道路・港灣等大規模なる土木工事の増加に依り労働者の需要は激増の趨勢に在る。然るに同地方は人口稀薄にして労働者の不足を告げ、支那人労働者の使役を餘義なくせられつゝあり、一方南鮮地方は人口稠密にして窮民多く内地渡航者は逐年多きに上り、労働者の需給調節上面白からざる現象を呈せるを以て、總督府は之が對策の一端として昭和二年二月以降就職の爲旅行する労働者の運賃割引を實施し、之に依り其移動を容易ならしめ、又常時釜山に職員を駐在せしめ、漫然内地渡航労働者を朝鮮内に於ける勞務需要先に紹介就職せしむるの外、昭和九年三月以來大量的に南鮮過剩労働者を西北鮮地方労働需要先へ移

動紹介し、以て之が需給調節に資しつゝある。また朝鮮内職業紹介機關の充實を圖る爲、昭和三年度より公益職業紹介所に對し建設費五割以内經常費二割以内の國庫補助を爲し、事業を助成指導しつゝあるが、現在朝鮮に於ける公益職業紹介所は、府營のもの八箇所（京城・仁川・釜山・平壤<sup>二箇所</sup>・新義州・大邱・咸興、邑營のもの一箇所<sup>三箇所</sup>）、私設のもの三箇所ある。

兒童保護 總督府濟生院は孤兒の養育及盲啞者の教育を掌るものにして、前者は養育部及附屬農場に於てし、後者は盲啞部に於てする。感化院は不良性を帶ぶる年少者を收容して感化教育を施す機關にして、總督府に於て咸鏡南道文川郡明孝面松田灣元海軍防備隊に開設し、之を永興學校と稱して居る。

救療機關 總督府の施設に係る癩療養所を全羅南道小鹿島に置き、從來の道慈惠醫院は大正十四年四月道地方費に移管し道立醫院として診療に従事せしむ。道立醫院は各道廳所在地<sup>（京畿道・慶尙南道を除く）</sup>及仁川。水原。開城。公州。群山。南原。順天。濟州。安東。金泉。晉州。馬山。沙里院。鎮南浦。義州。楚山。江界。江陵。鐵原。元山。惠山鎮。城津。會寧。龍井。局子街の各地に設置し、尙水原醫院出張所を利川に、平壤醫院分院を鎮南浦に設け、醫院同様診療に従事す。又國境對岸地方に於ては東間島に在る朝鮮人の救療を目的とせる在間島龍井醫院・局子街醫院の外、頭道溝及百草溝等には信用ある開業醫に救療を囑託し、僻陬地在住朝鮮人及鴨綠江對岸地方に於ける朝

鮮人に對しては道立醫院に於て巡回診療を施行し、琿春地方に於ても亦同地の信用ある開業醫に救療を委託し、以て朝鮮人救療の途を講じて居る。

尙京城帝國大學醫學部附屬醫院・大邱平壤及咸興道立醫院に於ては、内地人助産婦・看護婦を養成し、卒業者の大多數は官公私立醫院等に就職し、いづれも相當の信頼を受けつゝある。

社會教化 地方改良としては、優良部落助成、勤儉貯蓄の奨励、篤志者の表彰を行ひ、郷校財産は専ら文廟の維持と社會教化事業の施設に使用し、社會教化としては、青少年の指導、巡回講演、郷約の復興助成、婦人の教養施設奨励、パンフレットの刊行、體育運動の奨励、活動寫眞の利用等を行ひ、社會教化に資しつゝある。

免囚保護事業 朝鮮の免囚保護事業は始政當時に在りては僅に一保護團體の設立ありしに止まりしも、今や官民有志の協力に依り昭和元年度末に於ては其數二十七を算し、此等の大部分は財團法人組織に進み、昭和三年七月内地に於ける新業統括機關輔成會に加盟し、内鮮間の聯絡と事業の發展を期圖する所あり、更に昭和九年二月各覆審法院管内毎に司法保護事業研究會を組織し、保護事業の統一・保護思想の普及並事業の改善發達上必要な事項を調定研究して之を實行に移し、一般施設と相俟て刑事政策の目的を達する上に顯著なる貢獻をなしつゝある。



朝鮮人	總數	一六,八八八	一六,三七七	二,三三	一,四七三	四三,八二六
	男	一一,五〇四	一一,二〇九	一,三六	七七六	—
女	五,三八四	五,一六八	八七	六九七	—	

罹災者救恤 (昭和八年)

	救		助		救		恤		金		額
	回数	戶數	實人員	延人員	總額	國費	道費	臨時恩賜救濟基金	御下賜金	義捐金	
總數	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
風水害	六	七,三六	一,二一	一,三二	四,九七	三,九六	五,三六	五,〇〇	二,三〇	三,九六	二五,九二
旱害	三	四,一五	一,五二	一,四二	一,四〇	—	—	一,一五	二,四七	—	—
電害	三	五,五	六,五	一,五	五,一	—	—	—	—	—	—
火災	五	六,六	一,五	三,三	八,三〇	—	—	—	—	—	—
其他	九	六,八	〇,五	四,三	五,四	—	—	—	—	—	—

救恤御下賜金

道	昭和八年		明治四十四年以後累計	
	新救護	全治	新救護	全治
總額	一三、二〇〇	二四、八七〇	一、四九四	四八、二一
京畿道	六四	三三、二〇六	五、四八三	一六、七〇六
忠清北道	二七五	四、六二〇	一、四六七	一三、七六三
忠清南道	一、二七六	七、五八七	五三六	一四、七五九
全羅北道	一、一五〇	一五、五六五	五八〇	一九、八〇八
全羅南道	四二	一七、三七三	二九〇	二八、一五一
慶尙北道	一六四	二三、四九三	—	六、四五七
慶尙南道	—	—	—	—
黃海道	—	—	—	—
平安南道	—	—	—	—
平安北道	—	—	—	—
江原道	—	—	—	—
咸鏡南道	—	—	—	—
咸鏡北道	—	—	—	—

行旅病人及行旅死亡人救護 (昭和八年)

道	昭和八年		明治四十四年以後累計	
	新救護	全治	新救護	全治
總額	二、〇四九	五七〇	七〇八	二五、七七八
男	一、五七五	四三二	四三二	三、九四四
女	四七四	一四八	二七六	八〇七

社會事業

公益職業紹介事業 (昭和八年)

一般紹介

總數	求人數		求職者數		就職者數	
	男	女	男	女	男	女
總數	二七,三三九	二一,六七〇	四九,〇七〇	一九,〇〇七	二六,九九八	六,八八八
內地人	五,七七六	二,八九五	八,五〇〇	五,八八六	二,六九九	一,三三五
朝鮮人	三,三三三	八,七三二	三,七五七	二,一四三	一四,三七九	五,五三三
日傭勞働紹介						
總數	二,六七〇	一五,七三三	二七,〇三〇	一九,〇〇七	二六,九九八	六,八八八
內地人	二,八九五	二,八八一	五,八八六	二,六九九	二,六九九	一,三三五
朝鮮人	八,七三二	二,八五二	三,一九四	一六,三〇八	一四,三七九	五,五三三

昭和八年	求人數		求職者數		就職者數	
	男	女	男	女	男	女
總數	三三,五七七	三三,〇五五	四八,六三二	四八,六三二	三九,三三四	四八,六三二
內地人	一六,三六七	一六,三六二	一六,六七七	一六,六七三	一六,三六一	一六,三六一
朝鮮人	一七,二一〇	一六,六九三	三一,七一一	三一,八五九	二三,〇二三	三二,三二一
日傭勞働紹介						
總數	二,六七〇	一五,七三三	二七,〇三〇	一九,〇〇七	二六,九九八	六,八八八
內地人	二,八九五	二,八八一	五,八八六	二,六九九	二,六九九	一,三三五
朝鮮人	八,七三二	二,八五二	三,一九四	一六,三〇八	一四,三七九	五,五三三



公益質屋事業

昭和 四年 度	昭 和 八 年 度	個所貸付資		貸付		受戻		流質		
		金額	口數	金額	口數	金額	利息	口數	元金	利息
四 八〇,〇〇〇	一五 三三,三五〇	四 四,四三三	四 一六,七六七	四 一,〇〇〇	四 三,七〇八	四 三三	四 一	四 一	四 一	四 一
昭 和 四 年 度	昭 和 八 年 度	四 八〇,〇〇〇	四 一六,七六七	四 一,〇〇〇	四 三,七〇八	四 三三	四 一	四 一	四 一	四 一

小農生業資金貸付事業

昭 和 四 年 度	同 八 年 度	貸付資事業實施		組合數		組合員數		貸付		組合員の貯金	
		金額	口數	組合數	組合員數	人員	金額	人員	金額		
一,七〇,四三三	三,一九,七六六	一,二六	三,一〇八	二,六五三	八〇,〇九三	一,五九,一三六	四,五五九	一〇〇,七〇〇	四,七六七	四,七六七	四,七六七
昭 和 四 年 度	同 八 年 度	一,七〇,四三三	三,一九,七六六	一,二六	三,一〇八	二,六五三	八〇,〇九三	一,五九,一三六	四,五五九	一〇〇,七〇〇	四,七六七

社會事業施設比較

朝鮮	内地	臺灣	樺太
三	四三	一	一
(六九三)	(七七)		

社會事業

救護事業

(イ)一般救護

方面委員

養老事業

(ロ)特別救護

軍事救護事業

災害救護事業

窮民救助事業

兒童保護事業

感化事業

貧兒教育事業

兒童健康相談事業

特殊教育事業

託兒事業

育兒事業

四一

一一

五

六

三〇

二

二

二六

四三

三

七

四

三

三

二三

四九二

?

?

?

?

?

?

一四六九

六二

三九

?

?

?

?

二四

三三六

?

?

?

?

?

?

一五二

一

一六

?

?

?

?

四

三

?

?

?

?

?

?

二

|

|

|

|

|

|

二



社會事業

二二四

社會教化事業	七五	?	?	?	
社會教育事業	二〇	?	?	?	
青年訓練所	四七	?	?	?	
隣保事業	五	一二五	二		
人事相談事業	三	一四六	二三		
婦人保護		二三			
司法保護	二七	九〇三	五四		
釋放者保護事業	二七	八二	五四		
少年		八三			
其他		二六九	七七		

備考 朝鮮は昭和七年五月末、内地は昭和六年度末、他は昭和七年度末現在調なり。

社會事業聯絡調査研究及助成機關欄の内地、臺灣の括弧内の數字は助成機關及方面委員後援數なり。

行旅病人及行旅死亡人救護比較

行旅	病行 人旅				朝鮮	内地	臺灣	樺太
	救護延日數	年度末現在	死者	全救護を離れ た者				
死亡人	二五七、七八四	七〇八	七四八	五七〇 五六八	二、四四九	七、二四六	二、〇三三	二、三三
	四、七五一	二、九八五	二、四五八	四、六六六	一	一〇七	一七六	四九

朝鮮は昭和八年、内地は昭和六年、其他は昭和七年調なり。

社會事業

朝鮮現勢便覽終

昭和十年九月十五日 印刷  
昭和十年九月二十日 發行

朝鮮總督府

印刷所

京城府長谷川町七十六番地  
近澤印刷部